
『精霊よ、奏でるシレイネの喜びよ』

石川零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『精霊よ、奏でるシレイネの喜びよ』

【Nコード】

N5914Q

【作者名】

石川零

【あらすじ】

少女シレイネは音楽家の道を志し、世に出るために精霊の力によって少年の姿を得た。七聖霊獣たちに守護される古王国ロートレグアンの宮廷で、楽士シレイネの奏でる音色に興味をひかれる王子ガイートル。彼は世継ぎ争いにかかわる重大な課題を楽士に押し付け——否——頼み込んできて——？ 角川ビーンズ大賞（第9回）

二次選考通過作

o u v e r t u r e

機織り女神シレーネの可憐な頬のような青白い月から、清廉な光の帯がのびて手元を照らしていた。古びた象牙の鍵盤のうえを、小さなシレーネの指は無心にめぐって心のままに音楽を奏で零す。いつでもこんな風に弾くことができた。片時も離れずに音楽とともにあれたら。象眼絵の聖人たちに囲まれた祭壇下で、シレーネの祈りは無色硝子の天窓の向こうに浮かぶ月へと向かう。

（お月様がきれい——それを音にして、いけないことがあるかしら）月シレーネは冷たくて優しくてのびやかな音——。高音部でトリルを鳴らし、物語を紡ぐ音階が流れ落ちる。

誰も月を音楽にしていけないなどとは言っていない。けれどシレーネはこんな深夜に、うすら寒い無人の教会でしか、この音楽を楽しめない。彼女の父のように大勢の前で人々を楽しませることはできない。してはいけないのだ。なぜなら、それは、シレーネが娘だから。

（どうして女は音楽家になれないの……？）

あんまりだ、と、この時間が楽しければ楽しいほどいつもの疑問がもたげるけれど。

シレーネの心を救ってくれるのも目の前で鳴っている音楽だった。（機織り女神様を守護してたという月の精霊はきっとこんなふうにほほ笑むの）

半音階の謎めいた音色をのぼらせて。

「……心奪われる」

はつと振り返ったところに、人が立っていた。

「もつと弾いてくれないか？ わたくしはその音に誘われてきたのだから」

古風な装束の裾まで届く長い長い紫がかった白銀の髪をさらりと

ならして首をかしげた。男とも女ともつかない中性的な顔付きと声質にとまどつて、シレイネはまばたいた。

教会の方かしら……。咎められるのでも、邪魔されるのでもない
と知ったシレイネは、貴重な時を無駄にすまいと鍵盤へ向き直る。

「素直な音楽だね」

父と母以外の人に褒められるのは初めてで、恥ずかしくも頬が赤くなるのがわかるくらいうれしい気持ちを感じる。後ろでシレイネの音楽を聴いてくれているその人の面影を脳裏に浮かべて、不思議なことに気づき、次第に弱くなる音量とうらはら瞳を大きくする。天窓から射す月の明かりは鍵盤の周りにしか届いていないはずなのに、その人の輪郭は淡くおぼろな燐光をまとうていなかったか――。
音楽をつづけながら振り返ったシレイネは、そこにとっても美しい存在を二度見いだした。

「あなた、もしかして、精霊なの……？」

「ああ、勘のいい娘だね」

「ロートレグアンの精霊は人懐こいって謳われているから、昨日、街道で一緒になった相乗りの人たちと冗談をかわしたばかりなの、精霊と金貨の一山、お目にかかりやすいほうを考えたら、ロートレグアンでお金儲けはしないほうがいいって」

「冗談の陽気さが旋律に生まれ変わる。」

「ほんとうに精霊ってどんなお花よりもきれいなものね。もう三度と振り返るのが怖いくらい」

「うつくしいところに居れば、ね。そなたは、旅の途中か。残念、ロートレグアンの民ならば、日がなその音色を聴いていたいものだが」

「ヒエロフの都へ父が呼ばれて行く途中なの。さては精霊さんの言う、うつくしいところって……水の国ロートレグアンの王都ルナーグのことかしら。苔むし水中花の咲く緑水盤のようなルナーグ。芸術都ルナーグ。わたし、都には行ったことがないの。すぐ近くの街で生まれたのだけれど。物心つく前にロートレグアンをはなれて、

今回も素通り」

弾きながら肩をすくめて、横を向いた。「そうじゃなくても」と、首を振る。

「嬉しいことをおっしゃってくれたけど、どうせ日がなは無理だわ。父さんにおこられちゃう。人前では弾けないの。精霊さんは人じゃないからいいわね？」

「弾いていけないのはなぜ」

「女だからよ。女性の音楽家っていないでしょ？ 芸術都ルナーグにさえ一人もないって知ってるわ。わたし調べたんだもの」

「たしかに」記憶を探る間を置いて、精霊が相槌する。「いないな」その真面目さにちよつと可笑しくなりながら、シレイネは滑稽なほど悲劇がかった旋律を重々しく鳴らした。

「作曲は女性の領分じゃないなんて、不公平よね。それを考えるとわたし、人生悲観してしまうの。だってわたし、こんなに音楽が好きなのに。ほかに上手くできることなんてないのに。わたしが男の子だったら、父さまは張り切って宮廷に売り込んでくれただろうし、一緒に音楽ができて嬉しかったと思うわ。わたしだって日がな鍵盤^{クラヴィア}に触れてたい」

旋律はシレイネの声とともにだんだんと力をなくしていった。うつむいたシレイネは鍵盤の重さに引きずられるよう、気分を本当に沈める。急に現実が押し寄せた。音楽は少女の泣きべその中にかき消えてしまった。

「娘よ、そなたの姿を変えれば、そなたの音楽は鳴りつづけるのか？」

清かな空気がそつとかたわらに立ち、シレイネは涙に汚れた顔を上げた。

「ええ？」

女性的な細い首をかしげて精霊はシレイネの曖昧な返事を聞く。淡い薄紫の後光をのせた頭越しに、異様にかがやく夜空の月が煌々と目をくらませる。

「男の子に生まれればよかったと？」

「……ええ」

涙を飲み込みながら、シレイネはうんうんと頷いた。さつき高ぶった感情が、まだ引いていなかった。

「そうなら良かったのにつて、いつも思うわ。だってわたしは音楽がしたいのだから！」

ひとつ静かに、精霊はうなずく。

「それなら簡単なことだ」

「え……」

その意味を問う間もなかった。

「そなたの音楽を祝福しよう。精霊の加護は、そなたに自由を。そなたの音楽は、精霊に歓びを——」

鍵盤琴の音と同じくらい心地よくうつとりさせる囁きがシレイネの周りを取り囲む。「精霊さん、でも、待って……」戸惑うつぶやきは声になることがなかった。

紫がかった蜜色の光りにまばゆく包まれ、耳にしたことのない天上の調べを聞いたと思うと、シレイネは星空の裏側にあるという神々の世界へ誘い込まれるように眠くなり——、しんとした教会の暗闇で一人、瞼をとじた。

Mov・1

1

新型の鍵盤琴もこころナーグではもうすでにこれほど装飾的に仕上げられているのか――。それが、シレイス・アベールが宮殿大広間に入ってきて初めて思ったことである。

王室楽団員の手にする楽器も、また衣装ひとつとってもさすがに洗練された贅沢さと品に溢れている。おそらくは演奏の腕もその様子に恥じないものなのだろう。螺鈿細工のびっしり描かれたクラヴィーアの屋根を慎重に上げ、任されている調律作業にとりかかりながら、シレイスは少しの緊張を、少年らしい潔癖さがにじむその口元に刻んだ。

彼の集中を乱すのは、大広間に仕事があつて集まっているとは思えない侍女たちのそこから聴こえる黄色い囁きだ。

――あの人、可愛い。

――ねえ見てあの細くて長い手の指！ それに真面目な横顔がすてき。

音合わせのための小曲を奏できれば、ひそやかなりにいつそう高くなるさざめきが、女たちの興奮を伝えた。

（曲を聴いてるわけじゃない）

クラヴィーアに近づく前、楽団員へ楽譜を配っていたあいだから彼女たちの興味は彼に注がれていた。音色などは二の次である。これについてはどこでも同じだ。芸術都ルナーグには芸術を受け取るほうにも高尚な空気が流れているものと思っていたシレイスの期待は、裏切られはらと剥がれ落ちていく。試しに子供用の練習曲をわざと崩して弾いてみたところで、うつとりと聴き入る女たちの表情は変わらない。

頬に張り付いた黒髪をかきあげて立ち上がったシレイスは、父に鍵盤を代わって広間の端へいく。人の中に控えて立つと、一人の美

少女といえる容姿をした侍女がそれとなく寄ってきて、何なのかと構えるシレイスにそつと耳打ちをくれた。

「お紐の結び向きが反対ですわ、楽士さま」

はつとして下を見ると、礼装揃えのひとつ、鳶色の短胴着の合わせで結んでいる飾り紐の流れが左右逆、女性の結び方になってしまっていた。急いでシレイスは間違いを直す。――昔からの癖でつい、と言い訳しそうになったが、あやうく飲み込み、神妙なまばたきをしてやりすごした。

短い礼の言葉を言い終わらないうち、侍女は目ざとい目付きを細めて微笑み、すと人垣に紛れて離れていく。ほかの子たちのような色目づかいはいはかけらも漂わせていない。

「サアン又がどうかした？」

侍女の残り香に興味を引かれているシレイスの耳を、今度また反対側から話しかける男の声が突然落ちてくるように打ったので、少年の身体は驚いて反転した拍子に回り過ぎてその人にぶつかってしまった。

よろけかけたシレイスの腕を支えるように取った男が、大丈夫？ というように、きょとんと見下ろしていた。掴まれた部分から余計なことを気取られやしないかぎりとして身構える。警戒は理屈の出てくるところを回転させる。相手の帯剣姿から近衛騎士かなにかだと思つて、シレイスは隙のないよう丁寧に弁解を口にする。

「……すみません。何でもありません。僕は拳動不審でしたか。いえ親切な方がいたので、ぼうつとしてしまっただけです。何故ぼうつとしたかというと、その彼女の声が綺麗だったからで――」

整然とつながれる言葉に相手は面食らったよう目を開き、

「いやごめん、こっちのほうは何でもないんだ。君はイオニア・アベールのご子息だろう、さつきから見てたよ、不審者扱いなんてしない、安心して」

笑いながらシレイスの言葉をおしとどめた。その男の額にかかる、くすんだ橙色の髪の色が何かの記号だったような気がするが、とっ

さに思い出せずシレイスはじろじろと見上げるばかりになった。目立ちたくない意志には反していた。

「さつき君が弾いていた曲、最初のやつね、……こういう旋律があったらどう？」

言いながら見せた右手の3、4、5、1の指を繰り返し宙に押し込む仕草は、クラヴィーアの弾き真似らしかった。

「ラシドミ、ラシドミ、ラシドミ……のところですか、はい」

「耳にひっかかったんだ、独特の拍子が。どこから取り入れたものだったりしないかな」

「あれはスパードン帝国南部ラミスタ地方の伝統的な舞踏拍子を模した箇所です」

「ああ……」

透き通った青の瞳を細める。何かを懐かしむ顔をして、頷いている。怪訝に窺うシレイスの前でそれ以上閉じこもることなく、笑みをひらいて誤魔化した。

「そうなんだ。ありがとう。……あの曲、君の自作？」

「はい」

「へえ、すごいな。みんなの耳を捉えてたから、そのうち君も父君のように引っ張りだこの人気者だな」

「……」

沈黙で答えたのは複雑な思いにとらわれたからというわけではなかった。

相手の男ではないが、しつこいひっかかりがちらちらと脳裏を踊る。（どこかで見たような気がする）

「トール、陛下が呼んでる」

後ろから同僚らしい銀髪の青年が彼をつかまえに歩いてきた。

「ああ、今いく」

「誰と話し込みに持ち場を逃げたんだい……、おつ、これはさつきから綺麗どころの注目を惹きつけまくっている紅顔の楽士。何だずるいぞトール、俺だって彼の両手が繰り出す乙女籠絡の技に通じた

い。習得して夜毎に使いたい」

「おまえじゃないんだから、妙なこと聞いてないよ」

ぬつと近づいた波打つ銀色の頭を片手で鷲掴みに押さえて、トールと呼ばれた騎士は苦笑いしながらシレイスとの位置関係を守った。「この人に寄られるとオヤジ根性が感染るから気をつけてくれ。何を見ても場末の酔いどれオヤジみたい若い女の子泣かせな発想しかないから」

「僕は」

喉を強ばらせてシレイスは声上げる。

「男ですから。気にしません」

堅い声音に面喰らったような騎士トールの腕の下から、造作のよく整った顔が覗いていた。美麗な顔の作りがもつたいないほど中身はオヤジであるという騎士が、にやにやと崩した相好を向けてくる。「うん、男なのは見ればわかるよね。さては君もスキモノ仲間か！むしる宣言か！ 同士よ！」

「違うと思うぞキューグ。見かけによらない生き物はお前だけで充分なんだよ。楽士もこんな奴に気を使っちゃダメだ、繊細な芸術家が俗世のノリに染まったら困るって話。ほら、父上に呼ばれてるんだから……」

押しやり歩きだす。その背中にシレイスはつい声をかけた。

「よければ民族舞踏の原曲もお聴かせできます」

振り返った騎士トールは一瞬虚を突かれたよう立ち止まり、

「うん、聴いてみたい……」

「トール君が踊るとドタバタすぎて城の底が抜けるからよしたほうがいい。ちなみに俺がご婦人のために全力で踊ると腰が――」

「うるさい、いくぞ」

剣の鎖を鳴らして騒々しい風が過ぎていった。彼らは彼らで浮ついた侍女たちの興味深げな視線に打たれつつ、言っていた通り大広間の奥の玉座へ向かっていく。

橙の髪 of 騎士トールが壇上に上り、王の隣に座ったのを合図のよ

うにして、楽団を背後にしたシレイスの父が上座へ挨拶を申し上げる。

「国王陛下、ガイトール王子殿下、本日の音楽催に招待いただき、御前にての披露目の栄誉を賜り、恐悦至極に存じます——」

（ああ……）

シレイスは宮廷に楽士を迎える拍手の中で、やっと先程来のひっかかりを脳裏から放り出すことができる。

（王子だったのか）

あの特徴的な髪の色。一週間前ロートレグアンへ入ってから、風聞や肖像画や、遠目に実物を眺める機会にみとめていた色彩であった。背格好もそうだし、銀髪の警護騎士は最初から王子の愛称を呼んでいたわけなのだ。

……のだが。

（雰囲気がなくて気づかなかった）

シレイスが経験してきた幾つかの国の宮廷において王族というのは、気安く話しかけてきたりはしない人たちだった。

それでなくともここは大陸で、一、二をあらそう古い歴史を誇るロートレグアン王国。精霊に愛される水中のゆりかご。祝福された古王国。君臨する王家の血筋といえば、精霊という、人ならざる存在の中でももつとも高位にあるという聖霊獣と、特別な縁を持ち、守護を約束された家系なのである。その次代の継承者が、品性健やかならざる護衛騎士を引き連れて一介の楽士見習いに気さくに寄ってくるとは普通考えない。

だがそこで、旅の途中聞こえた、ガイトール王子に関する評判のひとつがシレイスの頭をよぎる。一粒種であるのに立太子されていない世継ぎの王子——彼の不安定な身分と理由のことを。市井の口さがない噂、曰く……いいや、シレイスはしかしそこから先の話に興味がなくて、耳を閉じていたので、詳しくは知らない。いずれにせよ、病弱そうにも見えない身体に成長しながら未だ王太子と認められていないのは、噂にとどまらない理由があるはずではあった。

父の指揮する音楽がはじまり、聴き入る聴衆に満足げな溜息が広がってゆく。音楽催に集いしロートレグアンの王侯貴族たちを夢心地にいざなう音の波。あちらこちらで婦人たちの手に豪華な扇子の花が咲き、そこかしこ恋人たちは輝くような秋の午後のひとときにこつそりと手を握り合っていた。

五十年に一度の鬼才を自称する父、イオニア・アベールのロートレグアン宮廷への登場を、シレイスはただ尊敬の念で見守る。たぶん、この場でこの音楽に一番熱心に聴き入っているのは、この場の誰よりイオニアの音楽を耳になじませてきた自分に違いない。

純粹に音楽を思っているのは――。

音の印象をわかったように語らう貴族の夫人同士の口元を覆う白い指には、これみよがしと貴石の指輪がきらめく。

（王族だとか、貴族だとかは、大抵のことを偽っている人たちだ）
シレイスは雲の上の人種があまり好きではない。

（威厳を取り繕おうと、取り繕うまいと、軽薄なのは結局おなじ）
彼らは音楽をよく嗜むが、それは芸術の後見人としてであって、芸術の後見人であることは、着飾ること、出の良いものと結婚するようなことで変わらない、箔づけや打算からなされる愛好姿勢なのだ。

（流行りものが好きなだけなんだ）

ロートレグアンに父が招聘されたのも、評判が先。引っ張り綱の糸を手に行っている者が得意顔になれる見栄張り競争。

ルナーグが芸術都であるのは、聖霊獣の守護により永らくの平和に浸るロートレグアンだから、才能収集の歴史と層が厚いというだけのことだろう。ロートレグアンは悠久の情眠をむさぼる老生国家とも陰で呼ばれる。聖霊獣のめぐらせた不可視の膜に国境を守られて、侵略の不安を捨て去った王国は、人間の生きる喜びと快樂に精神をかたむけて安泰のときを重ねていた。

戦を忘れ、弛みきって墮落を待つ、腐りかけの国家だと揶揄する声もある。

（だから……、驚くことなんかない。気安い王子が……）

楽章の終わりに少し気になって眼をやった壇上では、橙色の髪のカイトール王子が、瞼の閉じられた首をうつらうつら揺らし落として眠りかけていた。

（……うつん、安っぽい王子がいたとしても）

月の輝く夜に、少女は本当の心を歌う。蜜色の長い髪を肩に揺らして、一心に。

王立音楽院の白亜の建物に囲まれた真四角な池は、透き通った清浄な水を湛えて、空の星星を映している。緑水盤の都と形容されるルナーグにはいたるところに水がある。都に水と緑が散らばるのでなく、水と緑の庭園の中に街が、王宮が組み込まれているような都の美しさに惹かれて、たわむれるごとくこの国には精霊が寄り付き、人前に現れやすいのだという。実際に見たというものは少ない。チエロ弾きのカシエダンは、少女を初めてこの場所で見たとき、とうとう自分も精霊というものを目撃してしまったのかもなあと思い、少しでも長くそう感じていたほうが人生は楽しいので、自分という覗き屋の存在を彼女から隠した。声をかけたら最後、幻想も音楽も途絶えてしまうだろう。

もはや主^{ヌシ}と言える年月、音楽院に籍をおいて過ごすカシエダンは、院の敷地内において神出鬼没の男である。夜の教室だろうが、他生徒の寮部屋の箆笥の中だろうが、屋根裏だろうが、食糧庫の苺栽培床の裏側だろうが、おかまいなしに入り込んでじっとしている。彼のいるところが彼にとってそのとき音楽の降りてくるところである。彼は、ここ数日のあいだに、すでに精霊と見違えた少女の正体を知っていた。しかし、月下の池端に幻想を見いだしてから今日までつづいて、彼の音楽の泉は場所を移ろおうとしなかった。

青い水で充たされた池の四辺、回廊状に棟をつないでいる柱廊に

は、生徒の憩いのためのベンチが散らばり、背中を預けるのに困らない影を幾つも落としている。半円形に池へ迫った小さな舞台の上で、クラヴィーアを歌わせる少女の小さな身体だけ、水の匂いの濃い空気を吸って吐いて躍動している。

ときどき、ささやく少女の声が音色に混じった。

「いいえ、精霊さん、昼間の音楽も、夜の音楽も同じように弾いているつもりよ。違うように聴こえるなんてこと、ないと思うわ。手の大きさをだって変わらないし……」

常人の感覚には気配すら捉えられぬ会話の相手は、わずかな疑問にこだわ리つづけることはないようだった。だがむしろ少女のほうが、不安になったというように答えの探求を続けた。

「そうね……ううん、わたし、幸せよ、精霊さん、あなたにとっても感謝しているの、ええ、本当なの。でもね、人前で弾いているときはね、少しだけ怖くて。どうしても、偽っていることの怖さがあるから、音も違ってしまふのかしら。でも精霊さんくらいに耳がよくなくちゃ、とてもわからないくらいのことよ」

少女は開き直ろうとしたけれども。その水辺の音は、カシエダンの耳にも昼間の音よりのびのびと響くように聴こえていた。もつとも、夜の静けさと、水と四辺の壁の音響のせいもあるかもしれないが。

正面棟のほうから磨き石の廊下を歩く鋳靴の音が近づいてくるのを、カシエダンは振り返った。

橙色の頭を片手で押さえて、迷宮に迷い込んだ旅人のように戸惑いの表情を八方へ巡らしながらやってくる青年の姿があった。

「この音、どこから……」

青年はまばたく瞳を闇にこらしながら、流れくる音色を手繰り寄せる。青い瞳が曲がり角の先から差し込む外界の光を見分け、夜風とともに音の侵入してくるその方向に確信を抱き、歩いていく。

ガイートルは先刻まで、父王の使いでイオニア・アベールの元を

訪れていた。王立音楽院院長の席を約束されて母国ロートレグアンに凱旋した、希代の新鋭音楽家イオニア・アベール。元は名もなき修道士見習いだった男の立身出世を象徴することく、院の敷地に立つ邸が今はイオニアの住処となっている。あらためて就任の祝いと、過日音楽催で披露された見事な音楽への称賛と褒美を届けに王子が遣わされたのは、夕刻を大部分過ぎてのこと。こう時間が遅いのは、ほんらい予定になかった、王の私心からの心遣いであるゆえだ。余は満足じゃ、色つけて褒美を取らそうぞ——多忙な執務の間、そう思いついた王から、暇そうなお前ちよつと行つてこい、と言いつかつてやってきた。

用事を済ませた帰りの足を、あてどを知らない探索にさまよわせ、たきっかけは、人気のない宵の建物の内側で、ふいに耳に届いたかすかな音の粒だった。

「やっぱり、この旋律……」

辿るうち、ガイトールは中庭池へ誘い出される。

そこにはさざなむ水に映る光の明るさがあつた。もうすぐ満ちようという月のかかる夜空の下。

ガイトールは対岸の水辺に美しい娘の姿を見た。

クラヴィーアを奏でる金色の髪の娘。

息を呑むとはこういうことかと知るほどの景色が、心を掴む音楽付きで、そこにあつた。

中庭池はしかし、長く瞬間を止めておくにはこぢんまりとして狭すぎる空間だった。金色の髪の娘はガイトールの影に気づくと椅子を蹴倒して立ち上がり、呼び止める間も与えず一目散に逃げ出して、彼の前から消えてしまった。

「待つ——」

拍がずれて間が抜けた呼びかけを、びよう、とチエロの音が慰めて微笑った。

振り向いたガイトールの斜め後ろに、不精髭ボサ髪の中年男が楽器を抱いて座っている。ベンチの背面に頭をもたせて足を投げ出し、

その格好でも器用にきれいに楽器は鳴るのだ。

「お兄さん、シレネーダの伝説を知ってるだろうか？ 機織り女神は雲の中でしか機を織らない。機織り女神は雨の男神の恋人だから、最も美しい姿を雨の男神以外の者には絶対に見せなかったのさ。ところがあるとき機織り女神に横恋慕した風の男神が、恋しい女神の秘密の姿見たさに雲を吹き飛ばしてしまったからさあ大変だ。機織り女神は貞節の守り手だよ、羞恥に染まる乙女たちの肌を隠すための布を織ってる。そんな女神が真の姿を暴かれてしまつては、もう首をくくるしかなかったってね」

話を哀切にいろどるチェロの音色は玄人裸足な腕前だった。突然の脈絡ない語りかけに戸惑い、怪訝に眉根を寄せてガイトールは男に向かつて首をかしげる。半分以上、話の中身にはうわのそらだった。

「あそこで今クラヴィーアを弾いていた——」

「お兄さん、あれれ、どこかで見たような人だなあ」

「今いたあの娘は誰だろう」

「ああ、聖歌隊の娘じゃないか？ 伴奏の練習だろうね。最近、若い善い先生が来て、娘たちにオルガンを教えはじめたから。まあクラヴィーアじゃ鍵盤が足りないが指の訓練にはなるからね」

院に女の生徒はいない。答えに合点がいつて、ガイトールは空になった舞台上へ首を返した。

娘の残像にとらわれながらつぶやいた。

「何で、あんなに怯えた瞳で、こつちを見たんだろう……」

叱られると思ったのか。ガイトールは、自分も部外者なのに驚かせて悪いことをしたと、思慮の足りない行動を恥じた。

恥じることで、ともすると幻をいつまでも追いかけて霞がかかる頭を振り、気を取り直す。

自分が消えればまた戻ってきて練習を始めるかもしれない、そう考えて踵を返そうとした。そのときガイトールの視界をかすめた紫がかった燐光。

ツキノムラサキ

「月紫……？」

クラヴィーアが置かれた舞台から一番近い回廊の柱へ寄りかかって立つ影があった。白銀の長髪と、陶製の肌とも見まごう青白い横顔は、王子にとってよくよく見知った、しかし滅多に偶然出くわすことはない精霊のものに違いなかった。

ロートレグアン王国を守護する聖霊獣のひとりだが、何故ここに。ガイトールは首を傾げてまたしばし、立ち尽くす。

水辺に響く、余韻のみを追求するようなきれぎれのチェロの音は、不思議な邂逅をふたつ贈られた王子を題材として音楽が生まれるときものだったかもしれない。

太陽の粒がまぶされた紺碧の海を船は渡る。舳先を西の水平線に描かれる蜃気楼の港へと向けて。

櫂のリユートを抱いた青年が、肩に伸ばした黒髪を荒い風の挨拶にとられながら、ゆく先へ背中を預けていた。水面と同じ深い色した蒼い瞳は、ちぎれた天上の雲を追いかける。

「風の男神は光の大神の怒りを買い、姿をなくしてしまった。けれど目に見える姿がなんだというのだろう。風ほど人の素肌に親しい自然の存在がほかにあるか」

近づいてきた小柄な騎士が、主の^{あるじ}呟きをとらえ、意見の導入に用いる。

「しかし此処の風は強すぎます。病み上がりのお身体に触る。そろそろ船室へお戻りを」

主従はともに黒髪だったが、騎士の短い髪には主と^{あるじ}違い、陽光を返すしなやかさがなかった。主従はともに年齢不祥な容貌を持っていたが、騎士の顔付きは人に嫌われるところがない主の^{あるじ}それと違い、陰気であった。

「健康も数ある取り柄のひとつだったのに、あれは僕が失う自由と

押し込まれる窮屈を心の深層において哀しんだがための知恵熱さ。

これから深まる精神疲労の兆候だよ」

「知恵熱ね」

知識の間違いを侮蔑したい眼を向け、騎士は船室のほうを顎で示やくつた。会話遊びに対する許容量の過度に少ない性格が主への雑あるしな対応にあらわだ。

「童心があればこの年だって知恵熱くらい出せるよ」

「知恵熱も雲隠れ遊びもいいかげん脱皮していただかねば困ります。尤も、わからない殿下ではないからこの度は帰途についていただけたのでしようが」

「僕は頼まれたら断れない性格だからさ」

だったら掛布をかぶって寝ている、と立てた親指で背後を三度しめす騎士の目付きは陰気に煙っていた。

スパードンの羊毛織りは暖かいんだよ。——首から腰までをすっぽり紺色に染められた套衣で覆った吟遊詩人風の衣装で立つ青年は、船のへりから背を起こしながら騎士を宥めるように笑った。だが彼はすぐ、騎士オーザンの肩越しに焦点を移して。

そのとき甲板のマスト柱付近で騒々しく忙しく立ち働いている水夫たちの内からわつとした騒ぎが起こって、オーザンは遅れて主の視線を追った。「パイプに火イつけただけだぜエ！」水夫の一人が取り落として尻餅ついた格好のまま、火柱を股のあいだにして叫んでいた。火元のパイプが紅蓮の炎の中で乾いた音たて弾けた瞬間、火勢の増した火柱は八方に裂けて散り、そのひとつが横合いで粗野な冗談を言いかけた口のまま啞然と止まっていた水夫の一人を襲う。肩にかけながら巻き片付けられていた途中の縄束に飛び火した朱色は散乱する縄を縦横舐めながら甲板を走った。

あちこちばらまかれて床板の上、面積をひろげる炎。水夫達は狂騒しつつも手際は冷静に運んだ水樽の中身をぶちまけた。水浸しの床を蹴散らし、濡れた靴底で駆けまわって飛び火を踏み消す。

オーザンの脇を風が過ぎた。金属の擦過音にはっと掴んだ腰の鞘

から、愛剣が抜かれている。

「殿下」

主は屈強な男たちの踊りに踏み鳴らされる甲板中央からやや外れた場所まで縄の導火線を伝い届いた炎へと近づいた。断ち切った端を火塊ごと剣先に乗せ、風上を背にして振り返る。オーザンとの間に、人型の火柱が立った。陽炎のような火だ。

「ヒノダイ……かな？」

シュウシュウと炎が喋った。オーザンには言語として聞こえないが、主には違うようだ。

「焦げ臭いだなんて、あなたが言うんですか。僕の匂いはフラツチエロ火山を観光していたせいじゃないかな。生気に溢れた火の山で情熱的な歌が一つ生まれた。そのあと国への帰り途は発火的な迎えを受けるなんて、ずいぶん火種づいてるな、僕は」

炎の正体の姿も主にははつきり見えているようだった。どこかと視点の結ばれている主の瞳が、嫌気に細まるかたちに一瞬だけ変わる。彼が稀に見せる不快の表情だ。

「そういう呼び方をするのは人間だけかと思っていた」

そして次に柳眉が持ち上がった。

「期待？ 何の期待です？」

剣先の炎から、ざわりと皮膚に刺さる熱気が放射された。そこに在るモノの沸かせた感情の高ぶりをオーザンは感じる。

答えに苦笑するように主の青年は横を向いた。微笑いながら小さく首振って、返した眼には疑わぬ自信を込め。

「こてんぱんは僕の美意識にないが、ただで負けるつもりもありませんよ」

陽炎がぱつと火花を散らし、切れ端にくすぶるだけの物理的な火に縮んだ。危険な気配は気短かに去る。足を踏み出した青年によって剣は一振り海へ向けて薙ぎ払われた。

「……僕もそこまで誰かに嫌われてみたいものだ」

感じ入るよう呟くと、風で洗った剣を騎士に返す。オーザンはそ

の羨ましげな感慨を訝しんでじつと上目に見てしまう。

気付いた主は套衣に半分隠れた唇の端をつり上げて笑む。

「駒としてお眼鏡に適ったみたいだよ。愛憎の板挟みならぬ、焼き菓子になった気分だ。砂糖まみれ香辛料まみれ、よりをかけて宮廷に出されようという僕」

「聖霊獣があらわれるということとは、すでにハリノガイを越えたのですね」

オーザンは海原へ視線をめぐらせる。

主は遙かに雲の過ぎ去った蒼い空へ手を伸ばし、騎士へ自分に見えているもののありかを指し示した。透明な玻璃の蓋。ロートレグアン王国を丸ごと囲む、護りの壁。いつのまにか船は、神秘の壁から進入許可を得てこれを突き抜けていたのだ。視る力のないオーザンには確かめるすべもない現象だが、もうすぐ母国が水平線へ実体を浮かべれば、事実として船が迷わされず進んでいる証しを得るだろう。

「殿下の美意識は完全勝利でしょう」

白々しかったことだ、とオーザンの陰湿な口が皮肉を叩く。

自らがこれより打ち払おうとしている守護の蓋を船の後方に眺め、主の青年の瞳は風に散らされた雲を追うのと同じ色をしている。

「姿をなくすような下手はすまいよ」

歌うように風へのせた。

船は泡の航跡を曳き、海原を進んだ。

蜃気楼の向こうにある、日の沈むところ、苔むした古王国へ。

2

「シレイス、何をそんなに落ち着かない？ 腹でも鳴りそうなのか。朝食もとらずに教会に入り浸るから……教会というやつは嫌がらせのように朝が早いからな……」

王宮の中いずこかの間へ大小のサロンを通り抜け案内されてゆく

途中で、父イオニアが怪訝そうに息子を振り向く。シレイスは前へ後ろへ不穏な気配のしつぽが掴めやしないかとめぐらせていた首を、はっと真っ直ぐにして、答えた。

「いいえ、父さん、別にお腹は空いてません。ミケア修道女から林檎をひとついただいて、腹に入ってきましたから」

「ロートレグアンの王宮が気に入らないのか？ この前の音楽催の途中からヒドいしかめ面だったし、今日は今日とて浮かない顔だよ。今朝のお召しはお前の名前も含んでのものだったのだ、つまりは今度お前も宮廷楽士として引き立ててもらえるという話なのかもしれないぞ。うん、お前は若いし女好きする顔を持つてゐるからな、目をつけられる早さも頷ける。しかし宮廷に受け入れられるには、そのクソ真面目さが玉に傷どころか致命傷かもしれないぞ？」

「……相変わらず俗っぽいんだから父さんは。浮かない顔なんてしてないよ。むしろくしゃしてゐるんだ。どうしてまたも王宮なんかに呼び付けられて、稽古も放つてこなければならぬんだ。集まる娘たちだって、手仕事があつて時間が取れるのはわずかのあいだなのに——」

遙かに高い天井の黄金箔を仇のごとく見上げて愚痴するシレイスの傍らに、はああ、と大袈裟な父の溜息が流れる。

「堅い堅い堅い。どうしてかねえ。その身を犠牲にしてまで夢見て望んだ道が目の前に開けているというのにこの態度。育ち方が間違っているよなあ、育ち方が、うん、育て方じゃないところが肝要だ」
「あんな俗物と好き合ったわけじゃないって母さまの口癖を、肝に銘じているからだよ」

都合の悪い言葉は聴こえない耳を持つ父は懷から格式ばった紙質の封筒をとりだして、どうも気になる、というように読み直して聞かせた。

「名声、星空の裏側まで響き渡りし不世出の大音楽家イオニア・アール——まあそこまでは書いていないが——とその子にして頭でっかちのシレイス、云々、かんぬん、万難を排し《太陽真上の刻》

までに参宮されたし。署名、ガイトール・キリエス・ロートレグ。おい、シレイス。陛下ではない。どうやら今日は王子殿下からの呼び出しのようだよ」

「……っ」

非常に良くない心当たりのある相手の名前を今更この場所に出されても、もう逃げだしようがない。籠の鳥だ。細かいことに拘らずとりあえず外へ出てくるという目立ちたがりな性格の父を恨めしく見つめるあいだに、辿り着いたらしき間に招じ入れられる。

「どうしたんだ、シレイス」

父の後ろに隠れるよう動いて、シレイスはうつむきながら歩みを進める。

親子の名を呼び上げられる。ただ広い一間の中心へさらに引つ立てられる。顔を上げられずシレイスは父の陰だけを追いかけて踏んで歩く。（もしかしたら――、あの夜――）身体を沈ませた父にならって膝を折り、ぎゅっと目をつむる。

「――大楽士イオニア、その子シレイス、おはよう。顔を上げてかまわないぞ。よく来てくれたな」

それは年若い王子の声ではない。国王の低音が下した許可だった。呼び立ては王子で、陛下もいる……！

仰げば、謁見の間と思われる場にシレイスたちは置かれていた。正面に緞帳をひらいた玉座。鎮座して肘掛けに頬杖をついている壮年の国王シオール。一段降りたところにガイトール王子がこちらを見つめて立つており、目が合う前に思わずシレイスは床を向いて視線を逃がした。

もしかしくなくても、あの夜――音楽院の中庭で、王子に夜の姿を見られたのではないか。

夜の姿――娘の姿に戻った自分を見られたのではないか。ばれたのではないか。目撃した娘がイオニアの息子シレイスと同一人物であることを、見抜かれてしまったのだろうか……？！

国王をあざむいて宮廷に出ていた事実を……

「今日の話は王子からだ。余は見学だね」

国王シオールは人を小ばかにするような抑揚で話すのを人柄の特徴にしていた。いつなるときもそうで、犬や鳥に対してさえ同じ口調だから特定の人を蔑んでのものではないのだという。むしろ、いつなるときも変わらない態度は相手に気分を読ませず、適度に緊張を抱かせる、王者の技なのだと呼べる者もいた。

シレイスは煮立てる火にかけられようとする釜の水の中だ。死刑宣告の前触れみたいに聴こえはじめる王子の咳払い。

「わざわざ来てもらい、有り難う。話というのは、単刀直入に言うとなあなたがたに俺から頼みたいことがある。知つてのことと思うが、ロートレグアン王国は現在まだ正式な王太子を立てていない。継承権一位は俺が持っているんだけど、国王の意向で立太子式が先延ばしされている状態にあつて……楽士、どうかしたのか？」

身をすくめて震えているシレイスに、見とがめた王子から声がかかる。

「な、なんでも……」

「具合が悪そうに見えるよ、大丈夫か？」

「なんでもありません！」

気をつけの姿勢で顔を上げ声も張り上げるシレイス。

首を傾げて気遣わしげにこちらを見ている王子。

（関、係……なかった……？）

つとめて無表情を取り返し、シレイスは内心重低音級な安堵の息を、吐く。

「うん。それで——これも巷の噂に聞いていることと思うけれど、幸か不幸か俺には優秀な従兄弟がいて、フェイドル・キリエス・ロートレグという九つ上の彼が、もし俺が落第した場合の王太子候補だ。落第というのは、ロートレグアンの王位継承者に課せられたある試験についてのことで」

「聖霊獣との契約更新と解釈される例のアレでしょうかな」

「そう。あなたはロートレグアン出身だし、芸術家だから知識があ

って当然だな」

「お話が掴めて参りました」

父の場馴染みの速さに驚いてシレイスは顔を仰ぎ見る。ロートレグアンに育っていないシレイス一人は把握できない話の流れが作られていた。

察したようにガイトールが主に年少のシレイスのほうを向いて説明をはじめた。

そちらへ首を返しぎわ、シレイスはこの、吸う息も装飾きらきらしい天井や壁から剥がれた金粉銀粉で苦しくなりそうな謁見の間に、対面する四人以外の人間がいないと気がつく。さっきまで余裕がなくてわからなかったが――。

「ロートレグアンの王は、ロートレグアンを守護する聖霊獣たちに認められた者でなければならぬ。彼らの管理する不可視の天蓋が国境をぐるりと囲んでいるおかげで、この国は招かざるものの侵入を止め、つまり他国からの侵略を受けずに平和を保っていられる。永久平和を望むならば、聖霊獣の守護は手放せないものだ」

「聖霊獣ってのは精霊の親分みたいなヤツだ」イオニアがお節介に耳打ちしてくるそのくらいのことは、いくらシレイスでも知っている。

「ここまでが人間の理屈。聖霊獣とは精神の存在だから、彼らの人を量る尺度は人間の用いるものとはだいぶ違う。伝統的に代々の王はなにかしらの芸術作品を提供することで彼らの心を掴んできた。自分たちに近い洗練された感性を持つ人間にしか、安心して力を貸せないというのが精霊の理屈」

心持ち玉座の父王を視界にするよう首を傾けて、かたむ

「父も、祖父も、曾祖父も、代々キリエス・ロートレグ家の嫡子はこの儀式を経て王座についてきた。失敗例というのは史上にないんだ。形式的なものというか、そこは芸術都というか、だからこそその芸術都の出来あがりだったというか……まあ、そういった歴史から見ても、普通は通過儀礼のようにこなされるものなんだけれども」

王子はだんだん齒切れ悪く頭を掻きかけた。

「……それなのに人の理屈が今は殿下の立太子を止めている」
（なれるはずのものに、なれない——）

橙の髪を後頭部で掴んだまま王子の手が止まる。シレイスの挟んだ淡々とした確認に、屈託のない笑顔で反応し、頷く。

「そういうことかな。恥ずかしながら。はつきり言えば俺には人望がない、んだろうな、物心ついたときには宮廷は従兄弟のフェイドル派と俺派に二分していて、一八も間近というここまで成長するあいだにもその状態を覆すことができなかった。器量不足は否定できない」

「いやあ、それは違いますでしょう。二派の対立は政策の対立であって、担ぐ頭^{かしら}の資質がどうこうというのは後付け^{あとづけ}の汚し合いです。フェイドル殿下の派は国王に集中する既得権を不満とし、貿易拡大のためハリノガイを消滅させたい方々と聞いております」

ハリノガイとは精霊の力により国境に沿って張り巡らされた見えざる壁のこと。大陸南東サクール海峡に突き出た半島国家ロートレグアンを、陸続き、そして海向かいの周辺国から守る透明の蓋。陸上だろうと海上だろうと、ロートレグアン発行の通行手形を持つていないと、人間はこの壁を通り抜けられず、領域を迷い続けることになる。

手形の発行は王家によって一元管理されているというから、地理のいい地方領主でも私的な交易で財を築くことが事実上困難だろう。国王へつつぬけの動きは税の対象とできる。なるほどハリノガイは盤石な中央集権の仕組みを保証するものでもあるのだ。

そうして成っている平穩を、わざわざ掻き混ぜようという動きが、老生国家と揶揄されるここロートレグアンでもあるのか、と意外に思うシレイスだった。平和に慣れたロートレグアンにとってハリノガイが解けてしまうとは、丸裸になると同じことだろう。

「ですが、身分を極まりなく僭越した口をお許しいただきたいですが、陛下の御威光に陰りの見受けられない現在、直々に後継者をこ

指名になれば宮廷の方々もご納得されないわけに参りますまい」

イオニアは俗物らしい情報力を披露して話に食い込んでいく。

確かに王の態度はあまりに無責任なものと映った。

「余は放任主義なだけだ。主義の奥にある親心としてはガイートルに勝ってもらわねば困ると思っている。もしも負ければ余の親としての評価が崩落するからな」

勝ち負けというのが、どこから出てきた言葉なのかシレイスにはわからなかった。

（何のこと……？）

そもそも人払いされた謁見の間で一介の楽士親子が、王家の継承権のような大それた話題に参加させられていることが疑問であった。「というわけで、国王は世継ぎの選定を競い合いの勝敗にまかせることにされたんだ。……勝敗って言い方は身も蓋もないけど、つまり聖霊獣に認められたほうが王太子つてことだ。戴冠の前に行なわれてきた献呈儀式の前倒しになるし、異例中の異例ではあるが、それで宮廷の分裂がすっきり治まるなら無駄のない方法だと思って、俺は対決に望むことにした。わかりやすいし、間違いのないやり方だよ、どうせ聖霊獣たちの承認を受けなければ王にはなれないんだから」

その最後で初めて王子のまなざしが陰ったのを、シレイスは何故だろうと思う。一連の話自体がガイートル王子にとっては理不尽なものなの、彼の感情はたった今初めて少しだけ零れたように見えた。

まるで、自分が聖霊獣の承認を受けにくい存在であると考えているみたいだと、感じた。

だけど陰はすぐ王子本来の陽性に消された。

真っすぐ頭を掲げ、透き通った青い目に力を込めてガイートル王子がつづけた。

「聖霊獣たちへの献呈は、物語、詩歌、演舞、音楽、絵画でも、なんでも、人が心を動かされるようなものならばなんでもいいとされ

てる。ただし特上の感性によるものでないと、肥えた彼らの審美眼を満足させることはできない、と。俺は、芸術の心得はなくて、そういう王でも財力で一流を雇って芸術の保護者であることを証してきたのが芸術都の歴史と重なっているんだが、今回ばかりは競り合いになるから……。種類の選択から大事だ。いろいろ考えたけど、俺は音楽……交響楽にしようと思っているんだ」

それで父が今日呼ばれたのか。やっと大きな納得がいったシレイスだ。杞憂に縮み上がっていた滑稽さを思い返して少し可笑しくなる、と同時にシレイスはもやもやした不快感を覚えはじめる。音楽を、権力争いの道具にする。王子の言っていることの身と蓋をなくせばそういうことではないか。

「音楽をお選びいただけるとは、光栄なことですな」

あんのじょう俗物な父の言葉にシレイスは鼻白んで目を細めた。ぼやけた視界で王子が動く。かつかつと床を蹴る革靴の鉾の音が近づいてくる。

「音楽はだれの耳にも届きやすいものだと思うから。武骨な俺は芸術一般敷居が高いけどね。大楽士イオニア、それでも俺が聖霊獣の信頼を得るために、あなたの息子を借りたい。これがこの場の本題だ」

「ほうほう」

「楽士シレイス。聖霊獣のための音楽を君に書いてもらいたい」

目の前に立ちはだかったガイトール王子の期待の眼と言葉が、シレイスの心臓をさっきの咳払いよりも激しく吹き飛ばした。

「……！」

「……冗談じゃない」

後ろ手に閉めた院長室の扉へ背中をつけてシレイスは眩き、俯いた。

「なんで、あんな人のために音楽を。……俗な争いに？」

父のように受け入れられない。名誉だけを追うことなんかできない。

扉の内側でもさんざ攻防した父の説得と頭の中で戦いながらシレイスは扉を蹴る勢いで歩きだした。

――滅多にあるものではない出世の機会だ

――お前の才能を生かせる場所だぞ

――父さんなんぞ息子の誉れに鼻が高くて天井に突き刺さりそうで眠れないほどだというのに

「嫌だつていったら嫌なんだ」

音楽で勝ち負けを争う、そういう考えだけでも気に入らないのに、あの王子が謁見の最後のほうで何と言ったか？

『音楽は献呈芸術の中でも聖霊獣を納得させるのが比較的簡単なほうだと言われてる』

（詩や物語や絵画より簡単で、低いものだって思ってるんだ）

馬鹿にした話。

（ぜったいに断る）

拳を握り、唇を噛み締めながら院の廊下を歩く、シレイスの決意は日に日に固くなっている。

昼下がりの王立音楽院には音が溢れていた。各地から粹を集めた優秀な学生たちの、いずれ劣らぬ技巧の断片が壁の向こうから漏れいでて耳に絡み、シレイスの音楽馬鹿な部分を刺激する。音楽院は、各国宮廷や貴族のサロンを父にくつついて渡り歩いてきたシレイスにとって、今までになく居心地のいい、心の落ち着く場所だ。

ここでは皆、まじめに真摯に音楽を――。

――。

……

？

調子外れなクラヴィーアが聴こえる。

外れているどころかめっちゃくちゃでデタラメな。

（誰がふざけて……）

開放回廊の二階からシレイスは酷い音のする中庭池を覗き込んだ。

「あ、楽士！」

池に小さく張り出した真下の舞台から、ガイトール王子がシレイスをほぼ同時に見つけて仰ぎ見た。立ったままその指は象牙の鍵盤に置かれている。陽性の笑顔を向けながら、ぼんぼんぼんと鍵盤を叩きつつづけていた。

かたちを取らない音楽に変だなど首をかしげてから、王子はクラヴィーアを離れ、回廊の一階二階をつなぐ螺旋階段を駆け上がった。きた。

「君に会いに来たんだ。返事を貰いに」

及び腰のシレイスへロートレグアン式の握手の挨拶を求めて手を差し出した。大失敗だ、覗くんじゃなかったと内心ほぞを噛みながら仕方なく伸ばしたシレイスの手を、王子は力強く握って振ったそのまま引つ張って反転する。

「……な、何ですか」

階段を降りさせられてシレイスは慌てながら声上げた。依頼を断るつにも一国の王子相手では下手すると牢屋へ放り込まれかねない礼を尽くすためにだけ差し出した手だったのに、このまま王宮へ瓶詰にでもされかねない勢いを感じる。

「俺じゃぜんぜん同じように鳴らないんだよ」

水辺のクラヴィーアの前へシレイスを連れて、ガイトール王子はさっきのデタラメをまたはじめた。

「ラシドミだろ？」

「それはファミレドじゃないですか。さっきはレミシファだったし、その前はソソソミド。その前も前もずっと一度としてかすっていません」

顔をしかめてシレイスは呆れた。

橙の髪に手をつっ込んだガイトール王子が、弱ったように、でも自分でもわかりきっているように笑って、そして横のシレイスを見

下ろす。

「約束だったよな、楽士。スパードン・サズ・ラミスタの舞踏曲」
そういえばそんな申し出を自分がしたことをシレイスは言われて
思い出す。

「……」

格好の機会、という期待の眼をされ、しぶしぶと椅子に座った。

「……王子殿下」

「何だ？」

「……いえ」

早く言ってしまうおう、断固として例の依頼を断ってしまうおう、と
いう思いが喉につかえている。しかし、と萎縮する心もある。父イ
オニアはああいう人だから上手く世を渡っているが、政治絡みの反
骨を示したが最後、庇護から一転して王に殺される芸術家もいるの
だ。

「冗談じゃない！……って、言いかけたらどう？　この前」

シレイスは吃驚してガイトールを見上げた。謁見の間で、依頼を
聞いて憤慨したシレイスは、思わず叫びかけた口をイオニアに塞が
れたのだった。『息子は技巧が未熟ゆえご依頼は一旦持ち帰って検
討したい』——父の答えが受け入れられて心中はじたばたと暴れな
がら御前から退出した、三日前の記憶を鮮明に思い返す。

（「じよ」、までしか声にならなかったはず）

意外と気をめぐらせているのだ、とシレイスは警戒を働かせる。
王族などどうせ下々の気持ちにかかずらう必要はないのだから、父
が必死に隠したものをわざわざ拾ってくれなくてもいいものを。

「城では自由に返答しにくいだろうから、こちらから出向いて聞こ
うと思って来た」

シレイスは瞳をひらく。

（自由に断ってもいい……？）

ガイトール王子は舞踏曲を促す楽しげな顔のまま。答えは曲の後
でいいと示しているようだ。

「辞退しても構わないということですか」

「うん。そのときはもう一度頼み込む」

やはりシレイスは瞳をひらく。今度は困惑のせいで。

「どうして僕なんだ……」

こらえ切れずに呟いた。

ガイトール王子は演奏の始まりを見守っているばかりだった。

——スパードン・サズ・ラミスタの民族舞踊は、三拍子で三、三、二の拍子を繰り返す情熱的な踊り。スパードン帝国の大貴族に抱えられていた一年前、父と旅行した南部ラミスタの地で触れた、独特の拍子を刻む土俗音楽にシレイスは魅せられて、以後のスパードン滞在中ずっとラミスタ舞踏曲の研究に打ち込んでいた。ラミスタ地方の歴史、周辺文化からの影響、民族にとつての舞踏の意味——シレイスの音楽研究への没頭はいつも生半可では終わらない。

地方に伝わる拍子楽器と、リュートに似てリュートより首の長いビウエラによつて演奏されるものだが、音楽表現にかけて幅広な楽器であるクラヴィーア用に編曲してある。南部ラミスタの焼付くような太陽に躍らされる鼓動が、音になってひろがる。

「うん、やっぱりこの曲だった……楽士、君の教え子がここで、この曲を弾いていたんだよ。知ってるだろ、金の髪の、長い……楽士と同じくらいの年の」

息を止めてシレイスは鍵盤から手を引き上げる。

「教会修道院の声楽隊に入っている娘、君が教えているんだよな。」

楽士は若いのに人に教える才能もあるんだな。まだルナーグに落ち着いて間もないのに、素養も身につけにくかったろう街の娘があれだけ弾けるようになってるんだから」

「か、彼女は才能があるんです……天賦の才能が」

視線から顔を隠すよう背ける。

「そう、なのかもな。それを見いだしたのは君だろ？」

「おだてても……何もお出ししませんよ。僕は、僕は辞退させてください。とても僕には聖霊獣の心を掴む音楽なんて書けない。交響

楽なんて一度も書いたことがないんだから。ないんだから、途方もないよ……できるわけないんだ！」

逃げるように立ってシレイスはクラヴィーアをまわった。半周もいかない屋根の陰でつんのめったのは呆然とした思いに足を取られたからだ。（できるわけが……そう、できるわけがない……）

単にやりたくないのではない。やりたくない反発心も確かにある。でも、だけど、もっとその奥には。（無理……）

できない。

聖霊獣のための交響楽なんて、自分には創れない。

反発で必死に覆っていたのは怖さだ。

「楽士」

ぼん……。空になった鍵盤を慎重に叩く王子の気配。けれど、間違っている。音符も何もわかつちやいないのだ。

「そのとき、ツキノムラサキが来ていたんだ。君が編曲したこの曲を聴いてた。滅多に人のかたちを取って現れないんだよ、彼女は」

「ツキノムラサキ……？」

「うん。聖霊獣のひとりだ。月の精霊」

「聖霊獣……」

精霊であることは知っていた。月の光のような優しさをくれる、とも。だけど、あのひとがロートレグアンを守護する聖霊獣のひとりだなんて。

確かにあのひとと初めて会ったのは、東から西へロートレグアン北部を横切る街道沿いの古い教会だった。再会したのも、ロートレグアン王都ルナーグの音楽院に入った夜のことだ。

あのひとは、ハリノガイから出ないという聖霊獣のひとり――。

「理由はそれだけ」

デタラメの中で、偶然にラシドミが鳴った。

「これだ！ と、思ったんだ。勝負が決まってからの三ヶ月、いくら探しても悩んでも答えが出なくて、どれも違っていて感じて、実のところあの夜までは、これはもう駄目かと……」

駄目かと、と回想しながら大して悲壮感ものせていない声音にシレイスは眉をひそめる。

「ずいぶん、軽いんですね」

「え」

「殿下の勝負にかける思いは。ちつとも真剣じゃない感じがします。だから僕なんて未熟者を簡単に選べるんじゃないですか」

「未熟者？ そうかな。俺には楽士のようにクラヴィーアを弾くことはできない。詩を作っても絵を描いても聖霊獣が寄ってきたことはないし、ああ、歌を歌ったら三匹に笑われたことはあるな。それだから芸術に関して君は俺より専門家に間違いないよ。何が問題だね？」

「交響楽を書いたことがない」

心を掴むどころか、完成すら危うい。繰り返す本音に声はかすれた。

「それについてはイオニア・アベルが協力すると言ってる」

いつのまにそんな保証を交わしたのだろうあの俗物父は、とシレイスは啞然だ。

「羨ましいと思う。楽士にはやりたいことがあって、才能があつて、応援する父上もいる。俺はこの通り、この年まで宙ぶらりんだからね」

面目ないような笑い方だった。

本当にそれだけで済むものだろうかとシレイスは疑った。正当な血筋の王子なのに、継ぐべき地位が確実ではないという状況。もつと憤慨や焦りを垣間見せてもいいはずの境遇だというのに、ガイートル王子はへらへら笑って、見習い楽士に運命を委ねる依頼を重ねている。

返事が、待たれている。沈黙が肩に重い。クラヴィーアの屋根越しに、シレイスと王子は目を会わせて対峙していた――。

奇声に場が割れるまで。

「音楽か！ これは音楽か？ いいや音の苦しみにもなっていない

ぞー！」

「カシエダンさん？」シレイスは叫びの聞こえた二階回廊を振り仰ぎ、燃える楽譜の乱舞する景色を見た。端から焦げていく幾枚もの五線紙が、頭上から降ってくる。

わらわらと回廊へ出てきた生徒たちが、いつもの、という顔で騒ぎの元を確認しては、練習室へ戻っていった。

「涸れたー！ 才能が涸れたー！ー！！！」

頭を掻きながら全力疾走するカシエダンが曲がり角で内廊下へ消える。

「あの人は時々あなるらしく……」

院生から聞いた話で説明しようとしたシレイスのすぐ目の前で、宙空で今にも燃え尽きそうだった焦げた紙片から巨大な火の玉が生まれる——床と平行にずいと前進して火の玉がガイツール王子をめがけた。

「ッうわ待て」

反応よく飛びのいて後ずさった王子にはしかし後がなかった。池に迫り出す舞台の縁で一旦水面を振り返り見、諦めの表情をおどけたように表わしてから、わざと足を踏み外すみたいに落ちた。背中から水へぶち当たり、盛大な飛沫を上げて水中へ沈んでいく。

「殿下？！」

シレイスは縁に駆け寄った。水草の一草も浮かばぬ水面の下でゆらゆら蠢く影。火の玉は迫ったままの勢いを渦に巻いて影の真上の宙にとどまっていた。空気を激しく燃やす音が耳に痛いほどだ。まるで憎悪だ、とシレイスは驚きを濃くした。熱風に目をすがめる。

影が浮く。水の中から外へ、振り回した腕で火の玉へ狙って大量の飛沫を浴びせながら王子が立つ。額にべったり濡れてかかった前髪を掻き上げて、水攻撃に分断された炎の群れを睨みつける。

「ヒノダイ、幾らなんでも場所をわきまえてくれよ……！」

「うるせえ、藻に腐った口を閉じろ呪われ王子が！ 死ね！」

宙から声が聞こえるが早いか、分散した炎はひゅんひゅんと縦横

にガイトール王子の頭を狙う。「神聖な学び舎な……」潜って避ける王子の言葉はぼくぼくと半分泡になる。

「から、騒ぎを……すなって……王宮な……」

「蠟燭の一本も周りに置けないどへたれが！ 外で会ったが百年目、死ね！」

「いやわざわざ殺しに出向……ろ、ぐふっ」

「早く、死ねよ！」

間隙のない攻勢に王子は息継ぎも覚束無くなっている。攻撃しているのは火だが、あれだと水に窒息させられるようなものだ。

「誰か、護衛の人は——」

今日あの外見と中身に落差がある騎士はついていないようだった。近衛騎士に対抗できる相手なのかどうかもわからない。

——と。

水面に振動を受けて震えるとき漣がおきて、瞬きのあいだに池の水が、爆発した。逃げ遅れた炎が水玉に吞まれて消える。「水のババアが余計な……くそッ」捨て台詞を残し、燃え盛る憤怒の音が中庭から消える。

息を切らしたガイトール王子が、進むに重たい水をわけて舞台の縁へくる。シレイスが手を貸そうか迷っているうちに王子は両腕をばねにして石床へ転がっていた。なんとなく前に出しかけた自分の腕をシレイスは見つめた。（形だけは少年のものでも——）

「水碧、感謝する。ありがとう」
スイノミドリ

池に向かつて、片手を口にそえた声を投げるガイトール王子。その、濡れ鼠な情けない姿を見下ろして、一部始終から導き出されるある事実^{スミ}に眉間をきつくひそめた。

「今の、精霊、でしたよね？」

「ああ、ヒノダイ。火の精霊」

ガイトール王子は延々と水滴を垂らす髪の毛を五本の指ですいて絞りながら答えた。

「もしかして、聖霊獣のひとりですか？」

「そう、七聖靈獣のひとりだ」

「嫌われているんじゃないですか？」

「うん、とてつもなく嫌われてる。はははは……」

あははは油断したなあと水のしたたる自らの醜態に笑いつづける王子だったが、シレイスの沈黙と呼吸の変化に気づくと急いで背後を振り仰いだ。

シレイスの両手は固く握られて震えた。

「七聖靈獣のひとりに殺されそうなくらい嫌われてる……？」

「楽土。そうじゃなくて——いや、そうだけど——あ、そうじゃなく——」

焦るガイトール王子の口はうまく回らないようだ。

「七聖靈獣から認められなきゃいけないのに？　だったら勝負なんて最初から……」

低くうなるシレイスの声に、ガイトール王子は言葉を探して首をひねった。

「僕はやはり辞退します」

「勝てる音楽を、依頼しにきたんじゃないんだ、俺は」

今度はシレイスが首をひねる。それは詭弁ではないだろうか。ツキノムラサキの姿を見たのが理由だと、彼は言ったのに。

「おっしゃること、先程の説明との違いがわかりません」

「うーん、なんていうのかな……。つまり、俺の感覚は芸術に向いていないはずだったけど、ここでツキノムラサキの姿を見つけたとき、信じてみようと思ったわけなんだ。俺の直感を、さ」

思いついた答えに自分で納得するようにあっけらかんと笑った。

シレイスの両の拳が力みを失う。代わりに胸の奥が小さく軋んだ気がして、息を整えた。今日も昼を過ぎた今まで林檎一個しか食べていないから、感情の起伏が心臓に悪さしているのかもしれない。

「だけど、どうしたって不利なのに」

「君は聴く者を選ぶのか？」

シレイスは目を見開く。正面からずきりと鋭利な何かが刺さった

気がした。

「違う、そういうつもりじゃ」

「じゃ、受けてくれるんだな」

「いや、だから」

動揺に声が詰まる。——だから、なんだろう？ 聴かせても必ず

負ける。負けるから、音楽を創れない？

（そうは言っていない……でも……）

思考が固まってしまった。

犬みたいに頭をぶるぶると振って水滴を散らしたガイトール王子は、立ち上がって突然シレイスの腕を掴んだ。表情はにこにこ明るい。

「決まった。話の詰めは王宮で」

さっさと歩きだす王子の歩幅にたたらを踏みながら心の際を突かれてシレイスは連れていかれる——。

3

「いやあ、ぶりっ子王子は相変わらずぶりっ子してるかい？ おや、従者が変わったのかな。サシンの坊やお嫁にいったのかいな」

銀色の草のたなびく草原を駆けてきて赤い狼が喋った。

幻想を見る思いで心の中で仰天するシレイスの傍らでガイトール王子は平然とへらへらしていた。

「やあ、地赤。^{チノアカ}彼は従者じゃないんだ。ほら、今度の儀式の協力者だよ、やつと探し当てた、強力な、ね！」

「そうなのかい。てつきりサシン二号だと思っような可愛らしい子だけど、強力なのかいな」

「どちらかというと逆さまのサシンという感じではないだろうか？」

森の奥深くから悟りの目玉を丸く光らせ、蒼い梟が喋った。

つぶれそうな心の眼で凝視するシレイスの傍らでガイトール王子は辺りをきよろきよろと窺う。

「あれ、スイノミドリの姫は？ さつき助けてもらっただけで」
「ここにいるわよ、ガイートル」

美しく澄んだ声がした頭上を仰ぎ見れば、半球状になった硝子天井のくぼみに滔滔と浮いた水の層の中で碧玉色の鯉が泳いでいた。水槽などはない。重力に逆らってたゆたい、一滴も垂れてはこない不可思議な水——そこからするりと落ちてきたのは、一瞬前まで優美にひれをそよがせていた鯉の姿から清らかな緑髪の娘に転化した水の精霊。

「災難だったわね。火の坊主ってば粘着で粗暴でほんとう小物よねえ。いつまでたってもガキで」

「からりと乾いているのが火の精のあるべき性格のはずなのだが」

「彼の心の燃料が燃えつつけてるんじゃないかいの」

「恋は精霊にとっても命取りだわ。どうしても誰も坊主に教えてやらなかったの」

何故かそつと顔を伏せたガイートル王子に気付いて水精の姫君は、碧玉の爪のきらきらした手を口元に「あら」と言いながら当てた。

「命取りって、あなたが呵責を感じているような意味じゃないわよ。傷つかないで」

「ああ、大丈夫。笑っただけだよ。ヒノダイもあなたがたにかかったちゃ子供扱いなのがおかしくてさ」

「まあ。そりゃあ当たり前よ。美しい人間との恋路なんて、私なら人がまだ文字を持たなかった頃に通り返ってきた青春——若気の至りそのものなもの」

「それって……、とつくの昔に人間を見限ったってことだろうか」

「一応は世界の禁忌なのでも。高い敷居を越えるほどの相手、そうそう出てきてもらっても困るでしょう？」

ホウ——森の深くで梟が鳴き、

「カルミナ王妃はそれほど稀なる人だったということでもあるのだよ。ガイートル、お前はかの人に恥じぬよう、世継ぎの王子として立派に私たちとの信頼を結んでくれなければならない」

厳肅に言つてよこす。

どん、とガイートル王子に背中を押されてシレイスはつんのめりつつ前へ出された。

「だから連れてきたよ。この楽士がきつと、みんなの眼鏡にかなう演奏を聴かせてくれるはず。楽士、ここに揃っている三匹は大体いつもこの宮中庭園で暇そうに過ごしているから、創作の手がかりは彼らから自由に得るといい。それは認められているから。大地の精霊 チニアカ 地赤と、緑生の精霊 ジュノアオ 樹蒼、水の精霊 スイノミドリ 水碧——いずれ劣らぬ長老だ」

「婆さんみたいに言わないで」

「そうだよ決しておれたちや老人だからひねもす眠いつてわけじゃないんだぜ」

ホウ——ホウ——

「うん、あとの四人は追い追い、だな。楽士、ほかに必要な環境や、物があれば言ってくれ。王宮に泊り込む部屋を用意させてる。朝一でサアンヌに頼んでおいたから今頃は完璧に整っているはず——サアンヌを覚えているか？ 彼女を世話役につけるから」

シレイスはその名を聞いて彼女の優雅な香りを思い出す。その瞬間だけふと気持ちが緩んだが、すぐに表情を引き締めた。

「楽士？」

無理やり王宮に引つ張つてこられ、何の変哲もない金きらの大扉を開いたところにある室内庭園という不思議空間に問答無用の勢いで連れ込まれ、三匹の聖霊獣と対面させられて紹介も終わった今までただの一言も喋っていないシレイスにようやくガイートル王子は気付いたように。

「まさか辞退します再び？ 男らしくないぞ」

「やだガイートル、筋肉質なこと言わないで。芸術家に敬意を払いなさい」

「すまない、楽士。——どうした、楽士？」

シレイスはふと首をそらしたまま、天井の水をじっと見上げてい

た。そこにある不思議はシレイスの興味を引き付けずにはおかなかった。それはサアンヌの髪から漂った香水の香と似て、ふわりと胸を掴む何か。

「楽士？」

ガイトール王子は手のひらをシレイスの眼前に振る。

「聴こえる……水の揺らぎ」

「——楽士？」

その手を避け、ふらふらと覚束無い足で歩きだす。音が聴こえる。音楽になる前の音が——。いいやそれは、音になる前の純粋な——

精神の粹^{すい}。

「粹^{すい}の塊^{かたまり}が聴こえる」

細切れの粹^{すい}が、宙の水から少しずつこぼたれて舞っている。もつと近くで聴きたい。そのかけらの中に飛び込みたい。無我夢中で追いかけて、最も近づいたところでシレイスの身体は柔らかな光に背中から抱きとめられた。

覗き込むのは美しいスイノミドリの碧玉の瞳。シレイスはうわ言のように、掴んだ精神の塊を口ずさんで歌う。スイノミドリの濡れた瞳が温かな光輝に満ちた。

「それはわたくしの真名の一部よ、芸術家さん。精霊の言葉だわ」

駆けつけてきたガイトール王子の足音に、シレイスは自らが闇雲に彷徨った距離の遠さを知る。片隅にだけ理性をおきながら、喉はまだ旋律を追いかけている。

「楽士、夢遊病か？」

とぼけたことを言いながらガイトール王子の顔は心配を激しく浮かべていた。

「芸術家の病よ、ガイトール」

「病気なのか。楽士、辛かったなら早く言ってくれば……無理に引つ張ってこなかったのに。大丈夫か？ 医者と呼ばなきゃ」

「王子、そうではない。芸術家の性だ。すでにこの者は、お前が望むものを創りはじめているのだ。我らを表現し、我らを慰める音楽

を」

「楽土——」

驚き、次に、嬉しがるのでもなくむしろ戸惑い、責任を感じるような顔付きをしてガイトール王子がシレイスを見つめた。

「面白い勝負になりそうだいの。お前の親父さんの献呈もなかなかだったが、今度もまた冥土の土産を増やせそうだい」

「紙を……五線紙と筆が欲しい……」

「ホウ——紙ならば木の屑。出してやれるが」

「いい、俺が取ってくるから」

じつと見る視線を剥がし、王子が走り去る。あとには宙に指で音符を描くシレイスと、のんびりと寝そべる赤い狼と、芸術家に肩を貸す水精の姫が残った。

蒼い鼻は森の奥から飛翔して庭園の端から端へ木の枝を移り、金色の眼を半眼にとろませる。

「ホウ——。月の姫の気配が感じられる子だ。しかし王子は気づいているのかいないのかわからない。勘が良いのか悪いのか……」

シレイスは出てきたばかりの楽園の扉を振り返る。

大素の楽園——そう刻まれた頑丈な大扉の中に、聖霊獣が住まい、幻想みたいな世界を広げている、などとは、一步出ただけで信じられないような気がする。もう一つ言えば、不可解にも思うのだ。とめどない幻想がその楽園には沸いていたとしても、人の手による建造物の中であることは変わらない。何故わざわざ彼女たちはここに住まうのか。まるで、聖霊獣たちはこの中に囚われているようだ。と……。

「すっかり日暮れ間近になった。三時ときくらいは夢中だったな、楽土」
硝子天井越しの空色に覚えた焦りを思い出して、シレイスは急ぎ、踵を返した。

「早く帰らないと……夕飯の支度が」

落ち着かずに呟くと、顔を見合わせてきた王子が親身に請け合った。

「そうか。サアンヌに会わせておこうと思っていたけど、そうだな、じゃあ今日はこれで。馬車で送らせるよ。でも楽士、料理人も雇っていないのか？　こちらで手配しようか？」

「いえ、いいんです。せめても、父には手料理を食べさせてやりたいので」

「いつも楽士が作るのか」

「作り置きじゃないのは夜だけですが」

「へえ、ああ、弟子の仕事としてか。もしくは家族が健康に気をつけなきゃならないとか？　イオニア、健康そうには見えるけど」

「ええ、父は健康でいつも意気揚々です。僕としては、その——いやなんでもない」

せめて娘らしいことを、というのが真実だった。だがそれをそのまま言えるわけがない。

「そうです、弟子の仕事です。家事は父も修道士見習いのころから経てきた修養ですから。修道院を出奔してから音楽家の元への弟子入りもその身についた要領の良さがあつたから有利だったそうです」
シレイスは少し先まで歩いてからガイトール王子の横顔を見上げた。ふつつ、多くの人はシレイスに母親はどうしているのかと訊く。シレイスの母は、北方山脈の向こう側の国、ノウスキグリスで宮廷勤めをしている。ノウスキグリス王太子リリスウタ王女の側仕えを姫の幼少時より仰せつかつてきた母は、今は国王から有名無実な夫姓を賜りストウラ男爵夫人と名乗っていた。著名音楽家の末弟子時代にノウスキグリス宮廷へ出入りしていた父と伯爵令嬢である母のあいだに燃えた恋は、身分違い甚だしいものだった。二人はイオニアの故郷ロートレグアンへ駆け落ちし、シレイスが生まれた。しかし三人の生活は一年足らずで追っ手に見つかり破綻。実家に連れ戻された母に落下した祖父母の怒りの稲妻は相当だったといい、常識から言えば修道院にでも閉じ込められるところだが、母はリリス

ウタ王女にすこぶる気に入られていたため王家が救いの手を差し伸べたのだそうだ。

父はノウスキグリス宮廷への出入りを禁じられたし、シレイスも公にはいないことにされている子供だから、なかなか会えない母である。それよりもなによりも話の複雑さ、そして嘘やごまかしで答えなければならぬことも人に訊かれて嫌な理由である。

ノウスキグリスで嚴重に秘された話だから、イオニアの過去は他宮廷には知られていないはずだった。

「楽士は孝行息子だな。才能があつて、愛情も深くて」
寂しそうにガイトール王子は言った。

いつも能天気な陽性を面おもてにしている王子が、人気のない薄暗い廊下で影のある笑いを刻んだ。

（珍しい……）

「あ、別におだてて言ってるんじゃないぞ」

「……」

「ここで改めて返事を聞いても？」

「……」

シレイスは歩みを止めながら目を逸らした。腕に抱えた紙束に注がれる視線が痛い。

「まあ、なんとかなるさ。気楽にやるんだ、楽士」

景気よく背中を叩かれて息が詰まる。咳き込んだシレイスにびつくりしたように王子が背をかがめた。「悪い、力入ってたか、あれ……？」

そのときシレイスの聡い耳に、こちらへ向かってくる二人分の足音が聞こえてきた。

同時にガイトール王子も前方へ視線を上げた。

「フェイドル王孫子……」

小柄な騎士を前にして歩いてくる誰かが王族の一人であるのは、服装からわかった。腕を組み、俯いて目を閉じているその人は、考え事か、瞑想でもしているか、あるいは眠ってでもいるようだった

が、足元は微塵も蛇行することがない。

すれちがうとき目付きの悪い小柄な騎士がわざわざ立ち止まる。値踏みするようにじろじろとシレイスを見た。シレイスは目立ちたくない思いで下を向く。

「久しぶりだね、ガイトール。懐かしい橙色は今も変わらず美しいね。まさしくサズ・ラミスタに昇り沈む太陽の色だよ、知っていたかい？」

シレイスは床を見つめながら目をひらいた。

（あれ……この声、どこかで……）

「お帰りなさい、フェイドル兄さん。今度の旅でもスパードンに寄られたんですか。兄さんはお隣が本当に好きなんだな」

「君の母君の故郷は胸の高鳴るところだよ。いつでも刺激的で素晴らしい、情熱の国だ。一度行ってみたらいいのに。気にし過ぎは人生が楽しくなくなってしまう、不幸な病だよ」

「別に、何も——」

「何も気にしてないだと、ぬけぬけと」小さく陰惨に吐き捨てたのは黒髪 of 騎士。

「オーザン」

注意した主に対し、騎士オーザンが礼をとる。

「失礼しました」

注視が逸れたと思いシレイスはよくよくその人の顔を見るために面を上げた。確かめずにはいられないほど似ている響き。

「え……。ドルー……？」

優美な黒曜色の瞳がシレイスを捉えて映す。見知った青年の顔を目の前に見いだして、シレイスは口を開けた。

「やあ、シレイス、やっぱり会えたね。すぐにどこかですれ違うって言ったの、嘘じゃなかったらう？」

瞳をなくす優しく親しげな笑みはやはり思った通りシレイスの友人のもの。スパードンの宮廷で友達になった、吟遊詩人だった。魅惑的な歌で王侯貴族を虜にしていた——

「ドルー、ねえどうしてここに?! その格好って……」

「ああこれ、窮屈な正装ね、似合うかい?」

「髪を編んでいるから、あなただとわからなかったよ! でもどうして……」

「仕事、変えざるを得なくなってね」

心底から窮している風に肩をすくめてみせる。「すっかり手持ち無沙汰だよ」肌身離さず抱えていたリユートの不存在を諸手上げて示し、頼りなげに眉を下げた。

「そんな、もったいない」

「知り合いなのか、楽士?」

戸惑うガイートル王子の声が降る。啞然とした顔で二人のやり取りを聞いていた。

「ええ、はい——」

フェイドル王孫子。さつきガイートル王子はドルーのことをそう言った。疑問に言葉を詰まらせたシレイスの辻褄合わせようとする動揺は、首を振るドルー青年の制止にあう。

「ガイートル、僕の身分みたいな細かくてつまらない説明は後で君からしてくれればいいだろう? ねえシレイス、聖霊獣への献呈を任されたの?」

シレイスは頷いた。ガイートル王子とドルーを交互に見て、眉間に皺しているガイートル王子より気心の知れたドルー青年に自然と寄った。そうだ、瑣末な疑問より、今は別の——。

「それはすごい。何がすごいってこのガイートルの見る目がこれほどまで優れてあるとは思わなかったよ。音楽で勝とうと思ったら、シレイスが選ばれるのは当たり前だよ」

「ちっともついていけないんだ。音に……聴こえる音に追いつかないんだ。こんなのは初めてで、どうしたらいいのか——」

迸り出るままに吐露した。音楽を媒介に親しくなったドルーは、聖霊獣の楽園を出て初めて掴まることができる柱だった。

「大丈夫、シレイス。君がこの世に導き出したものは、すでにこの

世で息をしている。あとからでも少しずつ落ち着いて手繰り寄せれば集まってくるから。大丈夫だよ」

額に手が当てられる。弦を繊細につま弾き慣れた親指が眉間をくすぐるように撫でた。こそばゆいが、軽快な励ましの込められた、それは確かな支えだった。共通した感覚が選ぶわかりやすい言葉だ。「うん」

ふと黒い視線を感じる。敵意の塊。

「離れる、チビ音楽屋。不敬だ」

「オーザン」

「――申し訳ありません」

かけらも悪びれていないのが丸分かりの陰険な鉄面皮でオーザンがシレイスを睥睨してくる。

あいだを塞ぐように割り込んだのはガイトール王子。

「オーザン、彼は俺の客人だ。侮蔑的な物言いはやめてくれ」

「申し訳ありません。承知致しました」

舌の根も乾かないうちに陰惨な眼をして小さく吐き捨てた。「どうせおまえの負けだ、母殺し」

目の覚める言葉だった。

盛大にドルー青年がため息する。

シレイスが振り返ったガイトール王子の表情には、衝撃も怒りも屈辱も浮かんではいなかった。目の前に蠅が飛んできたみたいになつと首をすくめた後、王子はわずかに斜^{はす}へ顔を背けて、力抜くよう笑いを逃がした。声はなく。

「ガイトール、我が騎士の不敬を心から詫びる。詫びついでに言わせてくれ。兄同然の者としての助言だと思って」

現実よりも物語を、教訓よりも恋の歌を舌に染み込ませた吟遊詩人が、いつになく真面目な顔付きになるところをシレイスは見ていた。

「いつまでもそれじゃ、だめだ。笑っていても勝てないよ」

早変わりの笑みでシレイスに“さよなら、また”を言つて、ドル

「——フェイドル王孫子はその場から離れた。ガイトール王子の反応も確かめることはない。王子は斜を向いたまま次の表情を貼り付けかねたように失くしている。」

「今度わが主に馴れ馴れしくしたら斬り殺すからな、ホネ」

捨て台詞してオーザンも主を追いかける。

「……あの人が、競い合いの相手だ。フェイドル王孫子。俺の父の兄の長子で、継承権第二位に連なっている。祖父リーアン王の最初の子は、生まれつき精霊の徴を持っていた。精霊とのあいだに生まれた子供だった。人であるかどうか分らないという疑いによって継承権を与えられなかった伯父は公爵に封じられて、でもその子であるフェイドルはれっきとして人と人の間に生まれた人間だから……。なんだか複雑な理屈だけだな」

こちらでも暗い廊下で止まっている理由はない。ガイトール王子は身をひるがえして説明を続けた。

「父の代から二派対立があるんだ。伯父は人格も才覚も優れた人だったから。フェイドル兄も賢い人だ。対立が表面化して国政を邪魔するような事態を避けるためだと思う、彼がロートレグアンにいかず、表向き身分を隠して外で遊んでいたのは」

シレイスは一度、いま自分たちが来て、フェイドルたちが消えていった廊下の奥を見返った。楽園への通路を。

（ドルーが相手……）

吟遊詩人ドルーの歌は夜会の隅では場が求める耳馴染みのいい水準を逸脱せず彼らを虜にしていたが、自由な時間にシレイスが聞かせてもらったものは豊富な音楽知識と技巧と洗練された感性とによって紡がれる本物の芸術作品で。

歴史への造詣も深く、じゅうぶん転々と生きてきたシレイスよりも彼はさらにいろいろな場所を歩いてきていた。

何より彼の武器は艶のある声の良さで。

いっそう勝てる気がしない勝負になる、とシレイスは生なまの経験から悟った。だが、一方で、あのドルーが創る最高の芸術とはどんな

ものか、興味を押さえきれない自分を意識していた。勝負、という言い方はおかしい、と思った。ドルーはスパードンの夜の庭で言っていた。『生まれた音楽は誰のものでもない。けれど生まれたがっている音楽を殺したり、不完全に歪めてしまったり、……向こう側にいる音楽の囁きと真摯に向き合わない者は至上の喜びに達することができない』

ならば、どうせなら、相手が彼でよかった、と思うべきかも知れない。献呈儀式の日、そこに披露されるものは、シレイスが求めるものと同じ、純粋な芸術だろうから。

「賢いけど、掴みどころがないんだ」

ガイトール王子は苦手意識を隠さずに頭をくしゃくしゃと掻いて、あはは、と笑った。

4

「楽士さま、襟足にこてを当ててもよろしい？」

侍女のサアンヌの手は優雅な声音に反して、もうシレイスの髪を引っ張っていた。差し出した片手にはどこから飛んできた配下の侍女によってすかさずこてが渡される。熱く熱せられ済みのこてが寝癖の跳ねた襟足に礼儀を叩き込んだ。

「いやだ、ゲージュツカのずばらなところって、でもある意味魅力よね。なんか憑り付かれちゃった感じって言うの？」

サアンヌと瓜二つの顔をした少年が頬を押さえて端から茶々を入れた。動きたび薔薇色のふわふわした巻き毛が陽光をはらんできらする彼はサシン。聖霊獣たちの軽口にのぼっていたガイトールの従者だ。サアンヌの双子の弟だそうだ。

「クラヴィーアってどこことなく女体っぽいよな。こつ……この曲線が、ふくよかな曲線が」

反響板の突端にかぶりついて煩惱十割の頭の中身をダダ漏れさせている美麗な容姿の騎士キューグは、今日から献呈儀式の日までシ

レイスの警護に付くことになっていた。

譜面台の五線紙へ走らせていたペンを主旋律の区切りまでたどり着かせて、シレイスはやっと顔を上げた。「すみません、寝癖、直している暇がなくて」すでにこてなどしまわれていて、背筋に巻き尺をあてがうサアンヌの冷たい手が耳に一瞬触れて離れていく。

「腕をお広げになつて」

従うよりさき両側から取られた腕に、巻尺は素早く渡った。

玄人の仕事だ。

「献呈の日の服を作るんですか？」

「ええ、それもですけど、普段の御召し物もいくつかすぐにお仕立てしますわ」

「これ、まずいんでしょうか……？」

シレイスとしては、一応は持つている中で正装以外のいちばん良い服のひとつを着て家を出てきているつもりだった。持つている良い服はいずれも各国の王都で誂えたものだから、みつともないということはないはずだ。

「美味しくはございませんわね」

「サアンヌちゃんはそのへん厳しいからなあ。つねに。隙なく。視姦されてるのかと興奮しちゃうときあるから」

「やだー」

「まあご謙遜。キューグさまのお姿ばかりはいつも目が滑ります」

中身が変態だと思つと目が汚れる、という裏を込めてサアンヌが微笑んだ。

「アタシが針以上重いものが持てないのも、バカ以上悪い言葉が言えないのもネエさんのせいなの」

耳元にサシンが打ち明ける。

「でも好きなのは女の子だから、安心してね、キャ！」と跳ねた。

濃い三人にあてられてシレイスは頼りなく与えられた部屋の中を見回したりする。一息に一楽章ぶんのクラヴィーア譜を書き付けた身体が軋んだ。そのあいだの記憶が曖昧で、まばたくうちゆっくり

と意識の焦点が合ってくる感覚があった。

ガイトール王子の姿は今日まだ見ていない。キューグによれば、週の頭と終わりは近衛陸軍の閲兵訓練が王子の公務として入っているそうだ。王宮前庭に七師団すべてを代わる代わる入れ替えての訓練は一日がかりのものになる。

「あいつの隣でまっすぐ立ってるだけでも美貌だけで殿下付騎士になった俺には辛い。苦行すぎる。一週間女体絶ちするのとどっちが辛いかつつたら女体絶ちだけど。何が楽しくて野郎共のヘツ！とかハツ！とか聞かされなければならないのだ。俺がいくら喘がせるのが得意つっても——」

最後は声の調子を変えてじつと壁際に並ぶ侍女たちを見つめた。かすかに陰らせた睫の効果が侍女達にそわそわした空気を紡がせる。聞くに耐えない言葉を美貌で落とし文句に消化させてしまうから夕チが悪い。「一カ月も女人天国に遊べるなんて幸せすぎて昇天慣れしてしまいそうです」

今朝シレイスを音楽院に迎えにきたときから銀髪の騎士は快速だ。アレグロ

これが献呈儀式までの一カ月、敷地に警備の置かれた音楽院の外では四六時中ひつつかというのである。ヒノダイの攻撃に対抗手段があるのかと訊いたら、無いという。直情的な性質を持った精霊であるヒノダイがただの駒であるシレイスを襲ってくる可能性も、王子たちの考えでは低いらしい。第一に警戒するべきは人間、——政敵勢力の搦め手なのだった。

「王子殿下も一日中ヒマでは無いのですね。今頃はあくびを噛み殺していそうだ」

本人がいらないのを良いことに、シレイスはつい王子の能天気さを揶揄して言った。楽園を訪ねてからの自分とはめどなく湧いて出る音楽に巻き込まれていた。吐き出さなければ楽になれないとわかっていていた。完成させなければ満足できないとわかっていていた。この音楽を完成させるといふことは、王子の依頼を叶えることだ。つまり、まんまと巻き込まれたのだ。音楽に巻き込まれる前に、王子の明る

く強引なテンポによって巻き込まれたのだ。

「先日までガイトール殿下は朝夜なく書宮に御籠りでした。週明け週末の閱兵訓練、週半ばの海軍閱兵のあともお休みになることなくいつ寝ていらしたのか存じませんわ」

「調べ物ですか？」

「献呈をどういうものにするか、研究していらしたのです。なかなかお決まりにならない様子で」

「取り掛かるの遅いんだよあいつ。焦らし屋？」

「さんざん噂されちゃったの！ ガイトール王子はやる気なし子だつて。負けるのわかつてるから逃げてるんだつて言うわけ。王になりたくないんだつて決めつける人もいたわよ。器じゃないからちようどいいつてどーいうことよ。アタシくやしくてキーってなつてたんだからっ」

「実際、取り掛かり始められたのは国王陛下から期待の言葉をかけられてのちのことでしたから」

発破をかけられるまでは、やる気がなかったと聞こえる。

音楽催の席での居眠りには理由があつたことを知つたが、ひとつ減つた先からひとつ疑念の種が増えた。

「よくわからない人だ……」

一番わからないのは、献呈芸術の創り手をシレイスに拘る理由だつた。

ガイトール王子がつけた注文は一点。交響楽の主題はスパードン・サズ・ラミスタの舞踏音楽を下敷きにすること。

ツキノムラサキがサズ・ラミスタの音に興味を示したなら、サズ・ラミスタに縁のある音楽家を連れてくればいい。血肉に刻まれたものと研究して得たものとは、真贋ほどの差が出る。そう考えて二、三人心当たりの名のある作曲家をシレイスは王子の前で挙げてみせたが、却下された。確実なのはイオニアの元にサズ・ラミスタの舞踏家を集めることだと思つたが、それも却下された。

（ツキノムラサキとの関係が知られているはずはないのだし）

知られるわけにはいかない。

「だいたい、敵が多いみたいじゃないですか」

彼を殺したがるほど憎んでいるヒノダイ。そして昨日の陰気な騎士が見せた異常な敵対心と、捨て台詞――。

「オーザンさまが何かおっしゃっていたのではありません？」

昨日フェイドル王孫子らと出くわしたことを耳にしているサアン又が、シレイスに合う色味を探して布を当てながら、首を傾ける。

「平然とおっしゃるでしょう。人の弱点を抉るようなことをね。あの方の性格です」

「あいつネエさんのこと好きなのよ。誰があんなインク壺野郎にうちの高嶺のネエさんがなびくもんですか」

「……『母殺し』と」

「まあひどい。言っていいことと悪いことの区別がついていないんだわ。キューグさま、主人の名誉を守りに行かなくてよろしいの？」

「え、でも意外と本当のことだから守るの難しくないか。世間に守って俺が得することとかあんまりないんだよね、乙女の貞操とかさあ」

「役立たずですね」

「立たないとかサアン又ちゃんも下品だな。もっと罵って、さあ罵ってくれなさい」

「本当のこと……？」

「カルミナ王妃はガイトール王子をお産みになった床にて御隠れになった。ただそれだけのことですわ。それがどうしてガイトール殿下のせいでしょう？」

シレイスは首を振った。

そんなどうしようもないことをネタに口撃して痛手を負わせられると考えるほうがどうかしている。言われて胸が痛むとしたらそれもどうかしている。完全に、ガイトール王子の落ち度ではないのだから。

相手にするのも馬鹿らしい、という意味で騎士キューグの主張も

一理あるのかもしれない。

「モテない坊主の言葉責めなんかピクリともしないが、しかし火の精霊に嫌われたのは痛いし災難だ。あいつのそばでうっかり俺も巻き込まれて何度ヤケドしたことか知れない」

いつにない深刻さを声音にも滲ませてキューグが指摘したのは、火を身近に置いておくことができないガイートル王子の境遇だ。聖霊獣は属する性質を渡って姿を現わす。月の聖霊獣は月の光に。火の聖霊獣は火気に。

「王妃が身罷られて三日後にはガイートルはもう死にかけてるんだ。背中は今でも跡が残って引き攣れてる。背中ではよかった」

「赤ん坊をですか？」

「ヒノダイはカルミナ王妃を王と取り合ったの、キャ。負けたけど。負けても好きは続いてて、精霊にとって感情が絶対だって言うから、愛する女を殺した王子を今でも許してくれないってわけ」

「これまた、とばっちりもいいところではないか。」

「聖霊獣の一人に嫌われていた、そのせいか王子は、どうせ自分は王になれないと思うながらお育ちになった。今一つご自分の勢力をまとめようとなさらないのも、その影響なのでしょうね」

クラヴィーアをなんとなく鳴らして、シレイスは眉をひそめた。

「なんだろうか、今ふと、脳裏をかすめた対位の旋律は。右手を左手が追いかけるように絡み合う、二種の旋律。」

「どうせ、なれない……」

どこかで聞き覚えのある諦めだった。

五年前、街道沿いの古びた教会でツキノムラサキに出会うまでの自分が、いつも噛み締めていた言葉。象牙の鍵盤からシレイスは手を引き上げて、ひらいた。少年らしい骨ばった手は、精霊の術によって与えられたものだ。仮初めの、昼間の身体。この姿は皮一枚、殻を被っただけのもので、身体や心の感じ方まで変わってしまったわけではない。出せる力も少年相応のものではない。精霊の心遣いには感謝しかなかった。身体の感覚が違えば出せる音も湧き出る音

楽も違ったものになってしまっただろう。シレイネ・アベールの願いは自分の音楽をつづけていくことだった。

ただし、まやかしを見破られないようにという思いから、言動はだいぶ用心深くなった。あれからは、娘みたいな言葉を出さないように、なるべく感情を表にしないように、疑いを持たれないように、シレイネ・アベールを殻の内側に閉じ込めて生きてきた。内にこもる情熱は音楽研究に傾けた。すっかり父からは、手に負えない堅物になったと嘆かれる。

だけど後悔は少しもなかった。

月の出ている夜の時間は、シレイネ・アベールに帰ることが出来る。シレイネは確かにこの世界にいた。この世界で、自分の音楽を紡ぎつづけていられた。

1

「フェイドル兄の騎士の言葉だけど」

切り出したガイトール王子の横顔は思わぬほど近くにあった。池辺のクラヴィーアの椅子の角をせしめて、邪魔するつもりなくシレイスの邪魔をして作業を見守っていた王子は、音の切れ目に真横を向いて。

「俺のせいで母上が死んだのは本当のことなんだ」

「聞きました。でもそれは全く殿下のせいとは思えない話でした。僕には関係ありませんし、もういいです」

声を硬くして答える。王子がシレイスに母のことを尋ねなかったのは自分自身に母の話題への忌避感があるからなのだろう。そうじやなくたってシレイスには興味のない話だ。

「そっか。じゃあヒノダイと母上のことも？」

「ええ」

そっか。と呟いてガイトール王子は恥ずかしそうな顔をした。前を向いて首筋に手をやる。

「サズ・ラミスタは母の母、俺の祖母の出身領地で、母上にもその血が流れてた。楽士が音楽催に弾いてた旋律は形見の自鳴琴が鳴らす音色と似てた。でも最初からそう説明すると子供みたいだろ？」

シレイスは理解しかねて首を傾げた。母を慕うことを子供みたいだとは思わない。そう考えてみてからはっと身をすくめた。少年はそれを恥ずかしいと思うのではないか――。

「理由としても違うしね。カルミナ皇女が好きだった旋律なら、ヒノダイにも通じるんじゃないか、そう算段したんだよ」

算段という突き放した言葉を使いながら、声音には、もっと人間的な響きがこもっている。

「フェイドル兄がサズ・ラミスタの色がどうって言うてただろ。それはヒノダイが好きだったカルミナ皇女の中にもあったものだと思うんだ」

むしろ競い合いの勝負云々よりも、この人はヒノダイと和解がしたいのではないか。したかったのではないか。ふとシレイスはそう感じる。

「ん？ 楽士、何だ？」

「何でもありません」

つい横顔に注目してしまっていた。短めに切られている橙色の髪は太陽の直射を受けると燃えているように輝いた。サズ・ラミスタの陽の色。確かに似ている。この色を音色に溶かし込むなら……。思い巡らしていたところに突っ込まれた。

慌てて話を変えた。

「伺いたいことはあります。過去の献呈芸術の資料はどこへ行けば見られるでしょうか？ やはり、参考にしておきたいと思うのですが」

「ああ、献呈芸術は正式な記録には残さない決まりなんだ。公式の芸術というものは無粋だという理由で。絵とか、彫刻とか、物として残っているものもあるが、それらも確証はないようにほかの物に紛れて保管されてる。散逸したものもあると思う。音楽になると、楽譜って宝物宮や書宮に遺されるものじゃないからな。音楽院の書庫に入っているのかもしれないが、膨大すぎるだろう。ただ、実はあの有名な曲がそう、ということはあると思うよな」

「国王陛下の献呈は何だったのですか」

「それが教えてくれないんだよね。公平を期すためってわけでもないと思うが。聖霊獣にまでだいぶ前から口止めしてるから念が入ってる」

シレイスはなんとなく、返す言葉を失う。その親子関係は謎めいていた。少なくともイオニアは、国王のような公平性をもった男ではない。娘が息子に変身し、その才能を晴れて宮廷に売り込めると

知ったとき、不思議や不審はほっばらかして喜んだ父である。上昇志向の強さは嫌がる子供を王子に売ってまで発揮されていた。けれど父の売り込みが愛情の裏返しであることもよくわかつている。幼い頃からクラヴィーアを教えてくれたのは、父だった。

「僕の父など作曲と指揮の次に得意なのは自慢話です」

吹き出したガイトール王子。

「楽士、それ冗談を言ったのか？」

「いえ、あの……」

「いや、ごめん。ありがとう。——この楽譜のこっちの字、イオニアのだろう？ 本当に仲が良いんだな」

そればかり王子が言うのは何故だろう？

ガイトール王子は暇そうに伸びをしてくるりと身体の向きを変えた。水があるところが落ち着くといって、クラヴィーア練習室から連れ出されてシレイスは太陽の下、水の音形の推敲をしている。今日は週終わりの禁労日、休日の音楽院に生徒はまばらだ。

だが王子殿下には休日も何もないはずだった。

「そう、楽士つて、やっぱりイオニア・アベールの息子というか、意外な面があったよな。突然夢中に駆け出して我を忘れるものだから慌てたよ。芸術家は生真面目に見えても血が沸くとああやってなるものなんだな」

思い出し笑いと一緒に言いだす。

「それと、驚いた。フェイドル兄に親しげでさ」

「反省しています。言葉遣いに気をつけるべきでした。身の程もわきまえずに——」

「いや違うんだ。嬉しそうな顔を初めて見たから。俺、もしかしてよっぽど嫌われてるのかなと。それもしょうがないかもしれないけど」

一度持った筆を膝におろしてシレイスは振り返る。

「しょうがない？」

「言っただろ、人望がないって」

平然と後頭部が返した。「フェイドル兄なら実力行使なく楽士を説得しただろうなって」

「……僕を貴族の方々と一緒にしないでください」

「楽士？」

険のある声に引つ掛かったのか、怪訝そうに王子は見返る。筆を握ったシレイスの手に力がこもる。

「人望があるうとなかろうと、音楽を道具にして誰かについたり、取り入るようなことはしない。僕は、機会を得て音楽を創ることにした——今ここに生まれようとしている音楽を引きずり出して、鳴らしてやろうと決めた。殿下のことなど、はつきり言っただうでもいい」

愚痴を聞いている暇もないんだ、と言いたいののはかろうじて呑み込んだ。呆氣に取られて青い瞳をみひらく相手の顔は正視できなかった。楽譜に被さるよう取りつくシレイス。

ふすふすと漏れる笑いで、命拾いを察した。

「ここに逃げてきて正解だな。王宮はなんだかピリピリしていて落ち着かない」

茶化した溜息まじり他人事のように言うが、二派對立の一方の極がこんなところで油を売っていていいのだろうか。

「どうせなら、もっと早く、禁労日礼拝に合わせてくればよかったな……」

王子は四方を気にするように見回して呟く。誰かを探しているように。

「君の生徒、名前はなんて言うんだ」

「え……」

まずい、と思う。まだ王子はツキノムラサキを呼び寄せた娘に興味を持っているようだ——。

「妹の気に入りの娘の名前、それはシレイネと言うのだ！」

「わあああ————！」

突然耳元に真実を怒鳴られた驚きと恐れにシレイスは絶叫して立

ち上がった。思い切り叩かれたクラヴィーアが不協の悲鳴を鳴らす。

「陽白ヨウノシロじゃないか」

クラヴィーアの傍らに立っているのは、ツキノムラサキ……ではなかった。見間違えるほどそっくりではあったが、あきらかに男性的な、力強い黄金の瞳がシレイスを覗き込んでいた。虹彩の色によって人外の実在であることを伝える以上に、目に眩しい燦燦とした光輝を纏わりつかせた――。

太陽の精。

「シレイネ……」

一人ぽつんとガイトール王子が、もらった名前を噛み締めるように呟いていた。

「妹の愛し子よ、伝言だ。くれぐれも昼と夜との境を忘れぬように」と

変身の解ける時間を肝に銘じていなさいという親身な忠告だ。暴露すれすれの言葉に背後を気にして焦りながらシレイスはこくこくと頷く。

豪気に笑む精霊は悪気の欠片もない顔をしている。妹と同じ衣装の裾までとどく白銀髪をひとつに編み、手持ち無沙汰な片手に振り回す。水面にきらきらと反射が飛んだ。

「シレイネ……。楽士と同じ シレネーダ（あやおるもの）の名だな。ぴつたりだな」

「そう、そうなんです。ですから意気投合を」

「心身一致しているよな！」

白日に晒さねば気が済まない性質がヨウノシロの合いの手にあらわれる。悪意がなくてもシレイスは焦燥に焦げつきそうになる。能天気なようで気をまわすところのある王子だから、まずい――

「シレネーダみたいに逃げてったんだよな……」

対岸を眺めるガイトール王子はこちらの話をほとんど耳に入れていなかった。一旦掻き消えて王子のそばへ現れたヨウノシロが、
「ガイトールよ、それはもしや初こ――」

口開いた途端、立ち上がった王子に口塞がれる。

「誰が聞いているかわからない。特にあなたの属性じゃヒノダイに筒抜けるかも知れないだろ。あいつ全力で潰しに来るに決まってるんだから」

「仕返しに同じ思いを味わわせようとする、か。ノウスキグリスの次女姫の馬車を火だるまにしたのは記憶に新しいな！」

「婚約の噂だけでね……って、今のもだ。誤解だ。その娘の音で確信を持てたから、礼が言いたいっていう、それだけだぞ」

「シレイネは修道女見習いです。外部の人間とはおいそれと話を交わしてはいけない決まりがあります。当人も著しく男性嫌いですから——」

「わかってるよ！」

予想外に大きな声を出されて身体がすくんだ。

「ああもう、恥ずかしいなあ、寄ってたかつて……」

水辺に座り込んでガイトール王子は頭を抱えた。かきむしる両手に緋色に明るむ髪が絡みつく。

「ガイトール。目に余るようなら坊主を懲らしめる役は引き受けようが？」

ざつくばらんに持ちかける精霊にガイトール王子は口を噤んで首振った。……ややして答える。

「いいや、ヨウノシロ、要らないよ。いいんだ。あいつとは俺が決着をつけるから」

「どうやら坊主も知恵のつくお年頃のようなだ。精霊混じりの子供と組んで、動いているぞ。教えておこう」

「フェイドル兄と——」

「気をつけるがいい。ロートレグアンの守護者としての忠告だ。ハリノガイは守られねばならぬから」

「ヨウノシロ？」

訝しむガイトール王子の呼びかけを置き去りに精霊は陽の光へ溶け込むように消えた。

「なぜハリノガイ……」

その王子の眩きの意味を一介の楽士は知らない。フェイドルの名が不穩に語られたことに胸を騒がせ、頼るよう譜面の音符を見つめた。柔らかな黒髪 of 青年の優しい眼と音色とを思い浮かべて。

（ドルー。王位を欲しがるような人には見えなかったけど――）

2

『火橙、そこで何しているの？ 壁の燭の真似かしら』

陽性の伸び伸びした声がかかる。ヒノダイはもたれていた鏡から身を起こして、大小の間をつなぐサロンからサロンを通ってやってきた姫を見る。差し出した手に、薄紅に咲く水中花。

『やる、これ』

『まあ精霊がお花をくれるの？ きれいな水中花。わたくしが貰っていいのかしら』

『おまえに取ってきた』

『地獄の七丁目ぐらいまで行ってきた感じかしら。そういう顔してるわ。ねえありがとう。嬉しい』

水滴のついた花びらに鼻先を埋める。香りを探して伏せるまつげと、結い上げた髪の色に、手の中の緑の茎がよく映える。上目に覗いた、透き通った青い瞳がきらきらと表情をつくる。

『私だつて、フラツチェロ火山の噴火口を降りて行ける自信があるよ、カルミナ。君のためにはやらないけどね』

『嘘つきは賢王のはじまりだといいわねシオール』

余計な男が口を挟んで、余計な返事をカルミナが返す。余計な微笑みまで。瞳の輝きまで盗まれてしまう。苛々しながらそれを眺めさせられる。

『すでに灼熱の溶岩まみれという説もある。溶かされやしないけどね』

ヒノダイはカルミナの手の中の花を奪った。

無理やり腕を引きよせ距離をなくさせた彼女の頭に、緑の茎を挿した。海に落ちる陽の夕映えを写し取ったような橙色の柔らかな髪に、可憐な花が咲く。

『似合う？』

顔を上げてカルミナはもちろん答えを疑わない笑みとともに訊いてくる。

『明日も明後日も取ってきてやる』

『被験体が水の中に住んだほうが早いな』

『何の実験よ』

『花に恥じない可憐さを身につける後天的訓練は可能か否かの実験』
減らず口の王子にむくれるカルミナ。

——苛々する。

シオール王太子は不敵に婚約者の拗ねた怒りを受け流しているだけ。こんなひねくれねじくれた人間のどこがいい。

（どうしてこいつの前でだけそんな顔するんだ）

こいつさえいなければ。

ヒノダイの日に日に増す苛立ちは飽和に達しようとしていた。今まで覚えたことのない膨張感が、ものを考えられなくした。ヒノダイは後の話もせずに実体を消した。

人型の手でその首を絞めるのはせめてもの温情だと睨みつけた。馬乗りのヒノダイに平常な目を仰向けて、突如として眠りから覚めさせられたばかりのシオールが悲鳴もなく言った。皮肉を、得意げに。

『私を殺すのか？ それをして何が手に入るって言うんだ？』

『カルミナだ！』

『カルミナの何が手に入るんだ。おまえ馬鹿か？ 私が死んだら後にはカルミナの抜け殻しか残らない。ろくに食べない喋らないつまらない肉塊がべそべそ泣き続けるだけだぞ。涙も乾き切ったらよく燃えるかもしれないが、燃やして楽しむのか？ 痛い』

殴りつけた拳に精霊は痛みを感じない。……はずなのに激痛が胸を走る。

わけもわからず、忍び寄ろうとする屈辱を拒んでヒノダイは叫んだ。

『何だよそれ！ 何だよそれ！』

『愛だよ。おまえ無知もいい加減にしろよ精霊のくせに』

『何だよ！ 愛って、おれだって……！！』

『精霊には無理だろ。ちよつとやそつとじゃ死なない精霊にはな。

人間はちよつとやそつとでころりと死ぬんだよ。愛は本能。愛は感情。愛は恐怖。愛は無謀。どれも精霊にだってあるだろうが、切実さが人間とはだいぶん違う。無謀でも恐怖でも感情にしたがつて本能を遂行する人間の複雑怪奇さはボオボオ燃えてるだけの一本調子クンには真似できんよ』

『うるさい黙れ！』

『カルミナに聞いてみる』

静かな口調で冷ますようにシオールが言った。

『……っ』

『聞いてこいよ。恋敵の存在が消えればどうにかなるものかどうか。カルミナが嘘が嫌いなのは知ってるだろ。万物の根源者なる精霊の利点を並び立てて訊いてこい。許可が出たら殺されてやるよ』

置き土産にもう一発殴りつけ、闇へ跳んだ。

カルミナは眠そうに起きて目をこすりながら、ヒノダイの放った宣言を朦朧と一度問い返し、二度目の言葉は真摯に聞いた。——シオールを殺す——ヒノダイは決意をたぎらせ、燃やして、彼女に迫った。——おれと来いよ、いいだろ？！

精霊の情熱を優しく聞き取って、そしてカルミナは問うた。

『その前に精霊の殺し方を教えてくれる？』

枕元の燭台を逆光に、にこにこ微笑む女。

『カルミナ……』

カルミナは掛布をはだけて寝台から脚を降ろすと、『あのね、座
つて』と隣を叩いて示した。

『火橙、聞いてね。わたくしはね、シオールを愛してる。あなたの
ことは好き。わたくしを好いてくれる人を嫌いになれたりしないわ
だけど、シオールのことは、彼がわたくしをもしも親の敵のように
嫌いだったとしても愛してる。彼はもちろんわたくしのこと愛して
るけど』

『おれだつて愛してるのに』

『ありがとう。でもきつと、あなたが愛するわたくしは嘘が吐けな
いわたくしでしょう。だから正直にごまかしなく言うわ。わたくし
はシオールとともに生きて、シオールと家族を持つて、シオールを
看取るか看取られるかして死にたいの。わたくしの魂はあの人の冷
たい眼に囚われてしまった。もう抜け出したくないわ。誰にも開け
られない鍵がかかつてる』

カルミナがまだ少女のころ、シオール王子の外遊先だったスパ
ーダンの宮殿で、二人は初めて出会った。そのときから、どこか捻く
れた王子をカルミナは興味深く心に捉えて、やがて仄かに想う恋心
に育てていった。ロートレグアンとスパードンの関係は好いときば
かりではない。ロートレグアンに防衛上の絶対有利が明確なゆえに
戦争にこそ発展しないが、まさにその有利を嵩にロートレグアンが
貿易関税の無理を押し付けければ、当然諸外国では反ロートレグアン
の気炎が逆巻く。

二人が成人する頃の二か国は、時折思い出したように燦る領海権
益をめぐる緊張関係が二十年ぶりに再燃した時期だった。折悪くロ
ートレグアンの国王が病に倒れ、世継ぎ争いの再燃を呼び、老生国
家にも混迷の気配が兆していた。

十二で出会い、別れて、六年間会っていなかったシオール王子か
ら手紙が届いたとき、カルミナは自分の運命と人生の役目を悟った。
それは、六年越しの予言の成就のようにひらけたこの恋につづく道
を迷わずに突進すべきこと、そして二国の関係ごと強く結び付けて

しまえばいいというものだ。カルミナにはすでに北海の大島国ヒエロフに嫁ぐ日取りが決まっていたため、この略奪劇そのものが前代未聞の事件となり三国間を揺るがせたわけだが、過ぎてみれば雨降って地かたまるを地で行くシオールの知略の成功となった。シオール王子は手紙のみでなく、その身一つをスパードンの宮殿に現わして皇女を手にした。

豪傑で知られるスパードンの女帝に、その行動によって気に入られたシオール王子が王座につくなら、大陸西南には再びしばらく平和がつづくだろう。

『約束するわ、火橙。あなたに見せてあげる。わたくしが叶える特上級の幸せを』

話して聞かせた物語の最後にカルミナが、間近からヒノダイと瞳と瞳を合わせて、にんまりと笑んだ。

『祝福してほしいの』

シオールの献呈儀式と婚礼を翌日に控えた夜のことだった。

「嘘を吐いた」

カルミナは約束を果たさず死んでいった。幸せになるための道半ばで殺されたのだ。

「ころりころりと死んでく人間には出来ない約束をしたのが嘘だ、カルミナ」

彼女が死んだ日からヒノダイの嫉妬と怒りは純化して、躊躇いのないものになった。自分がもし人間であって彼女の伴侶であれば人の行く冥府まで追いかけて死者の魂を取り返す。なのに平然と王座を動かないシオールへの、憎しみ。そして彼女の命を奪った赤子への憎しみ。ヒノダイを支配した復讐心は、殺人者を抹殺し、冷血な王に絶望を味わわせることを望んでいた。

「精霊にも血縁という感覚が理解できるのですかね？」

錆びた鉄を踏んで小さな人間の気配がやってくる。夜闇から現れた黒髪黒瞳の男は陰険に引き攣らせた口で何か言っている。ヒノダ

イの考えを盗み聞いていたような内容の皮肉めいた問いを。「あなたが王子を弑そうとするのはシオール王への当てつけでもあるのでしょうか」

「精霊にも親と子の関係はある」

積み上げられた鉄樽の山は密会場所には丁度いい。南方大陸から油を運んだ樽の劣化した廃棄物が波止場の隅に吹きだまつた小山だ。赤錆の塊といった様相を呈し、凹凸の陰に死角を孕む。

樽へ凭れて胡座をかいたヒノダイの爪が、錆のざらつきに立てられては無意味に搔く。

二人のめぐりを火柱の壁が燃え盛って囲った。これは精霊の聞き耳からの気配消しだ。

「陽白の野郎が嬉々としてバラしてるはずだ。木偶の王子の警戒は競い合いのほうに向く」

「決行日に支障はありません。我が主を放蕩から連れ帰れるかが一番の不確定要素でしたが、一筋縄ですんではとしましたよ。我が主の体質にとつては、あなたから聞き取れる献呈芸術の歴史は逆らいがたい魅力なのでしょう。主に代わって感謝申し上げます」

「お前の主は何を考えているのかわからない。本当にお前の動きは気取られていないのか」

「さあどうでしょう。泳がされている限りは泳いでいいという暗黙の了解のもとに我々の主従関係はある。何よりも自由を愛する我が主ですからね」

人間の事情など興味ないが、失敗したくない計画に狂いが生じては困る。精霊混じりの子フェイドルと騎士オーザンの関係性は、騎士の個人行動から一見危ういものと映る。だが、騎士のうそぶく言葉は偽りでもないらしかった。二人の間には忠誠のみが明確で、方法は問われないということだ。フェイドルの性格が、態度による忠義の証明を不要としているゆえに。

精霊混じりはその血ゆえに精霊の姿を精霊の意志に関わらず視ることができ、やろうと思えば知りたい情報を得ることも可能だろう。

「あの優男に頭脳があればの話だが……」

独りごちた火の精霊の化身を、胡乱げにオーザンが眺めた。

「疑義を深めるのはこちらなのですがね。ずいぶん気が急がれているようだ。正直お話を持ち込んでいただいたときは驚いたものですよ。何故ガイトール王子の殺害をそう焦っておられるのだ？ 機会ならこれまでもあったのにご自身ではものにできなかった、そのお悔しさはわかるが、献呈前にこだわる理由が不明だ。むしろ王子が世継ぎの身分を完全に失い、王宮から出された後であれば、あなたでも隙を得て思いを遂げやすくなるだろう」

オーザンの人相がさらに陰気にひそめられた。

「まるで献呈を恐れているようですね」

精霊の怒気は夜空を朱に染め上げる。

「怖いもの知らずだな」

息を奪われて脂汗に額を濡らしながらオーザンはふてぶてしい眼つきを外さない。

「なるほど強大な力は知恵いらずというわけで、獲物を逃がしてきているのでしょう。火気を遠ざけられても人型で近づけば難無く王子を仕留められるはずだが……」

人間の賢しら口にヒノダイは明後日へ息を吐き捨てた。

「やつには守護者がついてるんだ。クソ忌々しいことにな」

「守護者？」

「てめえには関係ねえよ。おれが指定した条件で始末の方法は考えたか？」

肩をすくめてのちオーザンは小さく畳んだ紙片を取り出してよこした。

「場所と時間表をどうぞ」

「確実にやれよ」

言われずとも——と、言葉にしないが表情に掲げる傲岸不遜が態度の慇懃さを帳消しにする騎士は、世渡りの上手いほうとは言えぬのではないか。こういう者を飼うフェイドルの器量を疑うべきか、

懐の広さを認めるべきか、それは人間たちの問題であつて、ヒノダイにはやはり興味の無いことだったが、この騎士が主への忠誠以上にガイトールへの敵愾心を持つてゐるらしい部分には、面白くもない想像が及ばないでもない。クソ忌々しい呪われ王子ガイトールには、能天気にはへらへら笑つてゐるだけの頭しかないくせに、生まれが地位を保証し、生まれが人を集める。害悪のなさそうな馬鹿面が人を信用させるらしいのだ。陰気で狡猾なオーザンには真似できない芸当であらうし、オーザンの主は直系第一子をつなげる本来正統な血筋であるにもかかわらず叔父と従兄弟に位を奪われている境遇だ、不倶戴天の敵という言葉をも人間はこのような者らのために作つたのだらう。

「お任せを」

抑揚と仕草から醸しだす空気が相手をこの上なく不快にさせる小男が、聖霊獣だからといって尊重する気持ちの欠片もなく慇懃無礼に応えた。

3

木陰に書を読む男の人が座っている。見覚えのある深い蒼色の髪は白いまだらをとるところはしらせていて、あの模様は何だったかと記憶を手繰れば思いつくものがある。

「ジユノアオ……？」

青年は声に気づいて顔上げた。知的で神経質そうな目許をまばたき、

「ほう、もうそれほどに書けたのかね、年若い楽士よ」

シレイスの抱える楽譜を見やりながら言った。

「はい、でもまだ全然、二楽章に手をつけたばかりで」

シレイスは木立の葉むらに視線を持ち上げた。硝子球天井に乱反射する陽光をかさなる枝葉の隙間から透かしみせる森の木々。草いきれも、爽やかな緑地の空気の匂いも本物で、けれど足元は大地で

あるはずがない。

「この楽園はどういった構造なんでしょう……天井もそれほど高くないように見えるのに」

天井より高い木立の森が、部屋の床面積を無視して広がっている。だまし絵のような空間――。

「ここは我ら聖霊獣の巣にして柵。七の聖霊獣は皆この楽園に魂を住まわせている。我らの魂あるところに素精が湧き出、人の目は濃い精気を事象として幻視するのだ」

幻……。

人の感覚を通して出現する世界。

「人にとってはより真実に近い幻であろう」

「たとえば、ある旋律に辛い気持ちを書し取られているよう感じて慰められることと同じに……」

「不自由な感覚器官しかない生き物なりに、人間は真実を描き掴む方法を多く持っている」

「真実……それは、たぶん、怖いことでもありますね」

ふとシレイスは俯いてしまう。ジュノアオの透徹したまなざしの前では、自分の正体はとくに暴かれてしまっているのではないかと、恐れる思いに気が散る。

「何が真実か、それさえ見誤らなければ、恐れることはないのだ」

黒目がちの瞳を細めて、ジュノアオは梢を仰いだ。

何かを指し示すように。

風もなく輝きながら葉が落ちて舞う。一枚、二枚、重なり、別れて、触れ合い、互いを追いかけながら螺旋を描いて落ちてくる。音はしないが文学者が文字にすればそれは、はら、はらりと音を持つ。音楽家が表現したら？

シレイスは筆を取る。

森の中で今確かにそれは聴こえ、幻の孕む真実の意味を教えた。

（聴こえる、緑の命の――）

緑の命の循環が、香しい息吹を撒き散らす。

「んー……ちよつ、待つ、お姉さん急に脱ぎはじめてそんな俺困る

――」

楽園の大扉の前で赤面する銀髪的美麗騎士が一人。

「こんなところで駄目だよ俺ほら仕事だし、あつ」

瞼を閉じて独り芝居を演じていた。

「だからほら皆見てるしぐむむむ……むにゃ」

寝言も高らかに、是非を問わぬ居眠りの只中であつた。

「んー？」

なぶるような風に前髪を払われて半覚醒した騎士の手はとっさに剣の柄を握っている。

鋭く見開いた瞳は無人の廊下を隅から隅まで一瞬に捉える。

「いま誰か通つたか？」

首をひねりつつキューグは背後の大扉を見返った。固く閉じられ、聖霊獣の許可なく人を受け入れない楽園の扉。塵ひとつ位置を動かしてはいない。

「変なの。つつか勿体なあ！ 折角の年上家庭教師系美女の誘惑が――」

「あらあら随分長いあいだ留守だったわねヒノダイ。あんまり境界の外を遊び歩いているとお父様にお仕置きされるわよ？」

「うるせえババア！」

「相変わらず言葉が貧困な坊主ね。それだからシオールにも負けるのじゃないの。わかっていて向上心もないのかしら」

「っ！」

元から機嫌の悪いヒノダイの癪癢が爆発の兆候をみせたものの、火と水では彼に勝ち目があるはずもなく。齡の差というものもある。「さつさとくたばりやがれ泥水ババアが！」

「この子は本当に精霊なのかしら……」

優雅に指先を額に当てて嘆くスイノミドリであった。

むしゃくしゃと人型の頭を掻き乱しながら奥へ歩いて行こうとするヒノダイに不審を覚え、妙齡の姫は色めく瞬きひとつで楽園中を水浸しの浅瀬に変えた。恨みがましい目をしたヒノダイが振り向いて睨んでくる。

「ババア……」

「あら、想定済みだからお前も人型で歩いているのでしょうに。心配しないでも、お前の寢床までも濡れに沈めたりしていないから。もしも小さな楽士さんに手をかけようなんて魂胆なら許さないわよ。聖霊獣の公平さに関わるわ」

「殺しはしねえよ。火傷一筋狙ってもいねえ。ただ挨拶してやろうってだけだ。聖霊獣との触れ合いは呪われ王子の希望でもあるんじゃないかねえのか？」

据わった眼で言っていて信じられる言葉じゃないわね、スイノミドリの独り言を聞かずにヒノダイは水を蹴散らして行く。

この泉は何だろう。いや、泉なのかわからない。吹き上がり、雨の降るよう落下して、あとからあとからとめどなく水盤の縁より流れ落ちているものが、水かどうかさえない。それは透明で、きらきらと輝いて、さらさらとした流砂のように見える瞬間もある。貴石を砕いて混ぜてあるみたいな流体――。それ自体に生命力が宿っているように、とく、とく、と水脈の底から鳴いていた。

「触ってはいけない」

手を伸ばそうとする前に、後ろから見守っていたジュノアオが言った。

「それは楽園の結界の源である 輝粹脈 の泉。この世界を構成してきた力の溜まりに通じている孔だ」

「世界を構成してきた力……？」

「構成しながら、循環している力だ。昨日が今日になるとき、今日が明日になるとき、時はどこへ消えると思うね？　時をつくる力とともに時の帰ってゆくところ、それが力の溜まり——この星の底だ」

「星の底……」

壮大な話に着いていききれないシレイス。だが、そういえば、先日來覚えたままの疑問はこの話に深く関係しているものなのではないだろうか。

「なぜ聖靈獣は、ロートレグアンに……この樂園に閉じ込められているのです？」

振り返った先で青年の老成した佇まいは賢明なる沈黙を選んでいった。かすかに躊躇いが窺われるのは、傾げる首の動きに梟のそれが名残っていたからだ。

「調子に乗るんじゃないやねえよ人間。ガキが！」

はっ、と流した視界に現れていた朱の化身。その声が紛れもなく、ガイートル王子を殺しにきたヒノダイのものだと耳に記憶するシレイスの身体が、強ばる。

足首が冷たくなって見下ろすと、透明な浅瀬がひたひたと寄せて背後の泉の向こうまで拡がってゆく。

「樂園に汚く荒れた言葉を持ち込むとはけしからんぞ、ヒノダイ」

「失せな、枯れ木のジジイ」

余裕の嘲笑を湛えて火の精霊が指を鳴らす。と、ジュノアオの髪先に火がついて燃えはじめた。見る間に人型をとりて羽ばたく蒼い梟は、切り離されて散る火の粉の中を旋回して枝の高きへ逃げ延びる。

間に挟むものなくシレイスは火の聖靈獣と対峙させられていた。

「ガキが、精霊と見れば取り入ろうってつもりか？　とんだ食わせ者を選ぶのは、呪われた人殺し王子の腐り切った本性がなせるわざだろうよ」

熱に充ちた眼の色だった。ぎらぎらした紅蓮の虹彩がシレイスを睥睨してくる。人の若者の、人生で最も情熱的な時期の姿の、その

粹を、写し取ったような容姿をしていた。これまで目にした精霊たちの中でもっとも生身の人間に似せた姿を取っていた。短い髪の一箇所のみ片耳の後ろから三つ編みの一房を垂らすのは、スパードン皇室の子女に見られる装いだから、そこだけ外見年齢に合わずおかしい。

生気をすべて復讐に注ぎ込む執念は引き結ばれた唇に露出し、薄褐色の肌に灼熱色の髪が燃えるよう波立つ。

「僕を、殺すんですか」

やっと、震える声でそれだけ言えた。

「僕、を？　だと？」

ばしやりと水を跳ね上げて近づくヒノダイから、人を弄ぶ殺気が放たれる。

「貴様、聖霊獣さまに虚言を吐くのか。とんでもねえな」

とがった爪がシレイスの喉元を引き搔きながらなぞり上げて、のけぞった顎を掴んだ。

「誤解するなよ、小娘。仲良くしてやろうって言ってたんだよ。せつかく奴が送り込んできた食わせ者だからな、楽しませてもらうさ」

そのまま耳元に顔を寄せて囁きかけてきた。「ここの箱入り精霊どもは人間どもの価値観には疎いからなあ。傷害沙汰にならない限り助けは入らないと思えよ、小娘。助けを呼んでも無駄だな。頼りのツキノムラサキだって人の娘が何をされてがっかり傷付くかなんざ、知りやしねえよ。そうだろ？」

びくりとしてシレイスは目をみはる。

（あのひとに傷付けられてなんていない。いないのに――）

「何……を」

「お前みたいなガリガリ女は趣味じゃないがな」

顎の手を払おうと振り上げた手首を、掴まれる。ヒノダイのもう片方の手が、シレイスの肩には降りていないはずの髪を掬うような動作して口元に寄せた。

（視えているんだ――）

「どこから見ても親愛の情の仕草だよなあ？」

盗み聞かれぬよう音なく口を動かした。裏腹に掴まれた手首に強い力がかかる。痛みより恐怖で俯いた。無理やり下から覗き込まれて、後ずさる。腕を引かれる。抵抗して暴れようとする力も、簡単に抑えられてしまふ。再び顎を掴まれて、仰向かされる。

「い、やだ」

「精霊の粹を分け与えようってんだぜ」

悪意を持って眼が近づく。

力で敵わないだけの相手なら、しかしどこにでもいた。シレイスにとつては。女と見られずに社会を渡ってきたシレイスにとつては。「……嘘だ。あなたの脅しは嘘だ。精霊が、人の心の機微に鈍感なわけではないじゃないか。芸術を要求する精霊が」

「へえ」

「だけど僕はあのひとを呼んだりしない。精霊に取り入ったわけじゃない。それはツキノムラサキへの侮辱だ！」

もがいた末にヒノダイを突き飛ばす力で身体を剥がせた。わざと手を放されたのかもしれない。たたらを踏んだかかところが固い縁にぶつかって止まる。いつの間にか思ったよりもシレイスは泉のそばに追い詰められていて、それ以上近づいてはいけない印として床を埋める飾り陶石タイルの縁まで来てしまっていた。

「お前より楽士のほうが大人よヒノダイ」

スィノミドリがシレイスの隣に実体を取ってくすくすと笑う。

「この坊主はねえ、あなたのことが怖いらしいわ、楽士さん。だから牽制しにきたの。柄悪く言うと、潰しにきたのね。いいえ、もしかしたら……怖いのはガイトールかしら」

「ババア！」

憤怒が鼓膜を打った。

「精霊は感情を偽ることが苦手なのよ。だから、幾らこのヒノダイがガイトールを憎んでいたとしても、あなたが誰をも魅了する芸術を完成させてしまったときは、素直に献呈を認めざるを得ない。偽

ろうとしてもわたくしたちにはバレバレなのですもの」

「ふん、こんな貧相なメスガキに可能なものか！」

「どうかしら。カルミナ皇女も身体は小柄な人だったけれど、話す言葉には力があつたわね。火の精霊さえ虜にする力があつたのでしよう？　そしてお前は怖れるのでしよう、その彼女の息子であるガイトルにも彼女の髪の色とともに同じ資質は継がれているかもしれない。さらにガイトルはカルミナ皇女を見初めたシオールの子でもある。その彼が選んだ楽士が怖い。ああ怖い」

ざあつと水の壁が立つ。

半透明な壁の向こうで巨大に膨れた火球がぶつかり来て、水柱を撒き散らす衝撃とともに水蒸気を上げた。

「もうちよつと平和に喧嘩できないのかいな。ほらスイノミドリさんや、睡眠不足は美貌に響くんじゃいな？」

蒼い鼻の並びに寝そべる枝の上から赤い狼の呑気な声。

「わたくしに対して使うべきではない呼称を連呼している落とし前分は払わせておかなければね」

「私怨ではないか。ホウ——」

二弾の火球は壁の手前で静止したまま動かずにいた。水の膜を隔てても眼の表面が灼けるような熱量の、橙の炎が、辺りを一段明るく照らす。ぼこぼこ泡の立つ音。沸騰——そして。

「精霊が人間の身体性に疎いのは本当だろうがよ」

爆発によって突き抜けた風が熱湯を散乱させた。

「……っ」

顔めがけて降りかかろうとした高温の水の塊。盲点を突かれたスイノミドリの反応が間一髪、水を操る。だがシレイスは反射的に腕を掲げた弾みで、陶石の角につまづき重心を崩した。ぐらり傾いだ身体の手元後ろには。

（泉が——）

『触れてはいけない』——踏み止まれ！　踏み止まれる！　頭がそう命令した瞬間、ぐらりと目眩がおそった。力を入れたい膝が抜

け、シレイスはふと意識を失いながら輝く水の降る泉に倒れ込んでいた。頬にパシャリと当たったそののぶちぶちと軽快に弾ける感触——赤子の笑い声のような澁刺とした力——手放される意識が捉えた最後の感覚。

《さあ——新しい要の生まれるときだ。私の中の貴女の内より、まだ見ぬ粹は形をとって生まれくる》

透明な声が聞こえる。期待と諦念の混じり合った男の声だ。それは鼓膜に届く音ではなくて、伸ばした手の爪のあいだから侵入しては、心臓の中で響いた。

音に触れるその手をよく見ようとするシレイネは瞳を持たない。耳も、足も、内蔵もない。腕とてないのに、シレイネは失った身体を探して四肢を伸ばした。

足掻くたびに記憶のかけらに爪の先が触れていく。

《わたしの全てを包む愛しい貴方。そのお言葉がわたしの身体を震わせる。貴方の愛が、わたしに子供を授けてくださる》

歡喜に打ち震える女の声。

《捧げよう、言葉なら幾らでも。貴女の苦痛を救えるならば》

慈愛と哀しみが男の意志を確かなものにする。

《我が子よ、どうか許して、お前を抱いてやることすらならない母を。どうか責めないで、お前の誕生は、望まれていたことなのだから》

シレイネは失った瞳で光景を見、失った耳で聞きたくない音を拾った。

（ああ、なんて……ひどいこと……）

子を産み落とした瞬間から燃え上がる母の身体。母なる気体を食い尽くす宿命の子。食い尽くされる覚悟の母にも抑え切れぬ断末魔が産声をかき消した。

その子供が生まれ落ちて初めて聞いた声は母の死に際のものだった。

た。

橙色の炎が頼るものなく泣きわめいた。

「シレイス……シレイス！」

自分の身体が誰かの腕に抱かれている。芯に力が入らず重たい自分の身体が。

張り付いたように動かさずらい瞼をなんとかひらいて、光を取り入れた視界に、心配そうに揺れる黒曜の瞳が映った。さらに覗き込む者たちの揃ってよく似た表情が、彼の背後にひとつ、ふたつ、みつ――。

「大丈夫かい……シレイス？」

抱え起こしてくれているのはフェイドル王孫子だ。

「ドルー……」

「戻ってこられた？　輝粹泉　に触れて気を失っていたんだよ。」

大丈夫、もう大丈夫だ。目が覚めたから」

安堵の微笑みを見せ、安心をシレイスに移してくれるよう頷いて、フェイドルは脱力するように息を逃がした。

「驚いてしまったよ。楽園に入ってきたら昏倒した君が助け出されているところだったから」

「ごめ……すみません、殿下……」

「殿下はやめてくれ。それより怪我はないかい、火の精霊が暴れていたらしいけど」

ヒノダイの姿は消えていた。七聖霊獣たちが魂を置いているこの楽園のどこかにそれぞれあるという巢に収まっているのか、また外へ出掛けていったのか。

「護衛の騎士を呼んでこようか？　ガイトールに報告しなければならないだろっし」

シレイスは彼の手から身を起こしながら、それを聞いて首振った。「ガイトール王子には言いません」

ヒノダイとガイトール王子とのあいだに接触の可能性を作りたくなかった。抗議を受けた買言葉でヒノダイは楽士の正体をばらし、てしまうかも知れなかった。そうでなくとも、競い合いを失格させるためにヒノダイはいつそれを暴露に出るかわからない。今までされなかったということだけしか樂觀要素はない。女と見て舐めてかかっているからヒノダイはあえてそれをしないのかもしれない。か「言えば心配させるから？ 心配させたほうがいいんじゃないかな。彼にはそういうことが必要だよ。本気を獲得するためにはね……」

「ドルー……？」

フェイドルは曖昧に目を細めて何も説明しなかった。気になつてぼうつとしているところに、もう一度痛むところや気分の悪さがなにか気遣われて、シレイスは慌てて立ち上がった。床の一面は緑の草原に変わっていて、ふかふかと乾いている。

「シレイス、気絶していたあいだ、何か感じたかい？」 輝粹泉にどぼんと浸かった人間は初めてだと思うから、興味津々だな」

「あ……」

身体と別に異界へ潜っていたような頭の中身を意識して手をやり、シレイスは経験したはずの感覚をたどった。覚醒して時が経つほど霞がかっていくそれ。

「記憶……みたいなものが……」

「精霊の子のフェイドル。そなたはよほど 輝粹泉 に興味があるようだよ。この前もむしろに話をねだろうとしていたじゃないな」

少しだけ厳しい声でチノアカが口を挟んだ。

「あなたがたもよほど 輝粹泉 を触らぬ謎としておきたいようですね。統べているのはあの方ですか？ けれど隠されれば隠されるほど秘密の中身は美しく尊いものと錯覚してしまうものですから、ね」

「純粋な興味ならば良いが」

「純粋な興味ですよ」

「美しい夢を膨らませるだけ膨らませて取っておけばいいわよ。紐

解くことは忘れなさい」

諭されて肩をすくめるフェイドル。

「残念でたまらないな」

星の底につながり、時を作る力を循環させているという泉。吹き上がり流れ落ちる力に触れて感じた出来事のことを、シレイスは考えていた。

「やはり顔色が、悪いねシレイス。血が足りていないみたいだ。家に鉄の鍋はあるかい？」

「え、うん……」

「なるべく鉄鍋で料理して、鉄鍋で沸かした湯を飲むようにするといい。食事はちゃんと取っているの？ 君はスパードンでも根を詰めるところがあつたから」

首を傾けて親身にフェイドルは心配をくれた。確かにこの一週間のシレイスは、朝も昼も林檎ひとつ、夕食こそ父のために必ず作るが自分は料理の最中のつまみ食い程度ですぐクラヴィーアの前に戻ってしまうという、不養生な毎日を送ってはいた。

さつき足に力が入らなかったのはそのせいだ。

「医学にも詳しいんだね、ドルー。あなたは旅しているいろんな知識を身に付けていたんだ」

すると困ったように彼は笑って、

「いいや、貧血はね、妹が年頃になるとよくそれで倒れてしまうようになって、乳母が厨に実践させた知恵なんだ」

どうということもない埋め草のように理由を聞かせると、自らも立ち上がり、シレイスの背中をそっと支えるように押して歩き出した。

「ちょうど正午の鐘時だ。外へ出て昼を食べようか」

二人は唱和するよう三聖靈獣に別れを告げる。

そつえばシレイスは、王都ルナーグへ着いてからろくに街を歩

いてみたことがない。早々に音楽院の自宅と王宮とを往復する生活が始まってしまったからだ。

「勝手に彼を連れ出してもヴェデン子爵は怒られないかい？」

風が髪を揺する無蓋馬車の上で、フェイドルが向かいの席のキューグに今更尋ねる。話を振られたヴェデン子爵は腕組みしたまま肩をすくめて、

「夕の鐘までに楽士を家に帰していただければ結構です。私もそれぐらいしか命令はされていませんので」

至極まともな口調で答える。それを聞くたびにシレイスは強烈な違和感とともに、自分のとなりに座るドルーが、紛れもなくロートレグアンの王子なのだと思い知らされる。もつとも、キューグに普段ぞんざいな口をきかれているガイトールとて紛れもない王子なのだった。

「夕の鐘？」

「楽士に家事の日課がありまして。親孝行は感心な事だとガイトール殿下が」

「ああ、そう」

なんだかフェイドルが笑んだ気がしたので、何故の笑みなのだろうとシレイスは彼を見上げた。気づいたフェイドルに、「風がよいね」と笑み返された。

「そちら、フェイドル王孫子殿下も、今夕はスフォアラス公爵邸へお出ましになられるご予定とか？」

「耳聡いね」

「お隠しになられてもいないようですけどね」

「海軍派とのつながりをつてことかな？」

「呼び方はどうでもいいですが。殿下を呼び戻すことに成功なさった彼ら、とても」

「破蓋派とも呼ばれる彼ら、か。海軍派と破蓋派とは乗っている舟は同じでも、国への要求はそれぞれ違うよ。海軍は船舶警護や各国間交流の場で他国の艦船を見て、軍事力の差を感じている。長らく

戦争のない国の軍隊は、どうしても進歩がありづらいからね。予算も抑えられているし。だから、ハリノガイの存続にかかわらず、自分たちの地位を今より押し上げたいというのが海軍の望みだ。陸軍はほとんどロートレグアンから出ないからね、飾り鉄砲という現実にも気づいていないようだ」

キューグはフェイドル王孫子のあけすけな時勢説明に視線を宙へと放り投げた。

「こちらの殿下を擁す陸軍は世間知らずのばか集団だとおっしゃりたいわけか。まあ、それはつねづね私も思っておるところです」

ただしキューグの意味は「泥臭い軍隊嫌い」という彼個人的なただの趣味だと明らかだ。

「現実認識と、それを踏まえての意見とは別ものだ。僕は必ずしも海軍の開明気質が褒められたものとは思っていないしね」

王宮の外に広がる王都中心庭園。宮殿門の内側にも広大な苑が抱えられているのに倍して、王都中心部に面積を占める水と緑の園。王立音楽院はこの王都中心庭園の中に建っており、ほか各種の省庁や、王立裁判所、宮殿の書宮に収まりきらない古文書を収蔵した書宮分院などが区画ごとに点在する。

常緑の木立の間の主線道を馬車は街へ向かっていた。

市民の憩う場所でもあり、池と池を渡り縦横に凝らされた水路や、噴水、花の植え込みの周囲の芝に、あちらこちら日傘の輪が出来ていた。

「騎士をお連れにならずよかったのですか」

陰気な騎士と同席もしたくはないが、という表情半分、いくらか胡乱げにキューグ。フェイドル付きの騎士オーザンは主が楽園にまだいると思つて王宮のどこかに控えているはずであった。

「あれは君たちが嫌いだからなあ。あとで僕が怒られておくさ」

もしものときは君の剣を頼りにしている、と仕草で示した。ちょっと考えるように沈黙をおき、フェイドルはシレイスのほうを向いて話した。

「僕とガイトールは、秀でた部下を持つているという点では五分だよ。このキューグ・ヴェデンも、優れた審美眼を持つ侍女のサアンヌも、その弟で個性の強い従者も、ガイトールが動かずとも先に仕事を終えているような達者な人々だ。人を揃えるのは王として必要不可欠な素質かもしれないね。ただ、もう少しガイトールは主体性を持ったほうが良いと思うけれど、彼がそれをしないのはヴェデン子爵、君たちに一人で立つ力があり過ぎるからなんだよ」

「まあ、一理認めないではありません。少なくとも私は王子に対し何事が望みがあつてその元についたのではないですから。人の下に仕える気質ではない私には特に利があるとも思えなかったのですが、あれは人たらしなところがあつて、何だかんだ付き合っているうちいつの間にやらこんなことに」

「我が騎士オーザンはガイトールのそういうところが気に食わないと言つてね」

どこかで聞いたような話だな、とシレイスはキューグの態度を見ていて思った。いつの間にかこんなことに――それはシレイスの身に起きていることと同じだ。

「さっきのややこしい話を蒸し返しますが、私から見て王孫子殿下のわからないところは、その行動の原理が今一つはつきりしないことです。海軍派に担がれながら開明思想を否定される。自由を求めて出奔されるかと思えば窮屈な玉座を得るため帰つてこられた。それらが矛盾かどうかすら、殿下の思想を伺わないことには判断がつかないのですがね」

するとフェイドルは、わからない？　そうかな？　というよう大袈裟に首を傾げた。

「じゃあそれはわからないままにしておこうか。精霊の言葉を真似するようだけどね」

煙に巻かれてもキューグは大して不快そうな顔をしなかった。想定内であるように。

馬車は中心庭園を抜け、街の大通りへ差しかかる。週の半ば、ル

ナーグの中心大通りには芸術市が終日立つ。——絵売り、絵描き、骨董売り、楽器職人、大道芸人、移動オルガニスト、ヴァイオリン芝居、日記売り、墓石売り、朗読者、小劇団、タペストリー商人などなど、とりどりの披露が硬貨を乞い、そここの露店に物見の客がたかつて活気づいている。路地から覗ける小公園では軽歌劇の小屋が一日限り建てられていたりする。……シレイスが初めて見る母国の催し。母国の王都の、洒脱に芸術を楽しみ冷やかし慣れた市民たち。

とんでもなく長い足で歩く道化と王女と王様の人形の下を馬車はすりぬけ、ひとつふたつの露店に寄り第一の目的である食べ物を買って込んで、大通りの先に突端を垣間見せる海沿いの崖上まで一気に走らせ——。

「高みの見物とはこのことさ」

馬車を降りて歩く岬の庭園から港が見下ろせた。軍艦を背にした接岸場に正四角形が三つ点描されているのは人の整列がなす図形だ。「海軍演習においてはガイトール王子も賓客の立場ですがね」

直線距離として人は豆粒のようで観兵席がどこかなどは見当がつかなかった。崖上に吹き上がる潮風を嗅ぎながら眼下のその様子を眺めていたシレイスは、フェイドルに呼ばれて空腹を思い出す。

手に筆も五線紙もない。頭の中にも音楽が鳴っていないくて、ぼっかり空いたこんな時間は久しぶりだった。

東屋に露店の包みをひろげ、鳥肉の葡萄酢煮込みを麦パンに挟んだのと、胡瓜と豆の和えたのと、雷魚一匹丸ごとの香草焼きをフェイドルと分け合う。もっともフェイドルのほうは、子供に模範を示してみせるようにシレイスと食事をともにしているかたちである。王族の休憩中、キューグは東屋から少し離れた周囲を歩哨のように警戒して歩いていた。

「ドルー、スパードンでも、厨房からいろいろ分けてもらってきてくれたね」

「宮殿の厨房というのは面白いんだ。宮殿に限らず台所はどこもそ

うだけど。一日中いても飽きない。自然、その主たちとも仲良くなるというものだよ」

フェイドルはリユートを持ってきていた。

「ドルーはやっぱり吟遊詩を献呈するの？」

つまびく戯れな旋律の合間にシレイスは問う。何ら邪まな詮索、

斥候の探りみたいな気持ちではなく、期待がもたげてのことだった。

「さあ、どうかな。まだ決めていないかな」

「嘘だね。あと一カ月ないんだから、いくらドルーだってさ」

自分が常に追い詰められているような心地を過ごしているシレイスは、ふざけて剣呑な眼つきを作りながら。

フェイドルはあやすような苦笑を見せ、

「僕にもこの時間は必要だったんだ。やはり王族の衣装は駄目だね。息が詰まるよ」

貝の釦が縦に三つものぼる首元をくつろげ、作り付けの石の長椅子に脚を投げ出し、吟遊詩人の顔に戻った青年が、瞳を閉じる。

フラチエリダ

火の壺山の女神が恋するは

天空を充たす冷たい心

玻璃に閉ざされし聖域に閉じこもる人

再び会えぬは悲しすぎると

女神の涙は大地を焦がし

幾歳の永久を重ねようととわも

空に恋歌が響くことなく

砕かれよ 砕かれよ

あなたが見ないつもりでいるならば

砕かれよ 砕かれよ

わたしはけして、待っているつもりではないから

1

シレイネは譜台から書きかけの総譜を剥ぎ取ってわしと握った。

「だめ……」

呟いて、けれどすぐ、自分で自分の衝動に驚く。一度くしゃくしゃにしたものを広げて見つめ、音符を追った。

「だめじゃない……」

第三楽章の半ばまで、頭の中に音楽は鳴りやまず筆は止まらず辿り着いた。操り人形のようなものだった。身体を音楽が通り、筆に抜けていっただけ。引き出された音楽の粹^{すい}は、最初から完成されたものだった。だから間違いはないと思える。問題は、最後の盛り上がりの前にして、急に音楽がはつきりと聴こえなくなったことだ。

ここから先、まとめようと思えば形式にそってまとめられるのだが、それでは妥協になってしまう。

「悩んでいるのか、娘よ」

「ツキノムラサキ」

かたわらに現れた月の姫が最高音部のラを戯れにそつと鳴らした。「急にわからなくなったの。わたしが何を書いているのか。見えていた音楽が、先を見失ったとたん全体もぼやけてしまったの。ここにくるまではずっとわたしは無心だったのに……」

「そなたは、口寄せの霊媒師ではない」

「ツキノムラサキ……？」

ほの明るい夜空の下で美しい白銀の髪を床に届かせる精霊の姫は、高貴な横顔を見せたまま一つの音をゆっくりと叩きつづける。

「昇ろつか？ 下がるつか？ どちらへいきたいのだろう、この音は」

とても長くて透き通った指をシレイネは見つめて、問いに答えよ

うとする。すると、それは自分の中の気分を見つめるということと同じだと気が付く。それこそが音楽だと。

「もちろん、前楽章だってまだ未完成よ。最後まで書いたらさかのぼって着想を加え直したり、整えなければいけない。全体として何かを物語ってこそその芸術だもの。そう。でもそれが、見えないの。ここからがわからない。肝心なところが空っぽだわ！」

抜け殻のような彫像、という言葉がノウスキグリスにはある。体裁は整っているが心を打たないもののことを言う。この音楽に足りないのも――。

「シレイス！ いや、シレイネ！ 我が子よ居るか！」

「父様？」

内廊下を抜けて中庭池へ出てきた父が、腕を振って我が子と呼ばわった。

「サアン又嬢が家のほうにおみえになられてるぞ。急ぎの様子」

「サアン又さんが？ ……でも、どうしよう、今は――」

顔見合わせた月の姫はすまなそうに首を傾けた。月が日の当たらぬ影に隠れているあいだ、シレイネの本質も影に隠される。ツキノムラサキが五年前にかけた術はそういうものだ。天の法則を無視した変化は叶わない。^{へんげ}

「かなり切迫していたようだぞ、早く来なさい。なあに、夜だし、外套でも被っていけばわかりやしない」

大ざっぱな父に急かされてシレイネは立ち上がった。

（こんな夜にサアン又さんが……？）

昼間の身だしなみに目に余る粗相があっただろうか、とまず考えていた。職業的なサアン又の性格上、ありえないことでもなかった。父が貸してくれた外套を頭からすっぽり被って邸の玄関間へ出ていくと、照明の絞られた間に、きつちりと外出着に身を固めてはいるが表情も呼吸もありありと落ち着かず肘を抱いて立ちすくむサアン又の姿があつた。シレイネは多少声を低く変えて応対に進み出た。「もう寝間着に着替えてしまっていて、でもお急ぎのようだ」と聞い

たので、すみませんこんな姿で……。どうかなさったんですか、あの、サアンヌさん……？」

「サシンが帰りませんの。ガイトール王子の公務に付いていったきり、宮に帰る時間になっても戻りませんのよ」

サアンヌは明らかに動転していた。シレイネの布影に隠した顔もよく見ようとせず、そわそわと外を気にしながら切り出した。

「ガイトール殿下は戻られたんですね。殿下は何とおっしゃっているんですか」

「ええ、いいえ、殿下も帰っていらしてませんわね」

思い出すよう区切り区切り頷きながら答えるサアンヌ。ガイトール王子のほうが付属物か、とシレイネはまばたきかけたが、

「殿下……そう、殿下と一緒にこちらに伺っているのではと、それで参りましたの」

やはり動転して話が前後しているのだった。忘れ去られてはいなかったがガイトール王子が二の次には違いならしい。

「ここにはいらしてません。ヴェデン子爵のお邸ということとは？」

「ええ、これから行ってみようと思いますけれど……」

「王子がお帰りにならなくて、騒ぎになっているのでしょうか？」

「ええ、近衛騎士団と、王都警邏隊が集まっています。ヴェデン子爵にもすでに呼び出しが行っていることは思いますわ。ですから、一応訪ねてみます。弟が心配で、わたくし宮中で待つてはいただけなかったんですの。あの子、身体が小さいから……。夜分に失礼致しましたわ、楽士さま」

居ても立つてもいないで身を翻すサアンヌに、玄関の外まで見送るため着いていく。馬車に乗るのを助け、シレイネは謝った。

「僕も一緒に行きたいですが……」

「いいえ、楽士さまは大事なお身体ですから」

アベール邸の門扉に立つ警固の兵士を意識して答えるサアンヌ。

王子の許可なく彼らを連れて動くのは難しい。

「じゃあ、気を——」

そのとき王都の空が明るく染まった。

「な、に……?!」

濃紺の夜空に鮮烈な朱の炎が柱となつて立ち上がる。別の空でも閃光が走った。その向こうでも。あちらで、こちらで、ひとつまたひとつ火柱が増えてゆく。東西南北、なんらかの意図をもつて狙い撃ちするように点々とのぼる狼煙。度肝を抜く規模ではじまった灼熱の異変――。

「王宮前庭ですわ」

直近の火柱を仰いでサアンヌが灼かれてしまいそうに火影を灯す瞳を細めた。背後を見返り「警邏本庁と、陸軍兵舎の方角にも……もしかしたらヴェデン子爵の邸も――」、呆然と呟いた。南西、貴族の邸が立ち並ぶヘフ・ルナーグ通りの方角にも、垂直に刺さる竜巻雲のような橙色の火柱が見えた。

「なんてことでしょう……」

「足止めだ……」

ヒノダイだ。こんな大それた技が可能なのは、火の精霊しかいない。聖なる靈獣のすることとも思えないが――。

「とにかく、キューグさまのお邸へ行ってみますわ。あの方、汚れた中身ごと焼け焦げてらっしゃるかもしれませんけれど。……行つて!」

「気をつけてくださいね! くれぐれも!」

間髪入れず御者に命じたサアンヌの声の後を追いかけて叫ぶ。馬車は駆け足で門を出ていった。

残されたシレイネは――警固兵に背を向けて家の中へ引き返しながら、不安に唇をかんだ。よくないことが起こっているのは確かだった。

サアンヌは度胸がある、と心が震えた。シレイネの足は異変に疎んでたどたどしい。出会ったことのない事態に恐れが膨らんで、殻にこもるよう元いた中庭池へ逃げ込んだ。だが吹き抜けの張り出し舞台からは、炎に焦がされた空の明るさが目に入ってしまう。

「限定的な火だ。都を心配することはない」

思いやるよう再び現れてくれたツキノムラサキだった。

けれどそれを聞いても思うより動揺が静まらない自分の心に、シレイネは二重の不安を感じた。

ぞわぞわと気持ちの悪くなる胸の中で、鼓動がせわしない。

深く呼吸して、置いたままの楽譜を見つめた。集中出来るわけもなかったけれど、それでも――。

シレイネは頭を抱えることになる。逃げ場であるはずの音楽もまた、空白によって中断していた。けっきょく同じような不安がそこにもあった。（同じような……）不安。定まらない要。見えていないもの。見つかっていないもの。見ようとしていないもの。とても大事なはずの――。

なければ意味をなさない何か。

「ツキノムラサキ、ガイトール王子はどこにいるの」

何故そんなことを訊いたのか、わからない。ガイトール王子のいるところにサシンもいるだろう、とサアンヌに寄り添って考えたのは口から問いの出たあとだった。その問いを何故口にしていたのか。シレイネにも音楽にも、関係のないことなのに。

「船の上にいる」

月の精霊は自らが君臨する空の下を透視して答えた。

（海軍派がどうこうとか……）

二週間前に聞き流していたフェイドルとキューグの会話を思い出す。

「囚われているの？」

「そう」

誰かが救出に行くだろう。一国の王子なのだから。国を挙げて救出されるだろう。決まってる。納得しようと考えを持っていく先に、炎の残像がよぎる。

ガイトール王子に敵対する人間の勢力と、火の精霊が組んでいるのだ。相当に練られた計画が実行されている今だ――。

「王子は殺されようとしているの？」

「おそらく」

中性的な顔が深刻な陰影を漂わせて。

「ハリノガイの内にあれば王子の守護者が最悪を防ぐだろうが、ハリノガイの外に精霊は出ることができない。それを見越して船が港を出ようとしている。船をハリノガイの外に出してはいけない」

——せめて、王子の囚われている場所を王宮に知らせるべきか。

（それじゃ間に合わない——）

「ツキノムラサキ、わたし行かなきゃ」

椅子を鳴らしてシレイネはクラヴィーアを飛び出る。ツキノムラサキを見上げ、決意して願った。

「場所を教えてください」

「私にはスイノミドリのように戦い舞う力はない。スイノミドリはヒノダイの相手で一杯のようだ。それでも……」

「それでも行くわ。だってわたし……わたし、さっきのサアンヌさんを見たもの。サシンさんを見殺しにもできないわ。それにガイトール王子は…… magari なりにも初めてのわたしのパトロンなのだし、この音楽だって、このままで終わらせるわけにいかないんだわ！」

ツキノムラサキが静かに頷いた。ツキノムラサキはシレイネの無茶な願いを無下にすることがない。

「ならば、港へ」

月の道を娘は走りだす。

ほどなく、アベール邸門前に配置された兵士たちは、警護対象ではない金髪の少女が御した軽馬車が門から出ていくのをただ見送った。

港は昼に繰り返す喧噪を今は忘却してひっそり静まり返っていた。

いくつか艦影を闇に溶け込ませた軍艦は王子を捕らえる船とは違々とツキノムラサキが教えた。港の隅に係留された民間商船のひとつを精霊は指さした。夜闇を揺らして蠢く人影をまわりつかせたその船。大きな三角帆が特徴の小型帆船だった。内海航行に向く型だ。行き交うカンテラの明かりが時折浮かび上がらせる船腹の文字がスパードン語なのを確かめて、シレイネは眉根を寄せる。

港湾局の建物の影から窺い、乗り込む方法を探っているうちに、にわかには人の動きが忙しくなってくる。飛び交うスパードン語が出航を急かしている。時間を守れ、報酬が少なくなるぞ、と水夫たちがどやされていた。

（どうしよう……）

「——ホウ。助力しようとやってきた。私の知恵と技でよければ使いたまえ」

「ジュノアオ」

前触れなく肩に止まった蒼い鼻を驚いて見る。

「そこに散らかっている梯子を柔らかくして楽土を持ち上げることができる」

「そうか、木材ならお手の物なのね。ジュノアオ、船の出港を止めることはできない？」

「あの船はただの船ではない。最新式と思われる蒸気機関を内蔵しているのだ。帆の柱を崩したところで影響がなく、船自体を崩すと王子とともに海に落ちる危惧が」

「ガイトールはどこにいるかわかるだろうか？」

月明かりの届かぬところを見通せないツキノムラサキが訊ねる。

「ホウ、それがわからぬ。気配はあるのだが。おそらく木を嫌って隔離されているのだ。ヒノダイの小癪な入れ知恵と見える」

では人間が侵入して探すしかない。「いいわ、お願いします」とシレイネはジュノアオを信頼した。「わたし、創りかけた曲を未完成に放置したことだけはないの。父様の教育なのだけねど」

「承知した」

鞭のしなる音が空気を震わせた。打ち捨てられてあつた梯子がに
ゆるりと生命感を取り戻し、若葉さえ芽生えさせた木の蔓に変わ
る。シレイネの腰に巻き付いて、のびてゆく先を踊らせた。船のへ
りにすがりついた蔓が、シレイネを宙に手繰り寄せる。足元がなく
なつて臓腑が冷える感覚を味わつた一瞬のあとには、目線の高い船
上に着地していた。急いで物陰に隠れた。船室の外壁にぴつちりと
背を預け、船首甲板に行きかう大男たちの足音に一々びくびくとし
た。金物のひとつも持参してこなかったシレイネは、持っていたと
ころで保険にもならないことを知っている。父とともに船旅をよく
したシレイネである。クラヴィーアなら弾くより持ち上げる方が得
意な連中が船乗りだ。

錨は既にながっていった。船体の底から響いてくる振動。石炭を燃
料にした動力機関の音だ。

「船倉に道をひらくぞ」

ジノアオが厳かに言うのと、暗がりの床にぽっかりと孔が穿たれ
る。周りの床板がうねうねと波打つたかと思うと孔の中に階段を形
成した。

ツキノムラサキを船上に残してシレイネはそれを降りていった。
頭上で孔が閉じると真っ暗闇になったそこは使われていない倉庫の
ようだった。

「ここからはしらみつぶし王子を探さねばならないぞ」

「ええ」

始めはそこに積み上がる荷物にぶつかったり躓いたり、手探
りだったが、やがて目が慣れた。

扉を探り当て、外の気配に耳を澄ませる。

小型帆船型といえ、この一隻に任せられた荷は人間一人だけ。区
画も人員も、そう多くが必要な仕事ではない。操船に忙しい船員は
持ち場に、誘拐に関わる者たちはその荷の周囲に集中しているはず
だ。

人気のない廊下に出て、かすかに物音の高い方向目指して慎重に

進んだ。船は岸を離れた。回頭の揺れに重心を持っていかれそうになる。

「人は最上船室と艫の下部とを行き来しているぞ」

「下のほうの船倉に放り込まれている感じね？ サシンも一緒かしら……」

心配なのは、むしろ従者だ。邪魔なこぶは外海に出るのを待たず始末されてしまっている可能性。

廊下が突き当たり、左右に別れる岐路に来て、左側から複数の足音が近付いた。こちらへ曲がるだろうか。身構えているうち、右側へ行く先にあるらしい階段を降りてくる誰か男の鼻歌が——スパードン北部の子守歌だった。どうでもいいことだが——聞こえてきた。「ジユノアオ、下に降りるわ！」ささやくと同時にシレイネは踏み込みもしないで穴に落ちた！

階下の廊下に大音響をたてて尻餅をついていた。「すまない。慌ててしまった。ホウ——」人のいないところだったのは幸いだったが、異音を聞き付けた頭上でスパードン語が騒いだ。『何の音だ？ おい！』階段を駆け降りてくるスパードン人たち。——ホウ、ウム。とジユノアオ。「この下には人が集まっているぞ」

捻ったかもしれない右足首が立たず、廊下の奥に腰で後退りながらシレイネは態勢を立て直す。立て直しながら後ずさる。切羽詰まってどちらともつかない動きは時間を損する。

ようやく二本の足で立てた瞬間、シレイネの身体は背後から乱暴な腕に抱え込まれた。両足が浮く。厚い手に息を塞がれ、無理やりに連れ込まれた一室の扉が、涙で霞んだ目の前で絶望的に閉じた。

暗い。狭い。ざらざらする。

「暇だ。湿気てる。揺れてる。退屈だ」

膝を折って靴先が当たる狭い空間の壁の中、無駄に声がよく響く。聞く者もなく、しかし人がいないからこそ暇を持て余している。体

内時計は晩飯を待たずに眠るようには出来ていないのでガイトール王子は、詩でも作って、歌っていた。

「錆臭い。空気悪い。空気薄い。狭い。吐きそう。揺れてる。まだ夜だよな。暇だ。退屈だ。俺、死ぬのかな」

カンカン、カンカン、カンカンカン。後ろ手に縛られた手の関節で錆の壁に拍子を取って、「うん、なかなかよく出来てるぞ」

褒められたことのない教養の科目が詩歌である。おまけに楽園の三匹が断じるには、自分は音痴らしい。

「音痴は直せないだろうけど、悲劇的状況が作詞の才能を開化させることはあるよな、うん」

調子が出てきて続きを紡ぐ。

「それにしても真っ暗闇で！。空気孔は空いているけど！。鉄樽の外も密室で！。あー俺ここから出たときはざっくり殺られるときだよなあ」

素直な心から生まれるものが真の音楽だ、と才能ある従兄弟が昔、言っていた。なるほど真理だ。

「夕飯ぬきだし。寂しいし」

現状への嘆きを芸術へと昇華させることにもだんだん鬱々と飽きてきた。

どう暴れても頭上の蓋は開かない。

この嚴重管理下にすでに命はないも同じ、生き物というより荷物状態だ。

捕らわれたとき、『殺すのは外海に出てからだ』という実行犯たちの会話を耳にしたからガイトールは自分の運命を知ったが、すぐにこの場で殺されなかった理由が今一つわからない。『守護者の目の届かないところだな』とスパード人は言っていた。守護者とは誰だ？ いつもヒノダイの攻撃から逃げるのを手伝ってくれるスイノミドリやチノアカたちのことだろうか。だとすれば、この事件にはスパードンのみならずヒノダイが関わって助言を与えていることになる。なかなか長年の望みを達成出来ない火の精霊が痺れを切ら

し、政治の思惑を取り込んで最終手段を仕掛けたというところか。

「楽士じゃなくて良かった」

思った通り、ヒノダイのする妨害の予先が献呈芸術の請負人に向くことはなく、かの情熱はあくまでも、

（この俺が死なないと、母上の命を償えない）

——そういうことだ。

「俺で良かった」

楽士がこれ以上巻き込まれたら、可哀想だった。

本来、献呈とはもつと雅やかに執り行なわれる予定調和なものであるのに、今回ばかり権力争いの表舞台とされている、それだけでもすまないと思うのだ。

「良かった良かった。サシンも解放出来たし。後を汚さず俺の人生に悔いなし」

ごつ、と鉄鎧に後頭部を打ち付け、目を閉じてガイトールは無を思った。

初めから、無であれば良かった。存在を始めなければよかったのだ。

自分など。

生まれてこなければ、もっと良かったのだ。

「暴れない暴れない、無理やり手箒めにする趣味だけはないからね俺。はい、暴れない！ お嬢さん、あんた誰。人身売買でも兼業してんのかこの誘拐船は」

頭頂に顎をつけて上から覗かれ、シレイネは上目にその銀の髪色を確かめた。髪の色よりも確かに汚れた親父の口調が人物を特定させる——

「んーぐ、んええん」

キューグ・ヴェデン……そう叫んだのを聞かれなくて幸いだった

のかもしれない。シレイネの姿では。

「ウソよねぜえったい、ウソ！ 変な趣味で楽しんで押さえ付けてるのよこの男。ほら膝が膝の裏に当たってる、さらに割り込もうとしてるもの、キャ！」

扉を閉めたのはサシンだったのだ。

「うん身体は正直、って静かにしないと見つかるだろが。ほら——」
降りてきた男たちの足音が無人の廊下で戸惑っている。扉の陰の
がわに固まって貼り付く三人は息を詰めて時を数えた。

端から順々に扉の中があらためられる。この室の扉も開けられた。
が、広めにとられた倉庫としても使える船室の扉自体大きく、確認
もお座なりで、スパードン人の視界に入ることなくやりすごした。

足音がすべて階段へ去った。

「わたし、シレイス先生の頼みで来たんです。月の精霊さまのお手
伝いをするようにと。シレイネと言います」

力抜いたキューグの手から離れて一気に喋った。

「シレイネちゃん？ アタシ知ってるわシレイネちゃんに殿下から
お花と果物とお菓子と届けに行ったものオ。音楽院の隣の修道院の
子よ！（あらいケナイ、シレイネちゃん宛てだとは言っなって厳
命されてたわアタシ）あくまで喜捨よ差し入れよッ」

「月の……聖霊獣が見えるのかお嬢さんは。清らかな処女にしか見
ること叶わぬという聖霊獣がッ」

「ジユノアオもここにいます」

肩を示すと、初めて二人はその鼻に気が付いたように揃ってぎょ
つとした。

「俺、清らかな処女だったんだ……」

姿を見せるか見せないかは、精霊が人を選んで自在に可か不可を
与えることだ。ただし精霊と人の間に生まれた者の子孫には、精霊
を当然に視て、会話する力が、血の薄まるにつれ弱りながら残ると
いう。

「侍女のサアン又さまがシレイス先生のところへいらっしやって、

サシンさまという従者の方が戻れないと……。都中で火の柱が上がつて……。サアンヌさまはヴエデン子爵邸へ行かれました」

「じゃあサアンヌとは入れ違いになったんだな。俺ん家いまごろ火の車だろ？ あ、俺がヴエデン子爵。二十一歳独身です。愛人は五人までが限度と心に決めています」

「アタシがサシンよ。船に連れ込まれるとき王子が隙を作ってくれて逃げられたの。すかさず近寄りたくないこの男の寝室に駆け込んで知らせてやったのよ。そうじゃなければ浄化の炎が脳天に炸裂してくれてたでしょうにッ」

「ヒノダイも手一杯に力を使ってるらしいな。顔見て攻めなきゃしめないだろうに、座標頼りで炎の雷を放ってるっばい」

「急がねばなりません。ハリノガイの外に出たら取り返しがつかないとツキノムラサキがおっしゃるのです。内ならば守護者が王子を最悪からは守るだろう、と」

「守護者？ 何それずりい。知らない。え、俺もしかして必要ないじゃん——」

「王子はそれを知らぬ。シオール王とクウノコガネとのあいだの密約であるゆえ」

「クウノコガネって、七聖霊獣をまとめているという、最高位の……？」

表情を読むのも覚束ない暗闇の中で、三者三様の音声による説明がシレイネの問いによって静止する。ジュノア才は沈黙してとぼけた。

「とにかく間抜け王子を探して恩を売らないと。一度手にした既得権を手放すわけにはいかん。ただの貴族には許されないような婦女子いじりが言えなくなるじゃないか」

非常に間違っている理由で先を急ごうとするキューグであるが、行動自体には否やもなかった。暗がりに銀の閃きが流れた。公式な商売道具である抜き身の剣を手にしたキューグが、扉に取り付く。「とりあえず実力行使しながら近付こう。どうせ船を乗っ取らなき

やらないんだから。百人斬るには時間が幾らあっても足りないぜ」

「クウノコガネ。王の前にしか姿を現わさない彼がすべての鍵、か」
眼下に都を一望する丘の中腹、公爵邸の自室の露台にてフェイドルが夜気に呟く。

「フェイドル殿下、ご報告申し上げます。ガイートル王子殿下が行方不明の由。時同じくして王都各所から火の手が。火の聖霊獣ヒノダイの仕業と思われます」

眺めている景色に顕著な都の異変をわざわざ報告しようというのは、悪趣味の表れた挑発行為とは思えない。

「それで」

「は。詳細は不明」

「勝算があるのか、と訊いたんだよ。オーザン」

「ご質問の意味が不明。どうぞ、殿下はお心を献呈芸術に集中なさいますように」

「純粹な興味で訊いているんだよ。お前のほうの企みは上手く行きそうか？ 僕のほうは核心にまだ辿り着けなくてね」

振り返ると、主のほうの企みとやらの中身に対する露骨な興味のなさを含ませつつオーザンが返したのは嘲笑に近い空^{から}領きだった。

ロートレグアンにフェイドルが帰還した用向きについて騎士は把握しようとはしなかった。オーザンにとっては俗界におけるフェイドルの地位がガイートル王子よりも高くなりさえすればよい。ある意味で分をわきまえた側近だ、と言いたいが、俗界から離れたところの問題にフェイドルが心を傾けているとわかるとき、裏腹な態度に隠した敵愾心を目に見えぬ事象に向ける、その様子がいじましい。主のそれは失敗するのが望ましいと思っているのだろう。

もしくはそのためロートレグアンにいつまでも釘付けになっ
ていてくれればまあいいと。

好奇心の命令によってしかフェイドルは身の置き所を決めないと

知っているゆえに。

「行動原理がわからない、か……」

従兄弟の配下である銀髪の騎士の言葉を思い返し、問われるということは少なくとも、ある種の信頼に裏付けられていると了解していた。

信念などなく浮薄に生きているだけとは考えられていないらしい。自己中心的であるとも思われていない。そして自己中心的に動いているわけではない、という点で彼、またはガイートル王子を含めた彼らの推量は当たっている。ガイートルがもう少しでも我のある男なら、それでも敵対者として憎々しく思う気持ちを持ったかもしれないが、楽園へゆく廊下で行き会ったときの彼の顔は内向きの陰りを隠そうとしていた。

言わせてもらえば従兄弟の彼のほうがよほどふわふわと覚束ない生き方をしている。生き方ですらない。原理が見えないどころの話ではなく、ガイートルの場合、持ち得ないのだ。

「誰のものだろうと命の代償は高くつくんだよ。お前にも知っておいてほしいが、誰よりそれを経験すべきはガイートルだろうな」

くだらないことを聞いたように鼻を鳴らした騎士に葡萄酒の杯をつくつて渡してやり、

「上手く行くといい」

穏やかにフェイドルは笑んだ。

「真実を引つ張り出すには多少の犠牲が必要と、神話も語っているしね」

騎士は胡乱げに主を眺めた。風の男神が姿をなくして真に自由で透明な存在となったように、主は手足である騎士を犠牲に再び名もない放浪者に返ってしまおうとも思っていないか——そういう不審の眼であった。

「お付きはサシン一人で充分って言ったのツールなんだぞ。それを

まんまと誘拐犯なんぞというゲテモノに身を許すとは情けない」

天井に突き刺さったナイフの下でキューグの返す剣が相手の肩口を打撃する。骨まで抉り粉碎されながら壁にぶち当たった男。一撃で意識が飛んだようだ。

船内で出会うスパードン人たちは船員以外、軍事的に訓練された形跡のある男たちだった。出会い頭に奇襲的突進をかけるキューグの斬撃は、彼らに技量を発揮させない。

「だって表敬慰問先の病院から出たところを不意打ちでこいつらに襲われたのよッ。警備兵は火の玉に眷かれるし！」

「不意打ちじゃない襲撃とチラ見せがあるかつての」

「キャー、やめて来ないでエー！」

騒ぎの元へ飛んで来た男三人のうち二人をサシンの腕が続けざまに投げ飛ばした。怪力というべき力である。薔薇色の巻き毛を振ってサシンは内股にあとずさる。

「サアンヌエさんに叱られちゃうじゃないの！ アタシが危険な目に会うと苛々のはけ口として百人の令嬢と婦人の御召し物がこき下ろされるのよッ」

むしろ危険は怪力の餌食となった男たちにとってだろう。

いよいよ向こうが侵入者の気配に雪崩れてきた道半ば、守りが堅いということ、この先に大事な荷がしまわれている。

「堅い守りを落としたあとに待つのがツールってのがやる気なくすわ」

言いながら、短銃の点火動作に手間取る敵を容赦なく切り倒す。

「船中で火気は厳禁だろ、常識ってものを考えろ」

そうか、船の中にヒノダイは攻撃を仕掛けてくることはないだろう、とシレイネは気付く。

「キャー！ キャー！ キャー！」

悲鳴に彩られた廊下にはサシンの怪力によって戦闘能力を奪われてゆく大の男たちの呻きが通奏低音を響かせた。

「ガイトールくん、何処だ！ 隠れてないで出てきなさい。童貞のまま死ぬとか情けないと思わないのか！」

「やだ何てこと言うのよ！ 王子がますます出て来れなくなっちゃうでしょッ」

押し開いた両開きの扉の中は仕切りをぶち抜いたがらんどこの倉庫だった。

「ホウ——なるほど金気に邪魔されていたのだ」

倉庫の隅に赤茶けた筒が積み重なって並べられていた。十数個。錆の浮いた古い鉄の油樽だ。

キューグは迷わず並んだ鉄樽を順々蹴り上げていき、音の明らかに違う一つに見当をつけた。押込蓋の螺子を外して縁に剣先を挟むてこにして持ち上げた。「うわ、髪の毛が錆びてる」

「元からこういう色だよ悪かったな……」

三人と一羽が覗き込んだ樽の中、手足を縛られた荷物が情けなく上目をよこした。

「ガイトール王子……」

ほっとしたシレイネが呟くと、怪訝に首をもたげたガイトールが顔を合わせた。はっと瞠目する王子。

「きみは——」

「楽士の使いのシレイネちゃんだ。ツール、ぼうつとしてないで早く出る。まだ上のほうに実行犯の親玉が揃ってるんだぜ。俺もう腕が痺れて限界。一晩に十五発以上は無理だわ」

差し入れた剣先で縄を切りながらキューグ。

「王子、なんで返事してくれなかったのッ？ 寝てたの？」

「ホウ——高熱を出しているのではないか。顔が赤いぞ」

「あっ童貞バラされたのがそんなにキツかったのか——」

「……立ち直れない……」

自由になった腕で頭を抱える。

シレイネは、王子に手を差し伸べた。気配に気付いたガイトール王子がもう一度、びっくりしたようにシレイネを見つめる。シレイ

ネは王子が手を取るまで動かずに待った。非力さが伝わったとして今この姿なら不審には思われない。だから。

「光を浴びにいきましよう。さあ、早く」

そのためにシレイネはここへ来た。

船速が体感できるくらい上がって船が横揺れした。商船偽装のための荷物が見当たらないのは、足の速さで追っ手のかかる前にハリノガイを越えようという算段のものだろう。よろけるシレイネの手首に王子の指が絡んだ。

「きみに、助けてもらうのは二度目だ」

逆転した目線からシレイネの肩を確かに支えて不思議そうにまばたくガイトール王子。

「精霊のお導きです……」

「——ホウ。さほどのことはしていないが」

厳かに自己主張した梟。

「攻守交替。欲求不満は剣の露とともに振り払え」

「微妙に格好いい台詞に聴こえるのは何故だろうなキューグ」

「実績がすべてだろ」

二本差していた剣を分け、与えられ、主従のあいだに布陣が確認された。

「そろそろ一皮剥けてくれないと、玻璃が碎けて泥臭い戦の時代が来るのはごめんだ、王子」

拳を軽く胸に叩き込まれて、ガイトール王子が困ったように眉を下げ、そして小さく頷いた。

「精霊も人も苦勞するところは同じだ、シオール」

声はいつも突然に、中空より投げかけられる。

ロートレグアンの国王シオールは決裁にいそしむ執務机から視線を持ち上げずに、片手間の意識を割いて答えた。

「いつ一体何処で苦勞を感じられたのか皆目検討もつきませんが、

同情するのに金はかからない、惜しまず申し上げましょう、馬鹿息子を持つと存在感も弱まるほどのご心労がおりでしょうな」

執務室の空気に違和が生じ、亀裂から質量が増えてあらわれるように色つきの影が膨れた。もう一瞬を使つて、影は鮮やかな輪郭をとった。年端の行かぬ子供のかたちに。

「あれもガイートル以外ロートレグアンの民に死人を出さぬよう加減してはいる。一応は。一部の側近を除いて」

弁解がましい精霊の態度は珍しい。多少は危機感を抱きはじめているのか、とシオールは内心ほくそ笑んだ。搔きまわし屋の甥には感謝せねばならない。そして甥も彼を泳がせる叔父に感謝せねばならない。というよりも、かの王孫子は水の意志を的確に読んで泳いでいる節がある。彼は無駄無駄しいまで賢い吟遊詩人だ。尊敬する兄の子供だけあつて。

「さすが寿命の長い精霊の成長は日進月歩です」

「人のくせに未だ皮肉癖の一つも治らない有り様でいる君が言うのか」

私は火の精霊ほど成長のない愚か者ではない、と反抗の言を心にのぼらせ、シオールはいま署名したインクの乾き具合に目を留めた。その反発は皮肉を生成しなかった。その前に疑念がもたげたのだ。愚か者でない者は賢いかもしれないが、善いとも、貴いとも、正しいとも、言い切れはしない。

——成長とは、何かが薄れゆくことだろうか。ままならぬ現実への苦痛を叫びながら濡れていた心が乾いてひび割れてゆく行程のことではないのか。

「クウノコガネ」

「何を訊きたい」

精霊はシオールの心の空白を読んだ。ゆえに前置きなくシオールは問うた。

「たとえばご細君の——」

これは直裁的にすぎた。「……いや。精霊は、長久の記憶をどこ

まで鮮やかに保てるのだろうか、とね」

「昨日も今日も生まれた日の記憶も、今と同じ」

「それは」

話す相手の姿を初めて仰いで、シオールは人の感覚において計り兼ねる性を、それでも想像し、受け止めかねて頼杖をついた。

世界を身体とする精霊が、どこを視たとも言わずに警句を発した。
「船が玻璃を越える」

「あなたが看過してここにいるということは、あれは無事なのだろう」

いたいけな子供が人間臭さを演じて肩をすくめる。

「半ば脅されて約定を交わしたのもついさっきの出来事のようにだ」

「脅し？ 私にあなたを脅せる材料などありませんでしたよ。むしろ人間はあなたがた聖霊獣のぬるい犠牲なしではこの星の上でやってもいけないはずではないか。感謝こそすれ、脅すなどとてもない」

「我ら精霊が、感情を揺さぶる感情に抗えぬと知っているくせに……」

知らぬふりで応じていると、子供がふとあさつての方向へ気を取られるよう視線をやり、何か考えて頭を片手で押さえ、横跳びに跳ねながら姿を消した。どこにも偏在できる精霊が、わざとらしい芝居をするものだ。王には子一人に心労を傾けている暇はない。一国中の民を肩に背負っている王には、己の素直ではない性格を矯正している暇もなかった。

だから、嘘偽りを簡単に見抜いてくれる女性と巡り会えたことは、人生で一、二を争う幸運だったのだろう。

頼杖の上に展開する過去の記憶は鮮やかでありつつも、心は昔ほど強烈な痛みと苦しみと悦びを繰り返さない。精霊と人とは流れる時間の速さが違う。

いつまでも過ぎ去りにくい痛みと苦しみと悦び、というものを仮想して、その性によって自分へと向けられている炎の憎しみを噛み

締め、シオールは人知れず呟いた。

それは辛い、幸せかもしれないな。と――

当然と言えば当然のなりゆきだ、とシレイネは妙に冷めた頭で思っていた。これも無感情な少年を演じ続けた訓練の賜物か。

「シレイネちゃん！」

喉が冷たい。押し当てられた刃に奪われてゆく熱。

どこに潜んでいたのか――

船員を含めた敵との乱戦の中を、一刻も早く船の進路を変えるために操舵室へ走ったシレイネとサシンは、操舵手をジュノアオの編んだ蔓籠の檻の虜として位置を奪った。そのときだ、背後に銃声が鳴ったと思うとジュノアオの羽根に目がけて弾より早く火炎が襲い、隙にシレイネの背後が二人の男に占められていた。ジュノアオは消えてしまった。

「ガイトール王子殿下、こちらへいらしていただけますか」

甲板へ連れ出されたシレイネの前で、誘拐犯の頭目と思しき黒髪浅黒い肌の男が、磁石を手にして笑みながらロートレグアン語で言った。北に止まるべき針が不安定に揺れて、今にもぐるぐると回りがついていた。……船がハリノガイの裾に近づいている。

「いらしていただければこの娘を海に落とす」

シレイネは鋼のように屈強な腹話術師に操られる人形のようなていで甲板の端へ持つていかれた。非力であるとはこういうことだ。娘であるということは。

「何故この期に及んで時間を引き伸ばす必要があるんだ。娘を巻き込むな。さつさと俺を撃てよ」

あつさり剣を捨てたガイトール王子が男を睨みつけ、言い放つ。
「ガイトール」

膠着した包囲の中、斬撃を封じられたキューグが、非難するよう

に言った。状況とは別の、よりもっと大きな問題としてだ。

（どうしてそう簡単に）

冷え冷えた頭でシレイネは思う。

「試しにそうしてみましよう。精霊の力というのを見る機会だ。撃て」

王子を挟んで甲板の左右に銃を構えた二人が立った。

僅差のずれを空気に響かせて発砲した——王子の頭を狙い。

「っ」

シレイネの身体がびくりと跳ねる。

「どういうことだ」

呟いたのはガイトール王子だ。

鉛の二弾は王子の前髪をかすめるほどの寸前でつづけて静止し、宙に留どまっていた。不可視の綿に埋まったように。

「火の精霊の助言は真実だった。しかし、そうであるなら時間切れもまた事実でしような。ハリノガイを出れば守護の力は及ばなくなる。ガイトール王子、あなたが命をなくされれば、保守派は力を失い破蓋派と海軍がロートレグアンを動かすようになる。ハリノガイの防御力を盾に諸国との間に強いてきた高圧的な関税設定も是正されていくだろう。ハリノガイさえ砕かれれば——何も、守りをなくしたロートレグアンをすぐさま取って食おうという話ではないのです、同じ人間の生きる国家たるもの、同じ条件下にあらねば不公平だ、と、これは周辺諸国の総意なのだ」

「はかりごとの首謀者は……」

「火の精霊ですよ」

ロートレグアンから出られない火の精霊が、スパードンとの密な関係を築くに容易だったか、という疑問を普通なら持つ。それに蓋するようにはスパードンの男は断言した。

「ならいい」

もしもフェイドル王孫子が王子殺害への関与を疑われれば国が騒擾に割れる。その懸念さえ払拭されれば、という顔をガイトールは

見せている。

「いや、よくないぞガイトール。フェイドル王孫子がハリノガイを取り払ったあと、こいつらが関与を暴露すれば結局ロートレグアンの政治が乱れる。そこを突いて一気に攻められでもすれば、ひとたまりもない。飾り鉄砲じゃ……」

「フェイドル兄はそんなに馬鹿じゃない。彼の人を魅了する能力の元で政治は乱れない。ハリノガイを開くにしても諸国に劣らない軍備を整えたあとにするだろう」

「お前は王になるつもりがないのか！」

「俺は王太子じゃないんだ。つもりもなにも、意気がる義務も権利もないんだよ、キューグ」

「お前……」

「俺とフェイドル兄は同等なんだ。国王の目から見ても、それはそうなんだ。だから公平に聖霊獣の評価を借りて決めるしかないんだよ。国王にとってそれが一番納得できるんだろう」

他人事みたいに淡々と王子は言う。

（どうして、簡単に、あきらめて。どうしてもっと、執着しないの）
己が生命にさえ、執着がない——。

サズ・ラミスタの旋律と拍子がシレイネの耳に蘇る。それを火の精霊に聴かせたいと言った、王子の表情とともに。でも彼が、本当にそれを聴かせたいのは。

本当に分かり合いたい相手は——。

シレイネは涙を落とした。

「そろそろだ。魔法の消える瞬間を、はっきりと見せていただこう」
撃ち方、と男が言った。

——始め。

ガイトール王子に放たれる弾丸。交互に弾込めし、間断なく打ち込まれる鉛。透明な守護に阻まれる悪意。けれど必ずいつか心は折れてしまうように、致死の衝撃が通り抜ける時が、近づく。

磁石の針がぐるぐるぐると回り始める——。

「死なないで、ガイトール殿下。あなたは嘘つきです。わたしと同じ」

ツキノムラサキ、目を潰して——叫んだシレイネの願いを聞いて月の光が、押さえつける男の目を眩ませた。シレイネは緩んだ腕から擦り抜けて、船の縁に身を乗り出す。人質さえいなければ。非力な自分さえいなければ彼らは船を乗っ取れる。

「シレイネ——！」

王子の声を背中に聴きながら、シレイネは暗色にたゆたう夜の海面へ飛び降りた。

「シレイネ……」

呆然と呟きながら、ガイトール王子は視界をふさぐ弾丸の壁を掻き落とし、足を踏み出した。ほぼ同時に左右を突風が吹き抜ける——

狙撃手に襲いかかったキューグとサシンだ。

敵に救援の隙を与えず両者は奪った銃を構えて舳先の首領と副官とへ向けていた。

逆転を意識にも入れず、ガイトールが辿り着いた縁から海面を覗く。

「何で……ほとんど知らない、俺なんかの……、……くそっ」

王子は迷いなく縁に脚をかけた。

「おい、トール」

「この船速じゃ、もう見つからないわッ……」

「探す。絶対に見つける。俺が見つける。死んでも死なせるか！」

水音が月明かりの海上に響いた。

「サシン、なあ」

取り残されて見送った騎士が気の抜けたように同僚を呼ぶ。

「死んでも治らないんじゃないかしら、我^がを捨ててるあの性格……」
呆れ返って巻き毛を振る従者の少年だった。

だが、それをキューグは、込み上げる笑いととも否定していた。
「——いや」

笑っている状況でもないのに、だがこういう状況でもないと言われて来ないものを見てしまうと、感動を優先させたくなる。

「あいつ今、物凄く久しぶりに執着したな」

いつだって、彼が邪魔をしにきた。破壊と暴力を携えた、憎しみの形相を湧かせた彼が。

読みさしの本は燃やされる。鳥を飼いはじめれば籠を壊される。気まぐれに、そして執念深く、復讐はガイートルの成長を脅かした精霊の弱点を分析して災難を防いでいくことをある程度楽しんでいたが、人が巻き込まれるのだけは何とも嫌だった。ヒノダイはガイートルが幸福になることを許さない。政治上の噂でしかなかったノウスキグリス第二王女に及んだとばかりを思えば、ヒノダイの本気度は知れる。

王子に娘を嫁がせようという家はロートレグアンの貴族の中にもなかった。少なくとも立太子のあと、できれば献呈を前倒しするかして、とにかく聖霊獣に認められてからの話だという風潮が以前からあった。

それはそういうものだと思っていた。

諦める前に、諦観していた。

誰も自分を求めない。

誰も自分は求めない。

冷たい漆黒の海に漂って三百六十度を見廻す。遠ざかる船と、月のほかは、形を取るものがない。悲鳴もしない。恐怖が背中を這い上がった。

とつくに彼女は海に吞まれてしまっていたら――。

二度と戻らないところまで落ちて。

届かなくなる。

……額の内側の痺れるような感覚は未知のもの。こんなふうに恐怖があるなど知らない。

知らない。

恐怖じゃない。

これは。

怒りだ。

（行かせない——！）

いつも死の危険から逃れてきた。勘だけは鍛えられたのだ。本能で、行くべき方向へ身を躍らせる。圧倒的な量の水を、掻いて泳いだ。確かに感じた。近くに感じた。光を。何かがそこにあった。おそらく求めるものが。

ガイトールは息を吸って黒い水に潜った。ひらく目に捉える、淡く発光する球体を何とはわからずに見定め、追いかけた。

海へ落ちた次の瞬間には、シレイネは自分の行動を後悔していた。泳げたこともないのに夜の海に飛び込んだりして、死ぬつもりもないのに、何故あんな王子のためにそこまでの行動を取ったのか、自分自身が理解出来ない。落ちた勢いと自重のまま沈んでいく時間を疑問符の生産で費やした。船の縁は喫水線から高く、水面にぶつけた身体はバラバラになるかと思った。

それから恐怖。疑問符を押しつけて窒息の恐怖が脳裏を支配する。けれど。

シレイネは両手で喉を押さえて口開けた。開けた口に水が入ってこない。シレイネを押し潰しているはずの海水が。

むせることもない。息が吸えている。触った髪が濡れていない。

（どういうこと——）

柔らかな感触の足元はうねうねと揺らぐ水の面だ。前に手を伸ば

して水の壁に指先が届くくらいの大きさがあり、充分な空気に充たされている。まるで気泡。浮き上がらずに水中にとどまるおかしさと、大きさと安定度の異常とを除けば、気泡のようだった。取り込まれて水中をたゆたっている。

溺れないとわかると出てくる余裕で見上げる海面は、月明かりで眩しいほどだった。気泡の周囲までは光は届いていないが、天地の感覚があるのは安心できた。重心のかけ方でときどきくると気泡はまわる。

が、浮き上がり方がわからない。気泡はだんだんと沈んでいくようにも感じた。たゆたう飛行の軌道が波に揺さぶられて上下蛇行しているだけかもしれないけれど。

沈んでいるとしたら、いつまで空気が持つだろう。

ずっと独り、海の暗き底へ沈んでいくのだろうか。旅の多い人生だったけれど、寂しい死に方だけは想像していなかった。

延々と、無限に感じる時を漂わされているうち心細さが募って、シレイネは創りかけの音楽を自然、くちずさんだ。（せめて音楽と一緒に死に行こう……なんて……）

ちよつとした身じろぎに気泡がぐるり回転した。水の壁の向こうに舞い降りてくる誰か。わずかに届く月の光に濃い暖色の髪色が照らしたされる。伸ばされた手が気泡ごとシレイネの身体を引き寄せた。

海上へ頭を出した二人に月の照明が注ぐ。荒い息をしながら険しくシレイネの顔色を確かめ、ガイトールは首反らし背後を振り返り見た。すぐ近いところに木製のしっかりした小舟が浮いている。「キューグか……」非常救命用の小舟を気のまわる騎士と従者がばらまいたのだろう。

「どうしてあんな馬鹿なことするんだ！」

乗り上がった舟の上でガイトールが両手を船底に着いて怒鳴った。ぼたぼたと頭から垂れる水がシレイネのつま先にかかった。シレイネはほとんど水に濡れていない自分の身体を見下ろし、本当にわか

らないことだらけだ、と思う。問われていることをシレイネが一番不審に思っている。

「怖かったから……」

口をついて出た言葉の出所さえわからない。

「あなたが死んだら、永遠に見失いそうで――」

生まれかけている音楽の、主題を。

それが一番、しつくりくる理由――。

「俺も怖かった。君がまた逃げて消えてしまったんだって」

ガイトールは上体を起こすと堪えきれないように魂まで出てきてしまいそうな溜息を天に向かって吐いた。肺から水の出てくる咳がつづく。

苦しげな瞳を無理にひらいてシレイネを見つめる。

「君のことあまり知らないのに」

間隔を置きながらもしばらく小さな咳が治まらないので、シレイネは心配になっておそろおそろ手を伸ばした。背中をさすると、目が離せないみたいにガイトールの拳動が止まって、シレイネをうつむかせる。

「知らないんだ。君がどんな嘘を吐いたのか。知りたいんだ」

うわ言めいた声音でそう言つて、シレイネをはつとさせたあと、ガイトールは突然首を真下に折つてばったり倒れた。

「王子、ガイトール王子！」

揺さぶり起こそうとして触れた首筋がひどく熱い。熱――こんなときに。

「ごめん……視察した病院で風邪もらったみたいで、ずっと寒気と吐き気がしてて」

「どうして早く言わないんですか」

「どこかに言える間あつたかなあ」

「悪化するに決まってる……」

不調な身体で剣を振り回したり海に入って泳いだら。それに今も水濡れたまま夜気に晒されて。

「嘔吐いてたんだ。君の言う通りだ。俺は――」

「王子？」

やはりうわ言だ。船底に頬を押し付けて混濁した目を閉じ、呟く言葉は。声が震えているから。

「ガイトール王子？」

意識を失ったように黙ったガイトールの、濡れてはりつく髪を睨からよける。

かすかに薄く目をひらき、本当に意識を手放すきわにガイトールが呟いた。

「すぐ戻ってくるから。だから。ここから消えなくてくれ」

「父上に嫌われたくなかった。最初は、それで笑っていたんだ。何か言ってくる者たちにも、まともに聞くより流したほうが楽だ。だんだん習癖になって、何を言われても本当に何も聞こえなくなった。まあ、夜一人になると思い出すんだけど。夜はヒノダイが火気を逃さず襲ってくるから気が逸れたりもする。ヒノダイに憎まれるのはそれほど苦じゃなかった。だってあいつは火だから、そういう性質なんだろうと思う。でも父上は」

月が遠ざかって、辺りは互いの顔も見えないほどの闇に落ちていた。

寄せ合う肩から伝わる体温だけが暖^{だん}で、王子の熱は意識が回復するまで下がっていたが、状況に照らして油断できない。風が冷たく、舟は波間を頼れるよすがなく漂う。

船ひとつ近くを通らず、星空だけがまたいた。

星を見ていると不安も心配も小さくなる気がする。一瞬一瞬だけだけれども。仰いでは一瞬一瞬を積み重ねた。

『月と星を見なさい、どこにいても、さびしくなってもならなくても』と、母が言った。『同じ月と星をわたくしも一緒に見ている』

「ヒノダイの怒りを見るたび、父上にも俺に対して同じ恨みと怒りがあるんじゃないかって、感じた。精霊じゃなくても、何分の一かでも。母上の死と引き換えだった俺を、父上は世継ぎに認めたくない気持ちがあるんだと、はつきり思い知ったのはこの数年だ」

立太子を危ぶまれてきた王子。ガイツールとシオール国王のあいだには、内々の保証さえ交わし合わされてはいなかったのか。

「父上にも伯父上に対する引け目の気持ちがある。王統を伯父の血筋に返せば、呵責から解放される。ただ問題は、フェイドル兄が破蓋派に推されていることだった。父上にはハリノガイを壊すという思想は全くない。当たり前だけど」

ロートレグアンの平和と優位を保つ蓋がハリノガイだ。

「俺が期待されているのはその分だけだ。でもそれだって、フェイドル兄は聖霊獣に認められ王位につけば、保守派を取り込み味方にしてハリノガイを結局守るんじゃないかと思う」

誰にも求められていなかった。

俺じゃなければならぬようなことは何もない。

「いつでも逃げられるように。ただなるべく憎まれないように。そう心して生きるようにしてた。……立ち向かった経験がないからなんだろう、こういう悪意は意外と堪える」

額を押さえた。隣国の一派まで巻き込んだとどめの殺意を突きつけられて、傷ついた心から、滲み出す声で吐露した。かすれた笑みに混せていたけど、偽り装う笑い方じゃなかった。

「おかしいよね、君は俺のこと名前しか知らないだろ」

目を見て言った。奥のほうで不安げにおどおどしている彼自身がい

て。シレイネはその瞳に頷いた。

「でも、そうじゃなきゃこんなこと話せないよ」

知らない同士だから、本当のことが話せる。本当の感情を出せる。隠しつづけてきた、感情を開放できる。

知らない同士だから――

『月と星の光がなかったら、思い出してね、この温もりを』——
そう言つて母はいつか別れぎわにシレイネを抱きしめた。温かな胸
と腕に。……泣きじゃくつた小さなシレイネを。

「——」

ガイトールは泣いていなかったが、朦朧と熱に冒された頭をもた
げているのも辛そうだった。意識のある限りシレイネの前で無様を
繰り返そうとしない。男だから、女の前では、ということだ。くだ
らないと思つた。楽士シレイスには再三、強引な力で勧誘をかけ、
無遠慮に背中を叩いたではないか。

「ガイトール王子。ヒノダイはあなたを憎んでいるのではないので
す。あなたに自分自身の生い立ちを重ねて、八つ当たりしているの」
娘の腕に頭を抱え込まれて絶句しているガイトールにシレイネは
有無を言わずたたみかけた。

「ヒノダイを産み落とすとき、大氣に住まう精のお一方だった母君
は我が子の力に焼かれ、燃え尽きてしまわれた。あの方も自分の出
生が許せないのです。同族嫌悪つて言うんです」

「……シレイネ」

君がどうして、と言いかけて、ガイトールはしかしあの夜のツキ
ノムラサキとの光景を思い出して納得したようだ。熱を引きずる喉
から囁いた。「君は精霊なのかもしれない。やっぱり、また消えて
しまふのかも——」

あまりにも海の只中の夜は静かで、互いの鼓動を聞いているうち
に二人の意識は睡魔に喰われてしまった。

——気がついたのは朝焼けに臉を灼かれて目を覚ましたときだ。
いつ動かされたのか、王子の上体を受け止めて抱いていたはずが、
起き上がるときシレイネの背中が堅い舟の縁から庇われるかたちにな
っていた。だがシレイネには次々とはっと驚かねばならないこと
があつた。夜が明け、朝が来ている、ということとは。

ぞつとして青くなる。時悪く王子が倒していた首をもぞと起こした。「ん……」

舟の端まで飛びのくように逃げたシレイネ。

「ん、朝……？ ……あれ」

四肢を畳む無駄な努力にあたふたして縮こまっているシレイネを視界に捉えて、不思議そうな表情で固まった。

「どうした、の？」

「……どうもこうも……」

必死に顔を隠そうとする腕に髪が絡まる。髪が？
引っ張って髪色を確かめた。

「なぜっ?!」

シレイネは目を剥いて叫んだ。

精霊の呪いが解けたのか？ どうして？ 違う――

「……どうしたの？」

「なんでもない……です」

安堵するべきだったが、呆然と言ったほうが近い状態に陥った。
二度と少年の姿に戻れないのか？ だとすればもう楽土を名乗ることができない……。

「状況が変わらないな。そんなに船と離れていたのか。衝突しなかったのはいいが」

救助されない現実に頭を掻いて王子が疑問を呈した。若干早口に
そしてふと思いついたように言った。

「もしかしたらハリノガイに捕まったのかも――」

「ご名答だ。ガイートル」

突然聞こえた第三の声にシレイネは飛び上がった。

きよろきよろと周囲を見回す王子が何も見つけられず首をひねる。

「誰だ？ 聞いたことのない声だ」

「語りかけたことこそないが、最もおまえの近くにいた私だ」

「知らない、そんな者は……」

舟底の真ん中にカタツムリが這っていた。シレイネはよもやとそ

れをじつと見つめる。カタツムリは音を運ぶ虫だと信じられている。一説には人間の耳にカタツムリの殻の渦に似た器官があることから信仰だという。現実には、音を伝えるのはこの空に満ちる空気だ――。

カタツムリが、つのを出して左右にほよよんと揺らした。

「内密を約したからな、知らないでよいよ。この舟は通行証を所持していないので、ハリノガイに捕らわれた。本来は徐々と浮力を奪われ沈みゆく定めだが、私が特別干渉してやっているんだよ」

「ここから出してくれるのか？」

まだきよろきよろしながら王子。

「出すだけは出してやろう。でないと後が恐ろしいからね。ちゃんと船に拾われるかはお前の運を試してみることだよ。……中途半端な助け方だと顔に書いてあるぞガイートルよ。だが仕方がない、娘と王子とともに朝帰りさせるなと月の姫に懇願されているんだからさあおいで、娘よ。病気の王子を先に帰りたいなどは考えないでいい。きみには一刻たりとも無駄にせずやり遂げねばならない仕事があるだろ」

「あ……」

ぬめとした頭をもにと傾けて懸命に槍を伸ばそうとしているかたつむり。槍を――手を取れ、ということなのだろうか。

「あ、はい」

「シレイネ！」

行ってしまうことに気づいてガイートルがどこか痛そうに慌てた。

「……」

けれど続く言葉、二人の交わりを続けるための言葉を見失って、ガイートルは空気を飲んだ。一度うつむいてからやっと、言うべき挨拶を絞り出す。

「さよなら」

この姿では、もう会わないだろう。「さようなら」理由のわからない胸の痛みを小さく笑って誤魔化し、シレイネはかたつむりへ指

先を伸ばした。

「クラヴィーアの練習、頑張つて。君の先生を借りっぱなしでごめん」

触れた指先から黄金の粒子が肌を染め変えるようなぼつてシレイネを海上から消してゆく。シレイス・アベールの存在を口にされて、シレイネが赤くなったのを、ガイトールは少しばかり戸惑うような顔で見っていた。風に吹かれる金の髪がきらきらと砕け散りゆく最後まで。

2

楽園の扉の前で、フェイドルとすれ違った。ガイトールは彼に自分から声をかけた。「フェイドル兄さん」

相手は少し驚いたようだった。驚かれると思っていなかったのがイトールも驚いた。すぐにフェイドルが声をたてて笑い出したので面食らうまでに驚きが進んだ。

「顔が今までとすっかり違うのに、前と同じように呼ぶんだな。呼び捨てでいいよ。僕は君の兄じゃないし、格上でもない」

「顔が、違う？」

何か付いているのか、とはたいてみるが、やれやれと肩を落とされただけだった。フェイドルはもういいよという雰囲気では話を促してくる。

「用件は？」

「明日は俺が勝ちます」

「無粋だけど、いい言葉だ。経緯と文脈ごとネタ帳に書き留めておくよ。他には？」

「部下はもうちょっと選んだほうが……もしくは教育を徹底するとか」

「そっくり同じ言葉を君にも返すよ。他には？」

「……」

柳に風で、かわされる。

「俺は保守派が噂するようなことは疑っていないけど——」
フェイドルに限って僅かでもあの事件に関与しているとは思えなかった。ただ、例の剣呑な騎士オーザンに関しては定かではない、と直感していた。

「ガイトール、このさい言ってしまうけれど、僕はオーザンが何事か火の精霊と悪だくんでは知っていたよ。どんな事かは調べた術もなかったし、妨害しようとすれば火の精霊に腕の一本は炭にされていたかもね」

「兄さん……」

「だからこうしよう、ガイトール。明日もし僕が聖霊獣の選定を受けられなかったなら、僕は僕をロートレグアンから自己追放にするよ。負けたら、だけどね。代償はその程度でかまわないかい？ もっと重いほうがいいなら——」

ガイトールは告白の衝撃による絶句から慌て気味に覚めた。フェイドルに責任を取ってほしい気持ちはなかった。けじめにしても重すぎる。

「いや、かまわないけど、それはでも」

「表沙汰にしない約束も入れた、二人だけの賭けということ。どうだい、僕はけっこう卑怯だろう？ 僕だって負けるわけにはいかないんだよ。フラツチェロ火山の精霊がね、男やもめなクウノコガネに恋慕しているんだ。一時は恋仲だったらしいが、こじれた挙げ句にクウノコガネがハリノガイに閉じこもってしまつて、以来会えない、しかしどうしても会いたいとお嘆きでね。信じられないだろう？ ロートレグアンを守るハリノガイが、痴情のもつれを原因に張られたものだったなんて。とにかく同情した僕はハリノガイを彼女のために取り払ってやりたいと、それで帰って来たんだよ。僕を動かす原理は詩になるかならないか、それだけ」

「痴情のもつれ……」

煙に巻かれているような気がしてガイトールは答えあぐむ。

「君は、ハリノガイについてどう思っている？」

試すように訊かれた。

「……周辺諸国のロートレグアンに対する感情は知ってる。天与の守護に胡座をかくべきではないと思う。でも、ロートレグアンの平和と繁栄、そして芸術は人間の遺産だ。俺はこれらのために、国民のためにハリノガイを守る」

「君が何故だい？」

「どうせ憎まれて命を狙われるなら、立ち向かってやる。求められないなら、有用を証明すればいい。俺は開き直すことにした」

ガイトールは樂園の大扉を睨むように見て、言い切った。

「ガイトール、最後になるかもしれない今、もう一つだけ助言を残していくよ。輝粹泉にちよつと飛び込んでみたら、君はもつと真実に近づけるのかもしれない。最近君が知りたがっているらしい守護者のこととかね。安全は保障しないけど、特になんともなかった女性もいることだし」

「兄さんの助言はためになる」

困惑しながら精一杯本音で返したガイトールの横をすりぬけ、フェイドルは樂園の扉を譲った。健闘を励ますよう肩を叩かれる。

「ヒノダイなら中にいるよ。会いに来たんだろう？」

すべて見通されている。参った笑いで頷いて、フェイドルに見送られた。

扉を開いた途端に火炎が眼前で逆巻く。ガイトールは熱球の中から、手の短剣を勘だよりに放った。とす、と手応えがあつて炎の勢いが滅した。

「死に損ないが！」

肩口に刃を受けたヒノダイが硝子天井の下で憤怒していた。刃の刺さった傷口から零れる陽炎を手で押さえながら、怒りに眩んだ目をさらにつり上げる。

「お前は実体化するとき人間の身体を便宜以上に模倣してる。痛みまで感じるんだな」

人間に恋し、近づこうとした名残だろう。

「小僧、貴様！」

「腹を立ててるのはこっちだ！」

ガイトールは両の拳を握り下ろして叫んだ。

「一対一で嫌がらせしてくるのは構わなかったよ。でも今度のは陰湿すぎるだろ！ 精霊の風上にいる聖霊獣のすることか？！」

「どうでもいいんだ、貴様さえ死ねば！」

「俺が死んでもカルミナ皇女はお前のものにはならない！」

背筋が凍りつきそうな表情をヒノダイがした。炎なのに。

「だって母上はもう、戻らない」

噛んで含めるようにガイトールは区切った。相手は長寿の精霊なのに。

「それがどんなに辛いかわかってなかったよ、ヒノダイ。俺は母上を失ったわけじゃない、初めからいなかった。だからわからなかった。誰かにとっての誰かがいなくなることの辛さが。本当の意味ではけして。だけどやっとわかった。俺を命がけで守ってくれた子がいたから。命がけで守られるのは二度目なのに、十七年かけて鈍感だな俺。確かにあれはキツいよなヒノダイ。お前がなぜ腹を立てていたのかわかった。お前が憎んでいるのは俺じゃない。カルミナ皇女だ。死んだ母上が許せないんだ」

ヒノダイは目を逸らして吐き出す。

「生意気な口を叩くな！ 貴様には息をする権利もない！」

「そう言っただけなのか、ヒノダイ。俺も父上に、いつそはつきり怒りをぶつけて欲しいと思ったことがある」

ヒノダイがガイトールに向ける感情は嫌悪だ。憎しみとは愛を裏地にしているものだから。ヒノダイもガイトールも、己に対して愛着は持っていなかった。己を燃やして存在するのが火の精霊だ。

「お前も母を亡くしてる」

焼かれる前に、ガイトールは拳を頬に当てて示した。「前から思ってたけど、殴ったほうがすっきりするんじゃないか。せつかく肉

体をつくってるんだからさ」

ガツと顔の内側で音がした、ぐらいの衝撃が間髪入れずに来た。踏みとどまるのが精一杯のガイートルの腹にもう一発。さらに容赦なく蹴り上げられて膝をつく。

「ちよつと待つ」

「ああ？」

鼻面に膝蹴り。顎に追い打ち。反撃の隙間がない。

「殴り合いなら勝てるとも思ったのか」

髪を掴まれて草の地面に打ち付けられる。渡り合える自信がなかったと言えは嘘だ。陥っている形勢の不利も、野蛮な泥仕合に慣れていないだけだ。振り上げて闇雲に狙った手でヒノダイの三つ編みを掴んだ。力任せに引つ張って懸垂した。引き倒す弾みで高さを取り戻す。ヒノダイの足を払い、倒れた頭を踏みつけた。ねめ付けてくる情熱の瞳を蹂躪した。その足を軸に取られて経験則にない方向へ放り出される。人間の感覚じゃない。重心を理解した武芸の勘に乗っては来ない。

投げ出された地面で受け身を取ってガイートルは逃げた。

こちらの間合いで待ち受けたヒノダイに渾身の拳を打ち込んだ。

ヒノダイは被る力（うむ）の殺し方を知らなかった。

「俺は本当に解せないよ。そこまでのわからずやの感情さえ動かし、絶対不利だったはずの父上の献呈がどんなものだったかが」

「最低だった、あんなものッ！」

沈んだ地面から頭をもたげてヒノダイが吐き捨てる。

「——ホウ。確かに前代未聞であつた」

「あれはまあ、坊やが逆撫でされるのも無理はなかったわね」

「惚けちまつたわけじゃあないが、あれはどこが終わりでよかったんかいの。そも終わっていたのかいな？」

硝子球天井の水槽に舟を浮かべて並んだ鳥獣魚たちが、のほほんと観覧し雑談を連ねた。

ガイートルはさりげなく後退して禁忌の泉に近づく。

手を友好的に振って挑発すると、案の定、火矢のごとく猛進して殴り掛ってきた。

「ほんつとお前ってしつこいな——」

吹き飛ばされながら失笑し、ガイトールは泉の縁で足をもつれさせ、頭から輝粹の奔流へ突っ込んだ。ざっばん、と、時の粹の弾ける音がした。

「楽士さま、青白かった顔色がこのごろだんだん変わられて参られましたわね。お衣装の差し色、一段階淡いものに変えさせましょう、ええ」

明日は献呈儀式の日だというのに？

後一日しかなくて間に合わせられるのだろうか、と人事ながら目を丸くしたシレイスである。

「総動員致しますので、ご心配なさらず。あした青白い顔でいらっしやらないくださいませね」

「は、はい……」

しかしサアンヌのこだわりは常人の域をはみだしたところがある、と改めて思う。ときどき煩わしいほどだが、こだわりの強さを父に疎まれてきたシレイスとしては、人の振り見て我が振りに気が付く経験と、なった。シレイスの音楽馬鹿な堅物さも、外から見るとこゝう変人めいているのか。

そのうえシレイスにはサアンヌのような華もない。

盗み見たサアンヌの仕草があまりに流麗で美しく、真似してみていたら、すと見とがめた彼女に怪訝な顔をされてしまった。

「い、いや、あの、こんど創る練習曲に織り込もうかと思って。その、きれいな仕草だとか、音楽に、ええ、なりますよ……」

「まあ、おかしな楽士さまですこと」

ふふふふ、と笑う声音も美しかった。

意識せず、彼女のような奇麗さに憧れる気持ちが心の奥底にある。花やかな香水の香りも、結び上げた髪の娘らしさも、音楽と引き換えに捨ててきたものだった。

楽園でヒノダイに何事かを指摘されたとき、とっさに強く否定しなくなっただのはこの気持ちの裏返しだったのだろうか。ツキノムラサキの親切を怨んだこともなければ、彼女にもらった少年の姿で生きることに後悔なんてなかったはずなのだけれど。

「サシン寂しくなっちゃう。明日でシレイスくんが来なくなっちゃうなんて。あんただんだけの侍女を失恋させてくつもりよッ責任取りなさいよッ」

「修道女のほうがそそのめるのは理解する。完全同意。禁断なる世界にひそむ甘美な冒涇の誘惑……」

壁際に並ぶ侍女たちが嫉妬に腹立てそっぽを向いた。

そのときよたよたと入ってきた人影に注意が集まる。足を引きずってクラヴィーアに向かっていたのは痣だらけ擦り傷だらけ右目をむくりと赤黒く腫らしてさえるガイトール王子であった。どこから漏れているのかわからない血は手の甲で拭き取り切れずまだらになった。

「トール！　どこの間男にやられたんだ！」

「ある意味、というか間男になり損ねた男にね……」

どっかと隣に腰下ろし、無残な目付きでシレイスを見下ろしてき

た。

「楽士」

「はあ」

シレイスは身構えていた。誘拐事件からの二週間あまり、顔を会わせるたびガイトール王子が何か訊きたそうにしているのがわかった。なかなか口火を切ることなく、緊張は都度に持ち越されてきたのだが。

あれは、おそらくハリノガイに捕らわれていたせいだろう、夜が明けても少年の姿に変化することなく済んで、秘密は守られたと安

堵していたけれど。——全般的に薄暗がりだったといえ活劇し、結構、いやかなり近くで過ごしたあいだに、娘と少年の共通項を見いだされてしまっていたかもしれないのだ。

「あの、さ」

「はい……」

「修道院の、見習いの、シレイネ」

「……」

シレイスはがっくりとうつぶした。献呈儀式を前にした今日、いよいよ来たか。

「君と彼女は、特別な何か？」

「………はい」

「………。。そうか」

シレイスよりも遥かに深々とガイトール王子がうつむいた。

「そうか、おめでとう、お幸せにな」

「はい？」

「君の才能ならすぐに経済力もつくだろう。まだ見習いで、間に合ったな、良かった、うん」

「あの、いや、何の誤解でしょうか、彼女はただの生徒ですが……？ え？」

「え？」

落とした首同士、捻り合って見合わせる。

「はい、ただの………特別に見込んで教えている生徒ですね」

「そうなのか。でも——」

けっきょく眉間をひそめて、少し考えて何かが面白いように笑みながら首を振って諦めるように微笑して——痣と腫れのせいであまりにも痛々しい——そしていきなり物凄い破壊力でシレイスの背中を張った。

「楽土、彼女の言葉は注意深く聞いてやるんだぜ」

何かまだ誤解をつづけたまま快活に言った。

王子が十面相ほどしていたそのあいだにずっとサアン又以下侍女

たちによる清拭、消毒と整えの手が入っている。

鼻血はきれいに消えたが口の端の切り傷は忘れず血を滲ませる。

「ヒノダイと対決を？」

「ああ。まあなんとか、気を晴らさせてやってきた」

ボロボロを晒してから言っても負け惜しみにしか聞こえなかったが。

「それはおめでとうございます」

肩をすくめてガイトール王子は、前途は多難、を示す。

「まあでも、あとは楽士、君が聖霊獣の心をつちり掴めばこちらのものだから」

「はあ……」

表紙の綴じられた総譜をクラヴィーアの上に見つめる。管弦楽部分に関しては多大に父の助言で経験のなさを補ったが、このクラヴィーア協奏曲は紛れもなくシレイスが完成させた初めての交響楽である。

シレイスが最終楽章で迷っていたのは、この曲の意味だ。三楽章からなる物語が、何を語って終わるのかということだ。抜け落ちていた曲の意味は、それを現実において失いかけて初めて明確に浮き上がった。

誰がシレイスに、何のためにこの音楽を書かせたのかということ。シレイスがこの音楽に見落としていたのは、ガイトール王子への信頼だ。初め、確かにそんなものはなかった。シレイスは王子のへらへらした逃げの態度が気に入らなかった。だから、終楽章で行き詰まった。王子への信頼なしに、王子を王と認めさせる音楽をつくれるはずがない。

けれど、この音楽をシレイスに頼んだのはガイトール王子だ。シレイスの弾いていたクラヴィーアを耳に留め、シレイスを、初めて作曲者として認めてくれた他人だ。シレイスの音楽を見いだしてくれた人だった。

果たしてそれを、芸術と言えるのかどうかはわからない。でも、

シレイスが書くべき、今のシレイスに書ける最高の音楽があるとしたら、音楽を創る喜びに満ちたこの音たちだった。

わかってからは筆は迷うことがなかった。

「すごく、楽しみ」

ガイトール王子は橙の髪を陽の中で揺らして、純粋な好奇心だけの笑みをはりめぐらせて、めちやくちなラシドミを指一本で繰り返した。

「あの」

シレイスには気掛かりがある。音楽には本当を込めた。けれども楽士シレイスは、嘘いつわりの塊であるままだ。

嘘いつわりから脱皮したガイトール王子の前では、後ろめたさが日に日に積もった。告白などできるわけもないのだけど。

そう、告白などできるわけがなかった。

3

国旗、王室旗、軍旗に、教会旗がとりどりにはためき、快晴の空を飾る。壮観な近衛の整列。貴重な催しに浮き立つような貴族たち。見学席を確保するため朝早くから乗り込んできているルナーグの市民たち。軍楽隊の誘導に導かれて貴賓席に登壇する大臣、教会人たち。王宮庭園の中央部、幾何学に刈り込まれた低木が囲むひろびろとした園に、低く大理石を敷いた舞台が整えられ、楽団席を配置した。指揮台の手前のクラヴィーアは見事な磨きがかけられた飴色の屋根をもたげ、奏者の登場を待ち構えている。

「父上の差し出された献呈芸術、何ですかあれは」

呆れを含んだにやにやとした苦笑を口元に、玉座の右側の座に腰下ろしたガイトール王子。

国王シオールは胡乱げな眼を息子に流した。

「誰に聞いたのだ」

「過去を見る機会があっただけです。ヒノダイさえ口は固く秘匿義務を守っていました。もっとも、誰だって正気じゃ語れないような内容だと思います」

物語という体裁は整えられていたものの読んで赤面せずにはいられない青さと情熱を秘めた中身といえは。

「あんな、ただの……のろけ話」

「しかも未完で提出してやった。あの頃もうカルミナは孕んでいたからそれを証拠品にな」

居直るようにシオール王は、歪めて釣った口の端からぞんざいな告白を吐き出した。

「つまりお前も献呈の一部ということだ」

「火に油を注ぐようなことを……」

人を食った父だとは思っていたが聖霊獣まで食ってどうするのか。だが父シオールは実際に聖霊獣の長たるクウノコガネに食ってかかったことがある。輝粹泉の奔流の中で視た光景の一つは、ガイトールが生まれて三日たたないころ、塩を片手にカタツムリを脅すシオールの姿だった。カルミナ王太子妃が産褥に死してから度重なるヒノダイのガイトールを狙った襲撃、とどめの惨事に忍耐のねじを飛ばされたシオールは年齢を差し引いても形相が違っていた。

火の精霊に大やけどをおわされた息子の命の保証をクウノコガネに求めて、シオールはハリノガイを質にとった。

すでに聖霊獣の承認を得て王位に就いている自分だ。いつでも輝粹泉を壊しハリノガイを取り払ってやる、もしあなたが子息ヒノダイの暴走を看過しつづけるのであれば――。

ハリノガイはこの星のためにあるものだ、とカタツムリは槍を弱らせて言った。知ったことかとシオールが冷酷かつ無責任に詰め寄った。星が滅びようと知ったことか、カルミナとの物語が終わることを考えてしまったら。

クウノコガネがガイトール王子の守護を引き受けた顛末だ。

「当て馬が派手だからな、名作にならんはずがなかるう」

ヒノダイは襲う相手を間違えていると思うが、それができればとつくに、カルミナを娶られる前にやっているだろう。

反対側の座からフェイドル王孫子が呼ばれて立ち上がり、舞台へ向かった。

今回特別に市民の入場が許されているのは、異例の後継者決定を過程から公開することで正当なものとして公に認知させるため。負ければ敗者の態度も耳目を集めることになる。ガイトールは、もし負けた場合にちゃんと悔しい顔ができるかどうかのほうに気掛かりだった。また俺はへらへら笑って誤魔化すんじゃないだろうか、などと考えてしまった。そもそもが、自分は芸術というものを理解していないし、さらに言えば王という地位の価値も。ガイトールはそうして、献呈芸術という儀式の意味にまで思いを至らせた。ロートレグアンは不思議な国だ。芸術の価値で王を認めるなど、呑気極まらない話。

フェイドル王孫子は一遍の長大な叙事詩を語り始めた。俗に聖霊獣からの認定が難しいとされる叙事詩は、言葉を捻れば陳腐になりがちで、捻らずば冗長になりやすい、歴史を下敷きにするが丸写しは淡々として華がなくなる。短い韻詩を連ねて人の機微と壮大な戦記の両方を織り上げ綴らねばならない、編むにも理解するにも高難度の芸術だ。音楽は、作り手にとって生易しくなくとも聞き手にとって理解がたやすい意味で認定例が多い芸術だとされる。聖霊獣にとっても知識より感性に訴えるものの訴求力の方が強いということだろう。

さすがフェイドル兄の綴る詩は格調高くありつつ感情に訴える力を持つ最高級の物語だった。語られるのは一国の興亡。戦神のごとき武運知略を持つ英雄が、大帝国に虐げられていた民を救い、新たに建てた国の王となり、厳正なる法にのっとった善政を敷くが、時とともに歯車の狂ってゆくという話。男は人を愛したことがない。男は人に運がない。戦場と違い、平時に生きる限り男は友や女に騙され騙され酷い目にばかり遭うのだが、しかし男には強靱な理性が

あつて、けしてそれを失いはしなかった。権力の座にあつて男はいくど人に裏切られ続けても暴虐をしなかったが、年を経ること人にも同じ理性を求めるようになっていった。変化は法の厳格化に表われた。誰が誰に悪意を持ったわけでもないのだが、しだいに国中は殺伐と荒れ、日の昇るようだった興隆の勢いは失われ、弱体となり、やがて元の鞆なる帝国の支配下に吞まれた。王は斬首となつた。

自由のないところに幸福なく、幸福なきところに発展もありえず、という話だ。叙事詩はもうひとつ双子のように似た建国経緯を持つ国の物語へつづき、そちらの国は法を軽視して滅びる。

この叙事詩に綴られる物語に比べればシオールの献呈はいかにも他愛ないと思われるのだが。

物語は教訓を語ることもあれば理想を語ることもある。シオールの生きてきた半生はある意味で理想かもしれない。そこには失つて激痛を胸にもたらず愛があつた。

芸術は人間の、意外な姿を暴く。人間の、最も人間らしい部分を。（ああ、それで……）

だから聖霊獣は、王に芸術と関わらせるのだ。

よく人間を知る王であれかし、と。

フェイドルが舞台を降りると静かに感動を伝える拍手が潮の満ちるよう湧き上がった。普通ならばこれで文句なく合格できる、合格しないわけがない傑作だった。聖霊獣から認められた芸術の創り手にはクウノコガネからの祝福がある。

固唾を呑んで見守る観衆の前で、無人の空間に頭を垂れたフェイドル。その前方、宙空から少年の半身が空間を割って身を乗り出すようあらわれて、観衆を驚かす。

「精霊の子のよ。素晴らしかった。素晴らしく懐かしい朗読だったよ。二百年ぶりに聞いても褪せぬ叙事詩であることだ」

「どういたしまして。やっぱりバレましたよね」

悪びれもしない微笑をたたえ、フェイドルは過去の献呈芸術からの盗作を、認めた。

ガイトールは眉間を寄せて、ひそひそと囁き交わされるその会話を聞いた。

「挑発のつもりかな」

「いえ。僕は今興味のある事柄じゃないと創作できないたちなんですよ。しかし、僕が今もつとも興味のある事柄を披露してしまうと、あなたがお困りになるはずですよ」

「べつに私が困るわけじゃないんだが、無用な騒ぎを人界にもたらしたくもないからな。お前は私を目の前に呼び出すためにこの競い合い、引き受けたのだらう。輝粹泉に興味を示す要注意人物であると報告されているよ。何が望みだ」

「それとこれとは別の用事なのです。あなたを呼び出したかったのは火の壺山の女神フラチエリダからの恋文を届けるためです。これを」

懷から人には見えぬ何かを取り出して渡した。

「本当はフラチエリダの恋のためにハリノガイを砕いて差し上げるのも詩人の本懐かとは思ったのですが」

「人のためを思うならよすことだ」

「ええ、ハリノガイの真の役割について知りたくて、各地の古伝承を集めてまわり、またヒノダイから過去の献呈芸術に表現された、現代では失われた神話などを聞かせてもらった末、僕なりの仮説を得たのです。何故あなたが七獣、最も強大な粹の色を持つ方々が、蓋の内側にその身を閉じ込めておられるか」

「私に正否を問うか？」

「いえ。あなたの口からそれを聞く権利を持つのは、ロートレグアンの王と認められたものだけでしょう。僕は不合格となった。これにて退場いたします。早くこの窮屈な衣装を脱ぎたくてしょうがないんです」

「賢明なる子よ、よい旅をするんだよ」

「フラツチェロ火山には近づかないようにしないと、女神に怒りの溶岩を見舞われてしまうでしょうね」

ガイトールはごつ、と響いた音に、空のフェイドルの席の後ろを

見やった。控えて立つオーザンが椅子の背に重々しく拳を打ち付けた音だった。

無理もないなと気の毒に思う。フェイドルは己を卑怯と評したが、その通りだとガイトールは頷いた。

さて、フェイドルが王に形ばかり謝罪の礼をとって儀式の園から去ったあと、ガイトール王子の献呈芸術が披露される番となる。王孫子フェイドルは失格したが、まだガイトールの進路は白紙だ。

待機していた宮殿から園へ出てきた楽士シレイスは、がちがちに緊張した面持ち。のほほんと息子の後を歩くイオニア・アベールの余裕とは対照的である。指揮台上った父の後ろでクラヴィーアに着いた。先手披露の鑑賞をしているどころでなかったのは幸か不幸か？

少年の繊細な両手が鍵盤に置かれた。

『この和音は空虚五度と言って、ふつう三音で和音にするところ真ん中の三度を抜いているので、不安定な、何か足りない音になるんです』

経験こそ不足だといってイオニアの助言を心の支えにしていたが、音楽理論は少年楽士の中で研究しつくされていた。ガイトールは知っている。

『ヒノダイの粹の音色はこの和音に似ているんです』

楽士が音楽を語るときの目は透徹する。どこか完全な調和の世界へ精神は行ってしまったているような、神懸かった純粹さと知性を浮かべ、それ以外のとき見せる遠慮をまったく剥いだ口調で生き生きと王子に説いた。

『音楽の中の不安は、簡単に解決できるんですよ。属和音から主和音へ、旋律は動きたがりまず、動きたいほうへ行けば、ほら、解決できる。不安な響きがなくなりました。面白いでしょう』

七聖霊獣の粹を織り込んでゆく交響楽の中で、楽士が最も気に入っていた箇所はツキノムラサキを描いた音階旋律だ。夜のしじまに差すやさしく硬質な光——低音から高音へ駆け上がってトリルする

繊細で高貴なひとすじ。

『さあ、光を浴びにいきましょう』

通し弾きがその箇所にくると、曲想を確かめるように必ず楽士はそつと呟いた。

——光を浴びにいきましょう。さあ

ガイトールは目を瞬いた。耳に甦った彼女の声。差し伸べられた手の記憶とともに。それは楽士の言葉と同じ。クラヴィーア演奏において繊細な感情表現の指示としてその言葉があるなら、師弟のあいだに飛び交っていてもおかしくなかった。あの二人は声も抑揚もよく似ているな、とふと思った。

三楽章はスパードンⅡサズ・ラミスタの拍子が通底して取り上げられる。

『シレイス君はどうしてサズ・ラミスタの舞踏に入れ込むほど興味を持ったわけ？ その踊りつてむんむんしてるわけ？ そうなんだなこのむつつり坊主』

ある日、真面目で大人しい楽士と情熱的な舞踏の結び付きが解せないキューグが放った疑問に、楽士は困った様子を見せた。自分でもわからないふうに。

『楽士はむつつり情熱家だと思うけど』

ガイトールが言うとき驚いた顔をしていた。

『何があっても、死んでもクラヴィーアから離れないっていう魂を感じるよ。俺はそういうの羨ましい。俺だってスパードンの血が流れてるはずなんだがなあ』

楽士が、舞台からガイトールを見ていた。クラヴィーアを激しく奏でながら、管弦楽団のうねりを引き連れながら、音楽とともに問いかけ、音楽とともに励まし、音楽とともに感謝を告げるように、見ていた。感謝など、受ける筋合いのものではない。ありがとうと言いたいのはガイトールだ。

この音楽。

全身に響いて心を揺るがすこの音楽を作り上げた楽士に。

芸術を知らなくても、誰にだってこの音楽を感じ取ることができ
るだろう。

一音一音に溢れた想いの、真実を。

——涙が一雫、落ちた。

上空に姿を隠した七聖霊たちはめいめいの姿勢で献呈を聴いた。
スイノミドリは火の精霊のただ漏らす涙に気づいたが、からかつ
てはやらない。

珍しくきりりと目覚めて耳そばだてているチノアカの背に人の姿
でもたれて至福の音色に彼女も聴き入る。まだ発明されて新しいク
ラヴィーアという楽器の可能性を思い、人とは思議な命だと嘆息
をつく。人はいろいろな感情表現の方法を持っている。あまた持つ
ているのに、飽き足らずまた新たに生み出していく。星を構成する
いかなる精をも材料にして。そしてそれらの結晶が、またこうして
精を楽しませに還ってくるのだ。

満足そうに愛し子の晴れ舞台を見つめるツキノムラサキの横で、
兄ヨウノシロが怪訝に首をひねりながら立て続くあくびに悩まされ
ていた。「聴いていたいのに、おかしいぞ、何故であろうか……」
それを見て妹がどうしてかゆるゆると嬉しそうに笑んでいる。

知恵深いジュノアオが、時の巡りを数える。

「——ホウ。そういえば今日は、確か」

手にした本を庇に太陽を見上げた。

「日蝕ではなかったか」

奇跡のようによく晴れていた空はにわかにかき曇る。否、雲も風
もないのにあたりがざわざわとした空寒さの予感に震えはじめる。

やがて月が太陽を黒く隠して束の間の夜が来る。月の姫が、漲る
夜の力を暗闇に放ち、舞台に月光を差し込ませた。イオニアは天体
の曲芸に動じず演奏を続けていた。今日の日蝕を知らぬは人の中で
世俗に疎いシレイネばかりであったから。そしてシレイネは、今は
目を閉じ、収束に向けてクラヴィーアを激しく一心に操っていた。

月の光の中で娘は真実を奏でる。
肩に流れる金色の美しい髪とともに踊り、
魂からの、偽りのない
音楽を。

「風に雲を払われたシレネーダは首をくくって死んじまった。シレネーダは星の裏側へ旅立って、もう帰ってこない。ばっちゃんの話じゃ、死んだ神々の住まう星空の裏側とこの世界とは、もうずいぶん距離が離れてしまったそうさ」

音楽院に主となって住み着くカシエダンという年のいった生徒には、悩みがある。

「取り残されたなあ、おれもすっかり、聖霊獣たちのように」

半信半疑の伝えだが、カシエダンの祖母の家系には古くを溯ると精霊混じりがいたという。名のない精霊に愛された祖先が寝物語に聞いた玻璃の蓋の真実を、カシエダンは自分と重ねて思い出す。精霊は星に起こるあまたの粹に宿る。寿命を迎え星空の裏側へ渡れば神々の仲間となる。神々の時代の終わりに生まれ、星の裏側へ渡りそこねた精霊たちのうち、強大すぎる力に育ち、溢れさせた者たちはこの世界に在るだけで、その存在の力が星を毒してしまうようになった。そこで彼らは時の粹をあやつって自らを殻の中に閉じ込めた。

もつとも、精霊混じりの子孫と法螺吹く者も、そういう者が決まって精霊はどうたらこうたらとか吹く法螺も、大陸にはいくらでもあった。

「音の楽園の中に取り残されたなあ」

暮れ落ちた中庭池の舞台上で、取り残された娘がもうひとり。

いや、娘はシレネーダのように、雲を払われて星の裏側へと逃げてきたのか。月が太陽を蝕した日からすでに七日が経っていた。音楽院からの出方を忘れたカシエダンの耳にも、ロートレグアンの世継ぎの決まったことと、芸術都ルナーグからいずれ世界を魅了する音楽家が誕生したことは噂にのって届いていた。誰が娘に誤解させ

たのだろう。そして今も誤解させているのだろう。男にしか音楽家の道をひらいてならないという法律などどこにもないというのに。その道はただ、辛く苦しく困難に満ちてあるだけだ。誰にとっても娘は蓋を開けたクラヴィーアの前で座ったきり、一音もそれを鳴らそうとしなかった。じつとうつむいてぼんやりしていた。鍵盤に手をかけることすらまったくしない。

毎夜繰り返されている光景。

彼女に声をかける精霊もないようだ。

「娘に音楽を与えるのはもう精霊じゃないからね」

カシエダンは音楽の地獄に通じる耳で、遠くからやってくる足音をとらえる。あした、あさって、未来に生まれる音楽を期待して笑みながら柱の陰の暗がりで見目を閉じた。幸福な音楽家の悩みは尽きない。

戸惑いがちに近づいた足音に、振り返った娘が肩震わせて立つ。

逃げようと後ずさったかもしれない足取りは中途にとまり、長い静寂のあと、何事かのやりとりが交わされる。幾たびか沈黙が挟まれ、影が動く。力任せにはせずに、手を取った。娘が顔を上げる。仰いだ相手の青く透き通った瞳の中に娘はおそらく、娘の本当の姿を見つけたのだろう。

踏み出したのは娘が先で、けれどたどりつく前にその身体は頭のとっぺんからすっぽり抱かれ。

一つに重なった影を月の光が照らしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5914q/>

『精霊よ、奏でるシレイネの喜びよ』

2011年2月15日17時40分発行